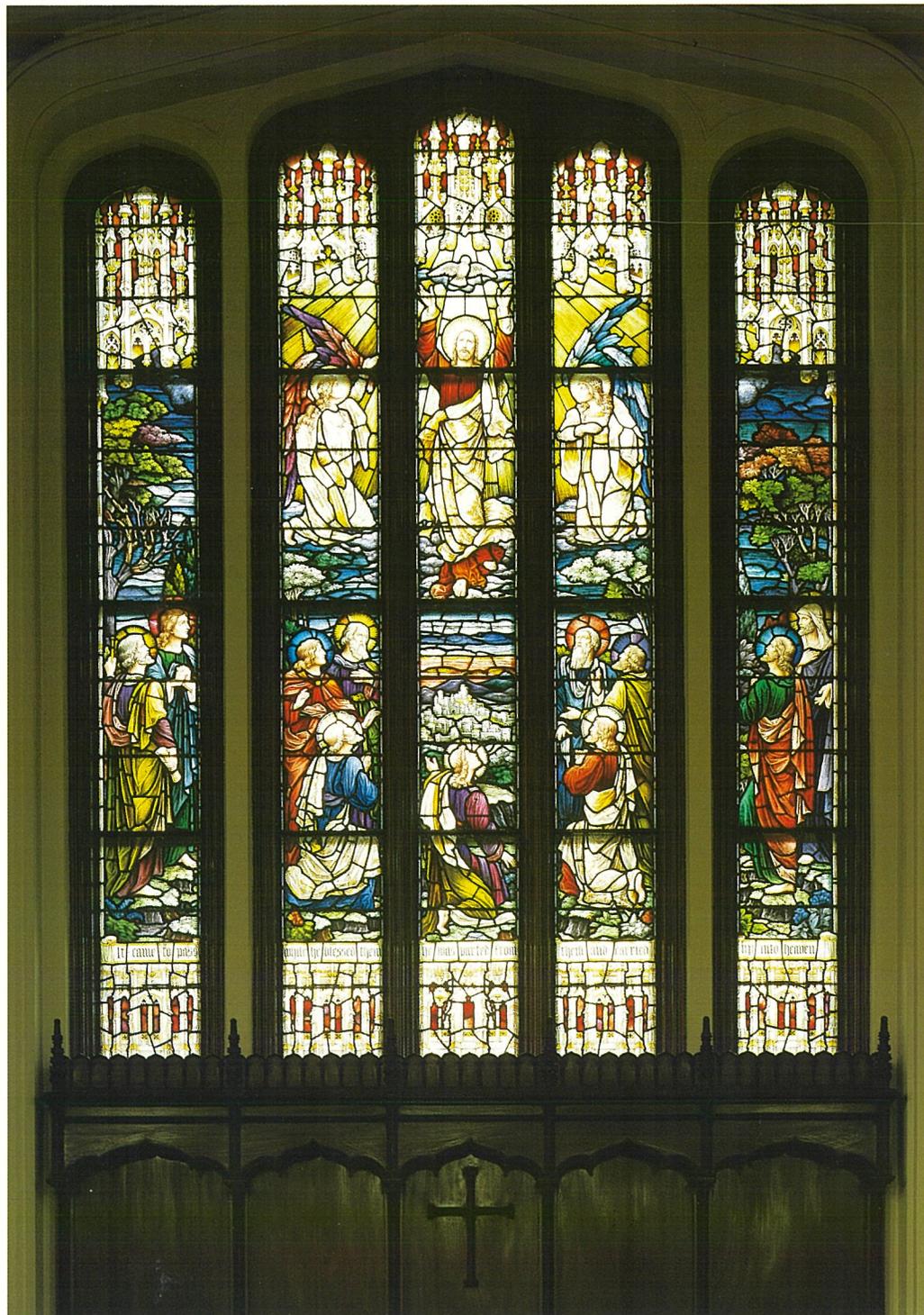


東北学院の100年

A Pictorial History of Tohoku Gakuin
1886~1986

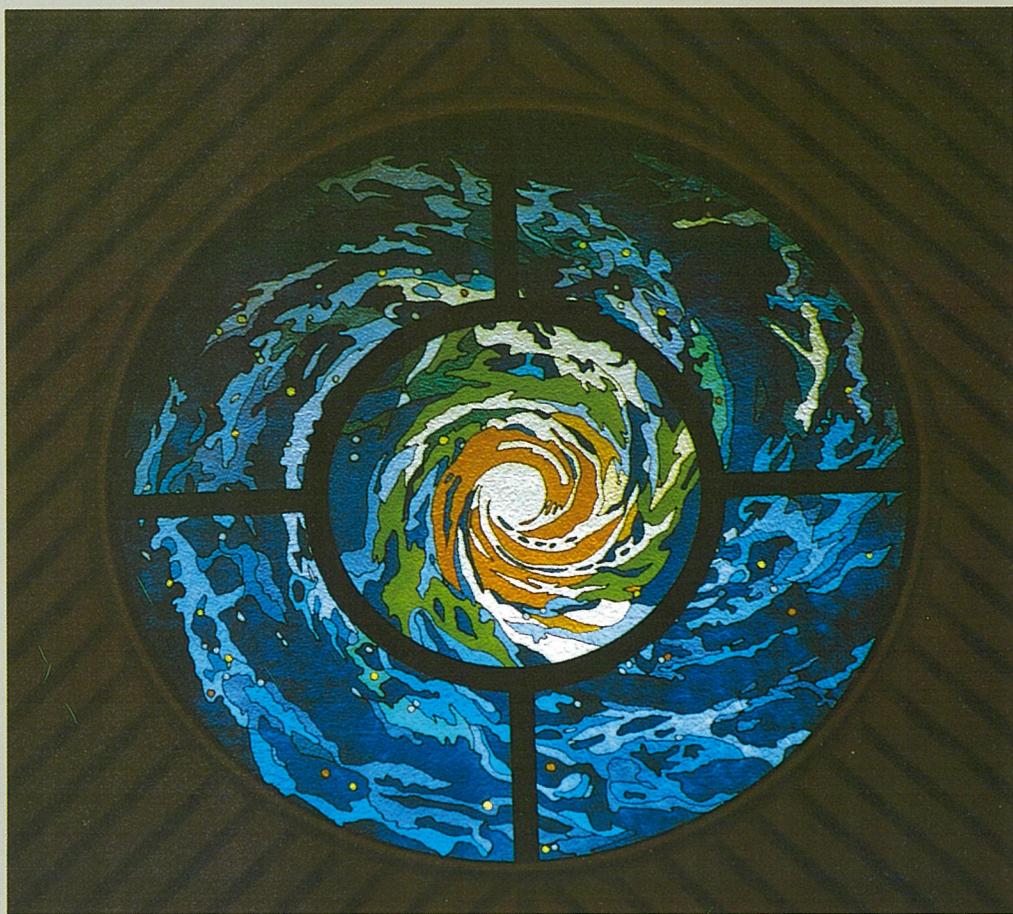


目 次

I	心の夜あけ(黎明時代).....	3
II	東北を日本のスコットランドに(草創時代).....	19
III	LIFE LIGHT LOVE (興隆時代).....	41
IV	我は福音を恥とせず(苦難時代).....	69
V	エホバを畏るゝは知識の本なり(復興時代).....	85
VI	地のきわみまでも(発展時代).....	101
	東北学院100年の歩み(英文略史・年表).....	137

刊行のことば

あとがき



第 I 章

心の夜あけ

黎明時代

1885(明治18)年以前

I 心の夜あけ

東北学院100年の歴史を、そもその源へと遡るならば、遠く16世紀の宗教改革にまで至る。ルター、ツヴィングリ、カルヴァンらに始まるキリスト教世界の変革運動は、やがてヨーロッパ各地に拡がって、近代世界を形作ることになるが、ドイツでは神学者のウルジーヌスとオレヴィアーヌスの二人が「ハイデルベルク信仰問答」を執筆(1563年)、ドイツやオランダの改革派教会の信仰の基準と定められた。当時、打ち続く戦火の中にあったドイツから、多くのプロテスタントが自由の天地を求めて新大陸アメリカへと海を渡り、その地に自分たちの教会、すなわち合衆国改革派教会(通称ドイツ改革派教会)を設立した。18世紀から19世紀にかけて、主として東海岸のペンシルヴェニア州においてである。この教会の牧師養成を目的として神学校がランキャスターに設けられ、他の教会立大学(フランクリン・アンド・マーシャル・カレッジやアーサイナス・カレッジなど)と並んで、同教会の教育・伝道に大きく貢献する。前者の大学からはこれまで実に17人の卒業生が宣教師として東北伝道のため来任している。東北学院とこれらの教育機関との結びつきは深く長いのである。

さて、19世紀はキリスト教の世界伝道の歴史でも「偉大な世紀」と呼ばれる。各教派が競ってアジアやアフリカの各地に宣教師を派遣し、活発な伝道を展開したからである。ドイツ改革派教会は、ようやく1878(明治11)年になって日本伝道開始を決定し、翌年最初の宣教師としてA.D. グリング夫妻、4年後にはJ.P. モール夫妻を送り、こうして東京を中心にした伝道が始まった。埼玉県の越ヶ谷教会、東京の番丁教会(のちに富士見町教会)、神田教会などはその実りである。1885(明治18)年12月、W.E. ホーイ(1858—1925)が三人目の宣教師として来日するが、その赴任先は未定のままであった。

このころすでに、日本にもプロテスタントのキリスト教が根をおろし始めていた。1859(安政6)年以来、横浜、熊本、札幌などに有力な伝道の拠点形成され、多数の有為な人材が生み出されていた。その一人が、旧伊予松山藩士の押川方義(1849—1928)である。押川は英学修得のため上京中の1872(明治5)年、キリスト教が未だ禁令のもとにあった時、アメリカ改革派教会(通称オランダ改革派教会)の宣教師J.H. バラの手から洗礼を受け、日本で最初のプロテスタント教会の一員となった。それは新しい時代の到来を待ち望んでいた押川にとって、まさしく「心の夜あけ」にほかならなかった。

1876(明治9)年、押川はスコットランド出身の医療宣教師T.A. パームを助けるべく新潟に移り、東北出身の吉田亀太郎らと協力して伝道に当たった。しかし、1880(明治13)年の大火を機に東北に転じ、仙台を中心として熱心な伝道を開始した。その成果は著しく、数年を経ずして仙台教会を主軸に、古川、石巻、岩沼などに教会が組織され、やがては中会が形成されるに至った。

かねて宣教師の来援を願っていた押川は、来日したばかりのホーイと出会い、協力の約束を取りつける。こうしてドイツ改革派教会は日本基督教会と協力し、仙台を本拠として東北を伝道圏とすることになる。



ルター
M. Luther (1483-1546)



ツヴィングリ
H. Zwingli (1484-1531)



カルヴァン
J. Calvin (1509-1564)



ファーレル G. Farel カルヴァン J. Calvin ベザ T. Beza ノックス J. Knox

ヨーロッパの宗教改革

16世紀の宗教改革はそれまでのローマ・カトリック教会の他に、ドイツのルター派、スイスの改革派、英国教会などプロテスタント諸教会を生み出した。東北学院の宗教的背景は、伝道と教育を共に等しく重視するスイス改革派の流れである。



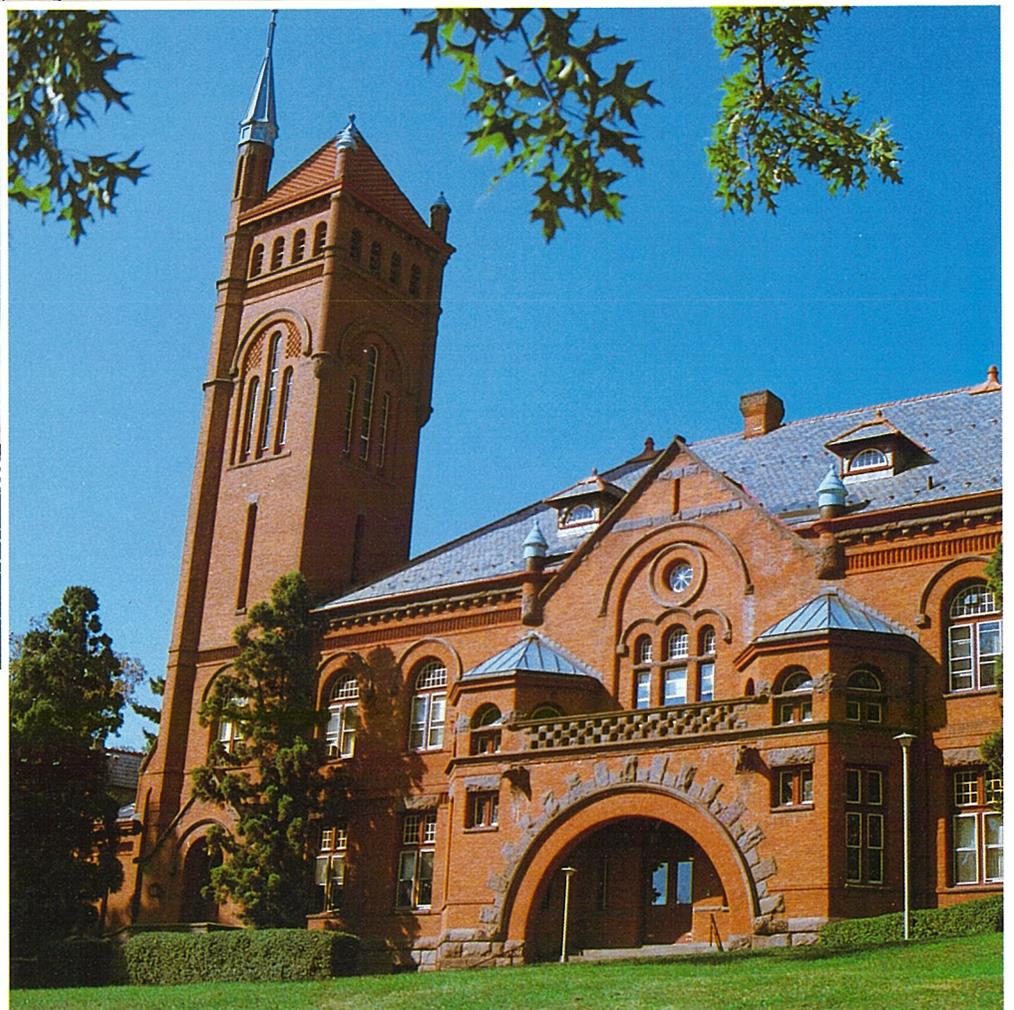
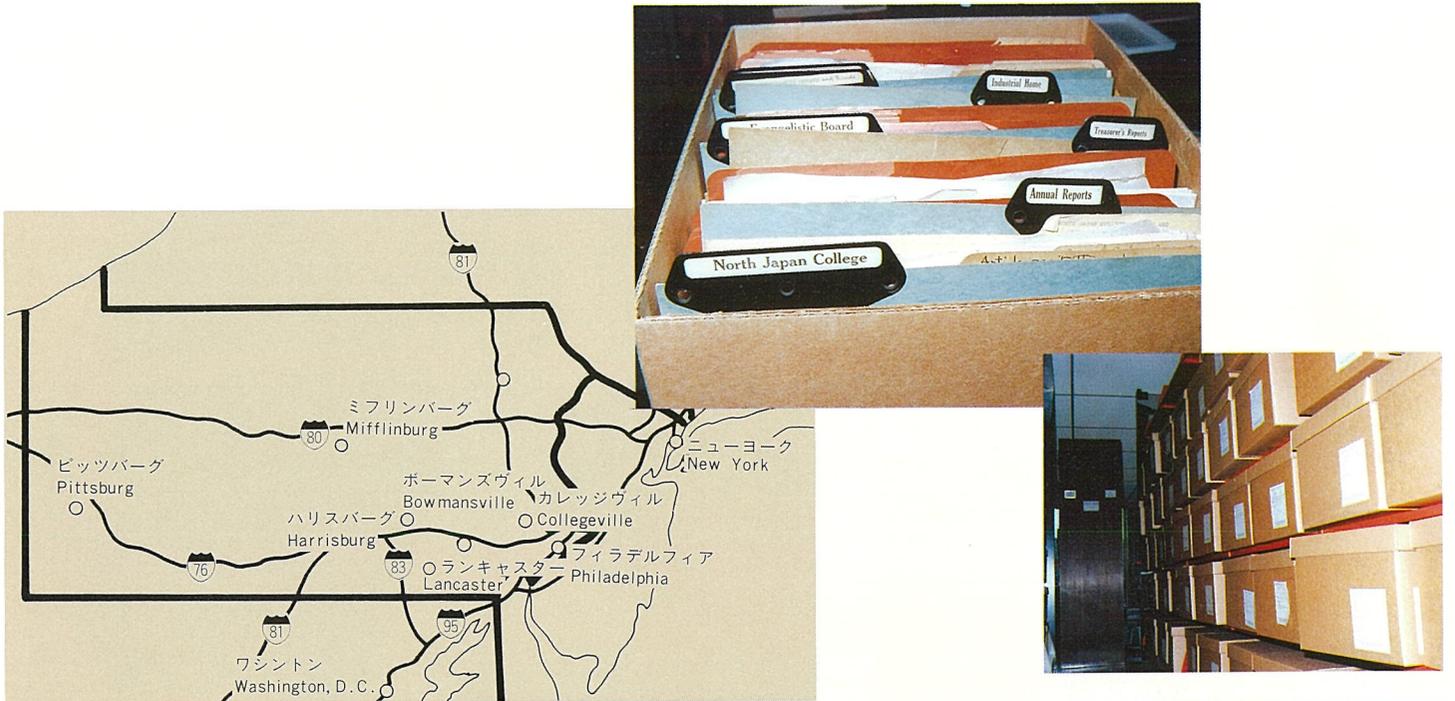
フランクリン・アンド・マーシャル大学
Franklin and Marshall College, Lancaster, PA.



旧本館
Old Main

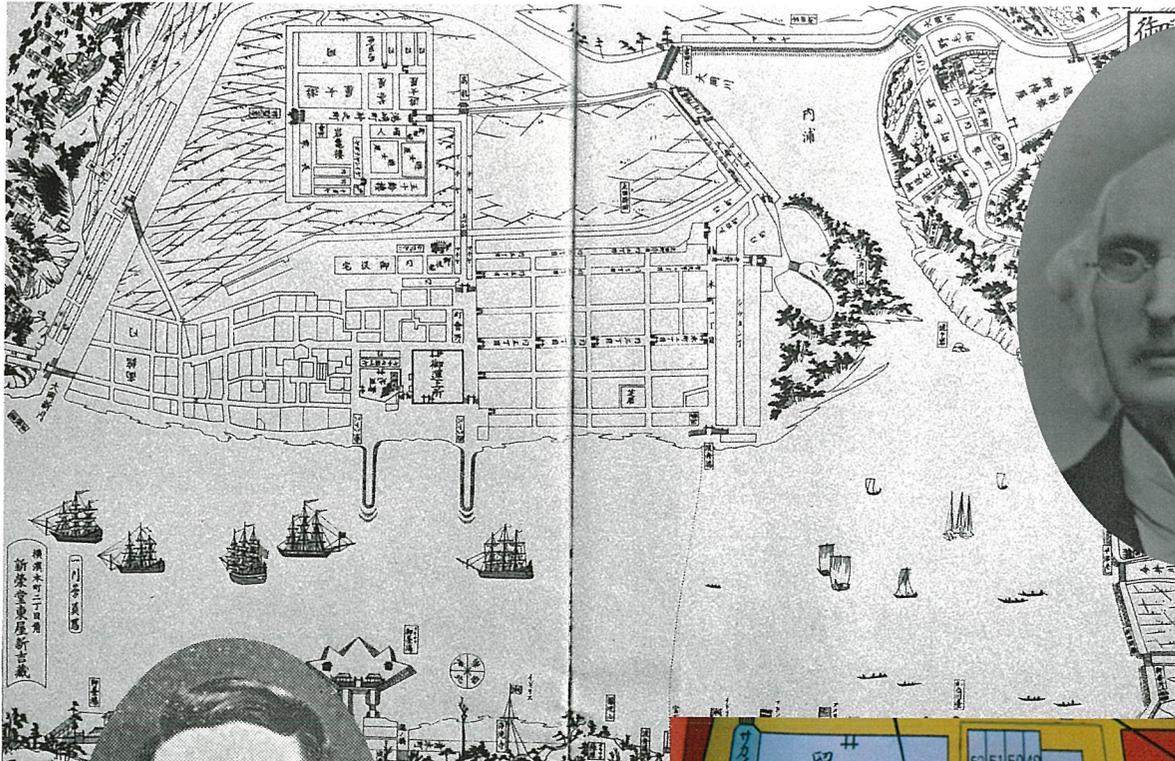
ランキャスターの神学校と大学

アメリカ東部のペンシルヴェニア州は、早くから信教の自由を許容し、多くの移民を迎え入れた。ドイツ人移民の作り上げた改革派教会は、数的にも財的にも決して有力な教派ではなかったが、旧大陸から携えて来た着実な教会形成を目指す伝統に立っていた。



ランキャスター神学校と文書保存庫 Lancaster Theological Seminary and its Archives

ペンシルヴェニア州で三番目に古いフランクリン・アンド・マーシャル大学(創立1787年)や、特にランキャスター神学校には、宣教師たちの公的・私的交信や報告など、日本伝道に関する貴重な資料が多数保存・整理されている。

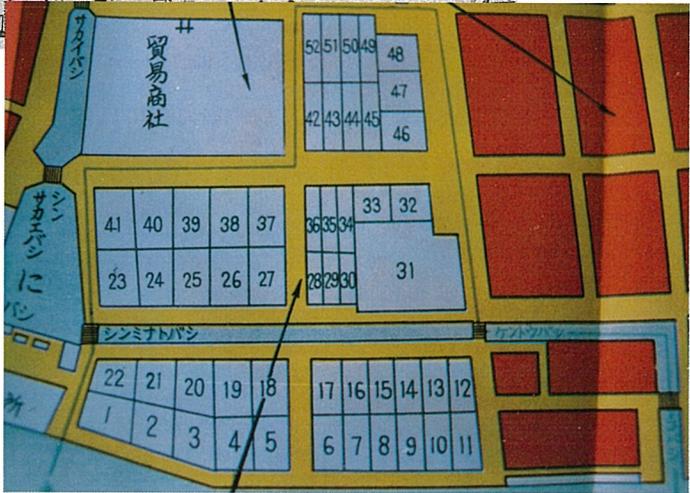


ブラウン
S.R. Brown



バラ
J. H. Ballagh

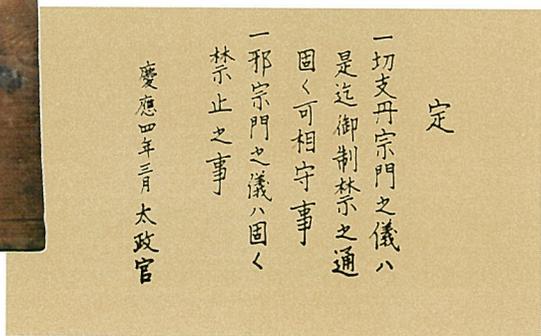
横浜絵図(『市民グラフ・
ヨコハマ』より)
Yokohama Port



築地居留地 Foreign Reservation, Tokyo



Edict Board against Christianity



横浜バンドとプロテスタント開教

キリスト教が未だ禁令下にあった時から、ブラウン、バラなど有力な宣教師たちが日本伝道に献身し、横浜には日本で最初のプロテスタント教会(日本基督公会)が組織された。ドイツ改革派は東京の築地28番地に宣教師館を購入して、伝道の拠点とした。

ドイツ改革派教会の機関紙
Reformed Church Paper

The Messenger

"As the Truth is in Jesus."

I.—NO. 48.

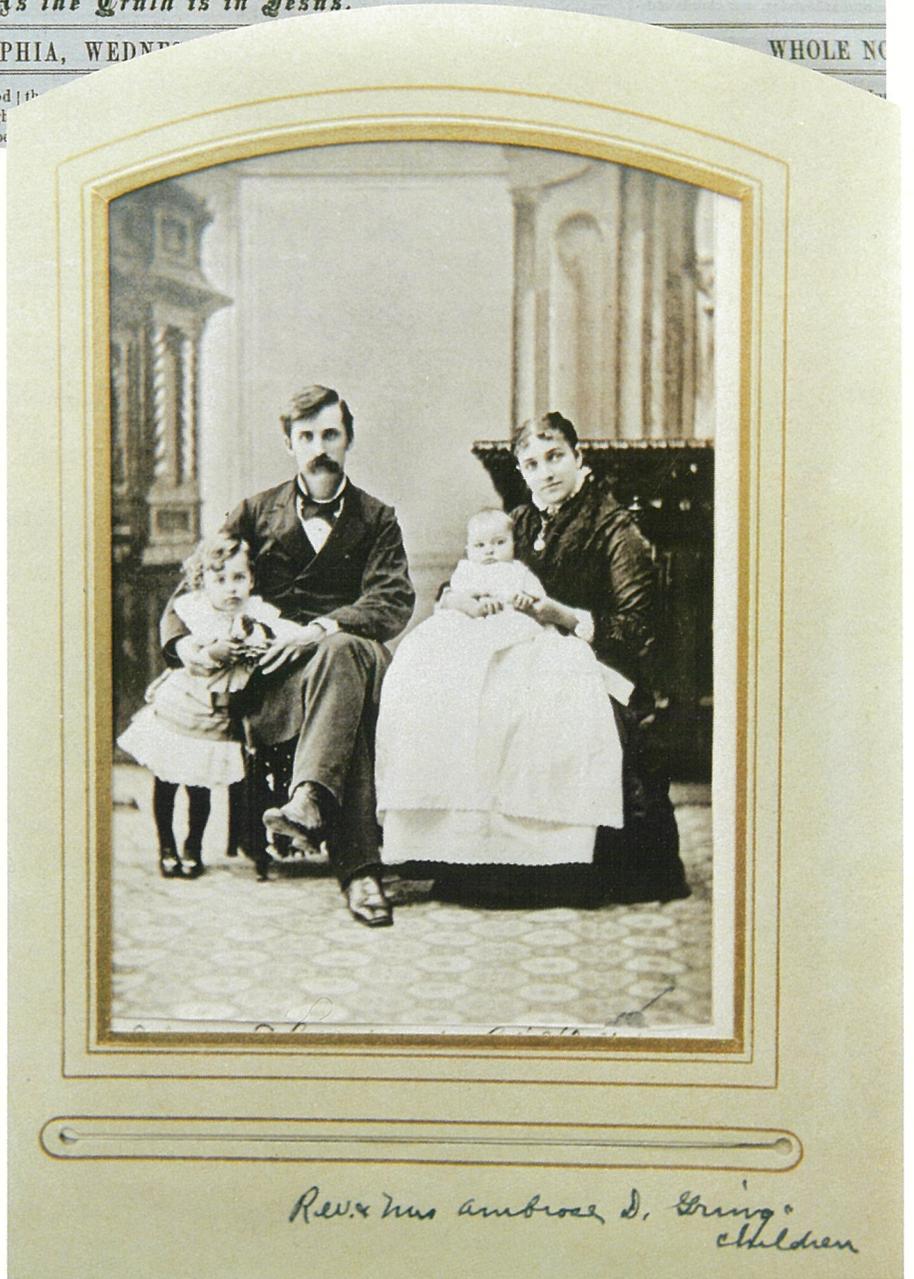
PHILADELPHIA, WEDNESDAY

WHOLE NO.

THE MESSENGER.
ISSUED WEEKLY

accordingly hired at Dai Koku Che, (God of wealth,) and invitations given all through the district for as many as could to be

越ヶ谷教会と吉田家
Koshigaya Church

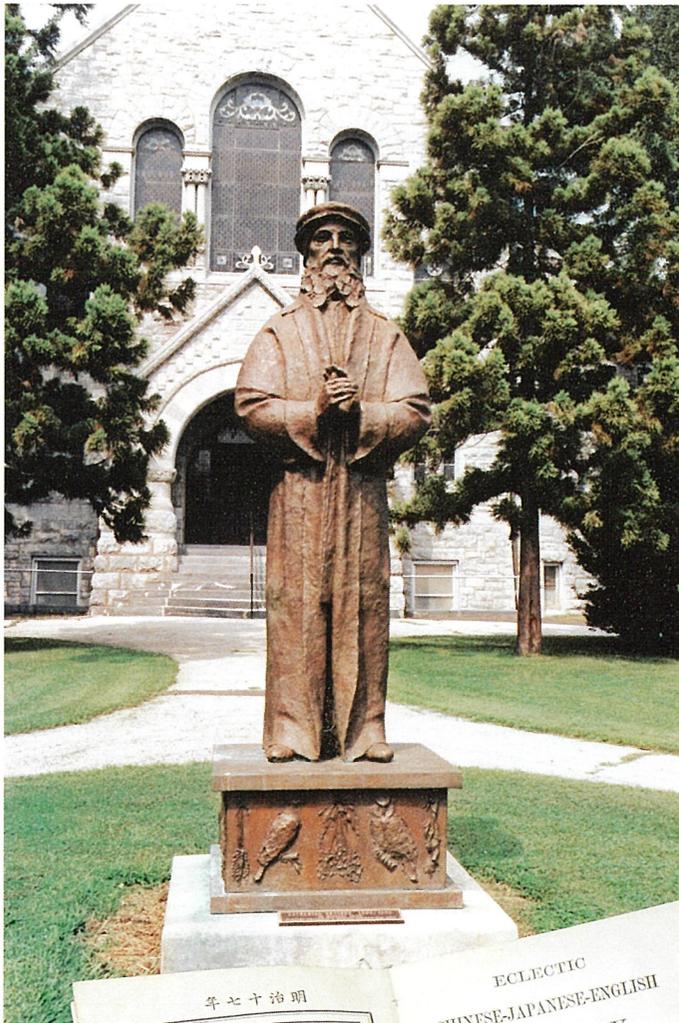


Rev. and Mrs. Ambrose D. Gring
Children

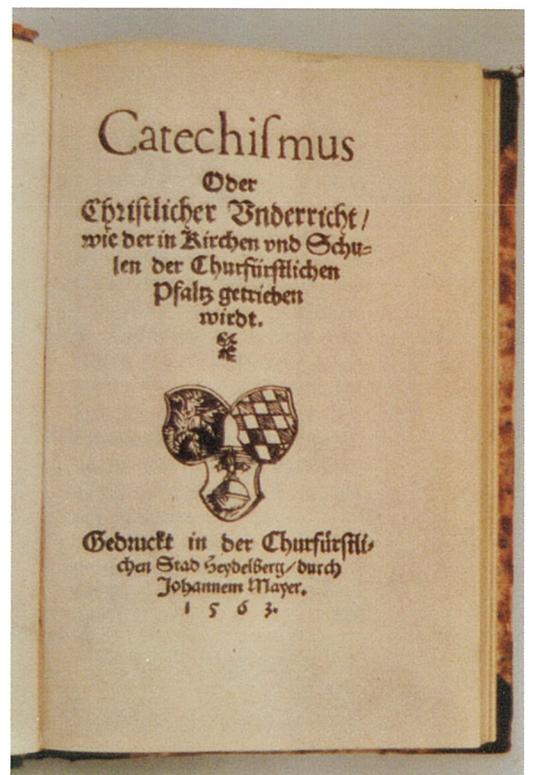
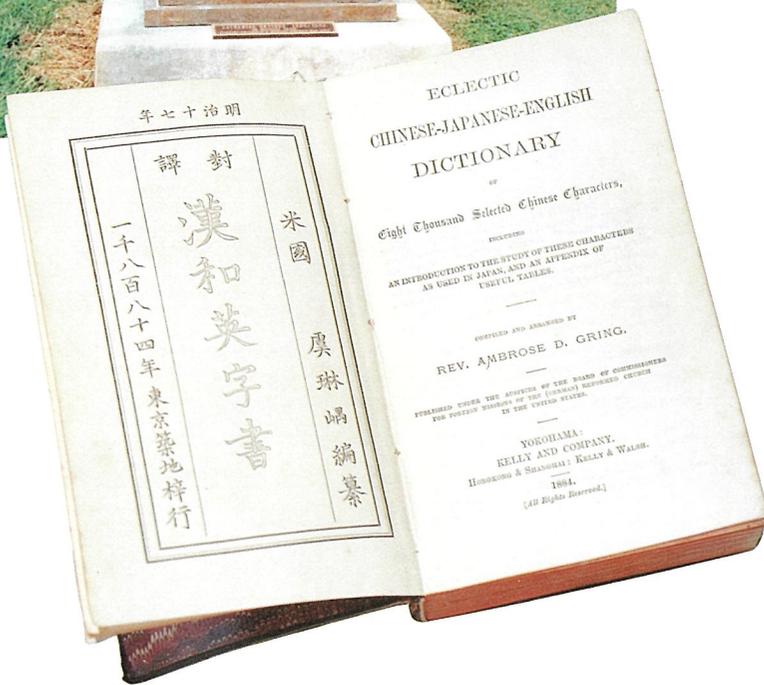
グリングと家族 1886年ころ

グリングの来日

1879年、ドイツ改革派の最初の宣教師A・D・グリング夫妻が来日し、東京を始め埼玉県下に伝道、越ヶ谷には吉田兼三郎一家を中心に、有力な教会が形成された。さらに後には、東京にも神田教会が組織され、長く学院出身者が牧会に当たった。



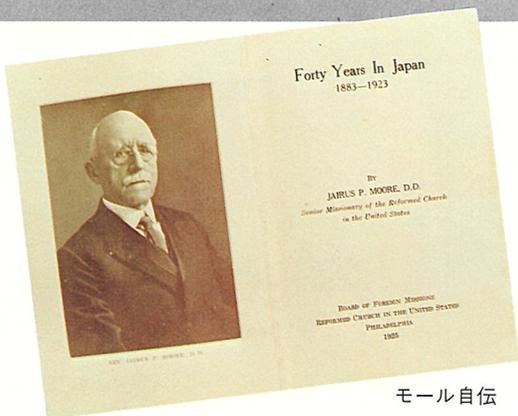
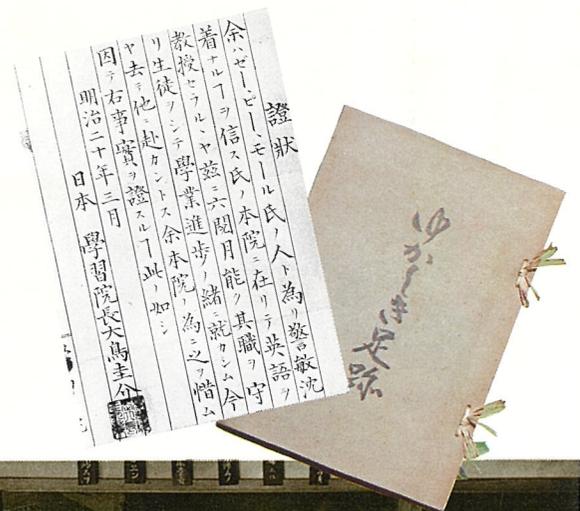
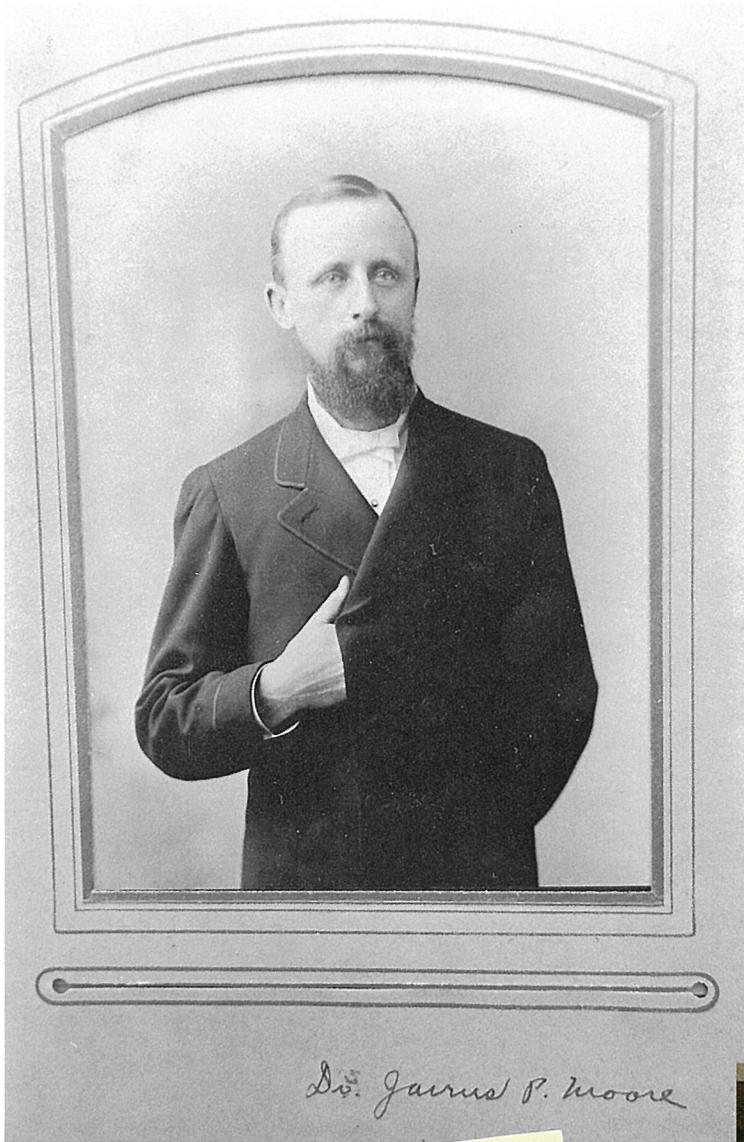
ウルジーヌス像(アーサイナス大学構内)
Statue of Ursinus, Ursinus College



「ハイデルベルク信仰問答」初版本 1563年

グリングの事績

グリングは「ハイデルベルク信仰問答」を邦訳し、英漢和辞典を編集するなど、着実な教化と伝道の方策を選んだ。ドイツ改革派教会が仙台に進出するきっかけを作ったのも、このグリングであったが、伝道8年にして改革派を去り、聖公会に転じた。



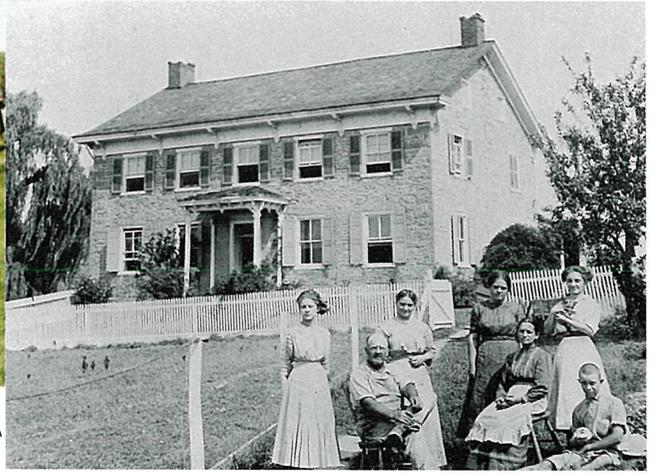
ミセス・モールの病院伝道
Mrs. Moore in Hospital Ward

モールの来日

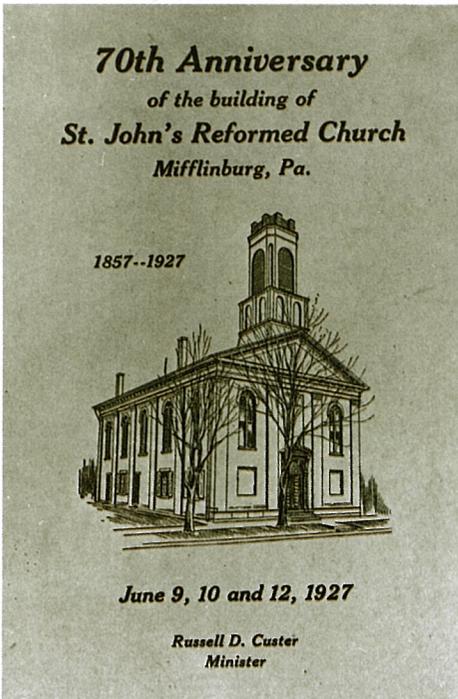
次の宣教師 J・P・モール夫妻は、40年以上にわたって、東京、仙台、山形などで伝道に尽力し、広く敬愛を集めた。夫妻は社会的関心も強く、磐梯山噴火や三陸大津波に際しての災害救助や病院伝道など幅広い活動を見せた。



ホーイ生家旧景



ホーイ生家現況
Hoy Homestead, Mifflinburg, PA



ホーイ母教会
Hoy Home Church



神学生時代のホーイ
Hoy as Seminarian

履 歴 用 紙	明治三十二年八月	右ノ通り相違無之ニテ也	右	カプルエー、ホーイ
	宮	雑誌ノ編輯人タリ	東洋ニ於テ出版セル「ザ・ヤング・マン」ニ寄ル	雑誌ノ編輯人タリ
城	西暦千八百八十八年六月廿二日生	ウヰリアム、エドワーズ、ホーイ	仙台市東三番丁七拾八番地居住	北米合衆國ペンシルヴァニア州ミッフルンバーグ
	西暦千八百八十八年六月廿二日生	ウヰリアム、エドワーズ、ホーイ	仙台市東三番丁七拾八番地居住	北米合衆國ペンシルヴァニア州ミッフルンバーグ
縣	西暦千八百八十八年六月廿二日生	ウヰリアム、エドワーズ、ホーイ	仙台市東三番丁七拾八番地居住	北米合衆國ペンシルヴァニア州ミッフルンバーグ
	西暦千八百八十八年六月廿二日生	ウヰリアム、エドワーズ、ホーイ	仙台市東三番丁七拾八番地居住	北米合衆國ペンシルヴァニア州ミッフルンバーグ

Hoy Curriculum Vitae

ホーイの献身と来日

ウィリアム・E・ホーイはペンシルヴェニア州のミフリンバーグで生まれ、フランクリン・アンド・マーシャル大学を経て、ランキャスター神学校在学中に宣教師を志し、日本伝道に献身した。1885年12月、横浜に到着、折りから協力宣教師を求めて上京中の押川方義

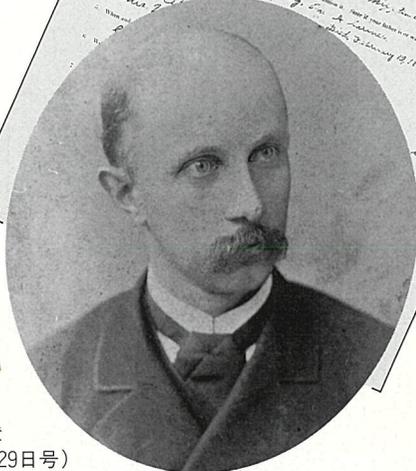
For the Messenger.
**OF THE INTER-SEMINARY ALLIANCE—
 CHARACTER STUDY.**
 By WM. E. HOY, of the Theological Seminary,
 Lancaster, Pa.

The Alliance is in session. I listen to the first impulse of my soul, and study the scene before me. I look upon life; feel its beauty, its warmth, its light; bring virtue, goodness, spirit of peace to my mind; think of the sentiment of divine love pervading the whole assembly; gather the fruit of the holy intercourse between man and man; and rejoice in the bright and easy strength that flows before me like a full river in the sunshine of fraternal feeling. It is a view of promise, a paradise set out with the bloom of youth and refreshed by the fountain of age. Heart beats unto heart a quickening inspiration. Soul answers soul in the world of prophecy. Spirit joins spirit in creative exercise of song. I stand before a mighty deep, and cannot fathom it. What an intense joy it is to live in! A sweet, natural, affecting enthusiasm courses through this band of men. Four

ホーイの最初期の文章
 (『メッセンジャー』紙, 1882年11月29日号)

BOARD OF COMMISSIONERS FOR FOREIGN MISSIONS
REFORMED CHURCH IN THE UNITED STATES.
 Questions to be answered in Writing by Candidates for Missionary Work, and mailed to Rev. Thos. S. Johnson, D. D. Secretary of the Board, Lebanon, Pa.

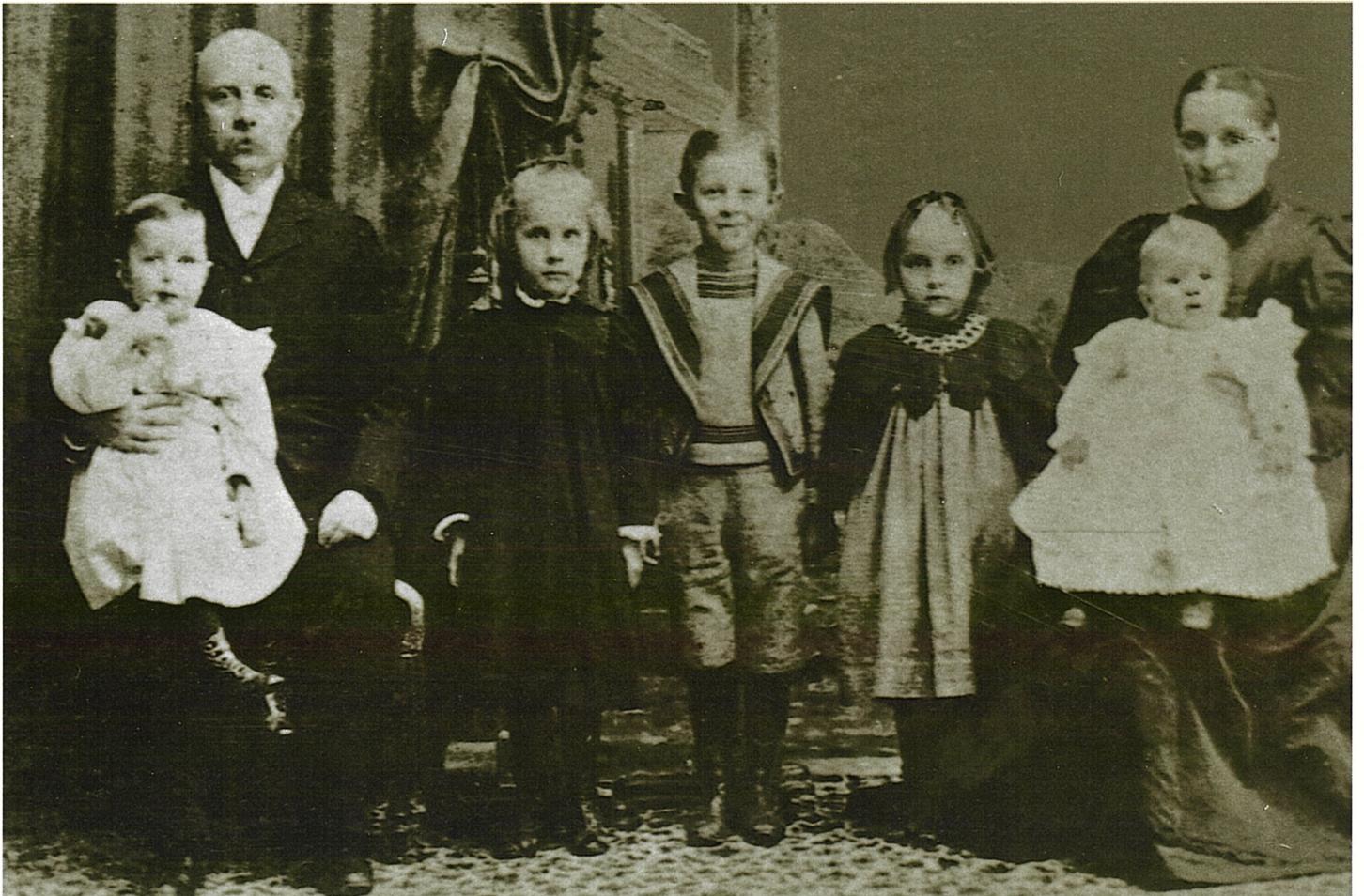
1. These various passages in full.
William Edwin Hoy
 2. The word of God is the power which makes the heart strong and true.
 3. The word of God is the power which makes the heart strong and true.
 4. The word of God is the power which makes the heart strong and true.



宣教師志願書

RECORD OF CHILDREN

Name	Date of Birth	Birthplace
Carl Whitman Hoy	June 5, 1889	Sendai, Japan
William Edwin Hoy, Jr.	August 23, 1890	Sendai, Japan
Gertrude Blanche Hoy	July 25, 1892	Tokyo, Japan
Mabel Ruth Hoy	October 9, 1893	Sendai, Japan
David Schneider Hoy	November 1, 1895	Lancaster, Pa., U. S. A.
Charles McPhail Hoy	February 28, 1897	Sendai, Japan



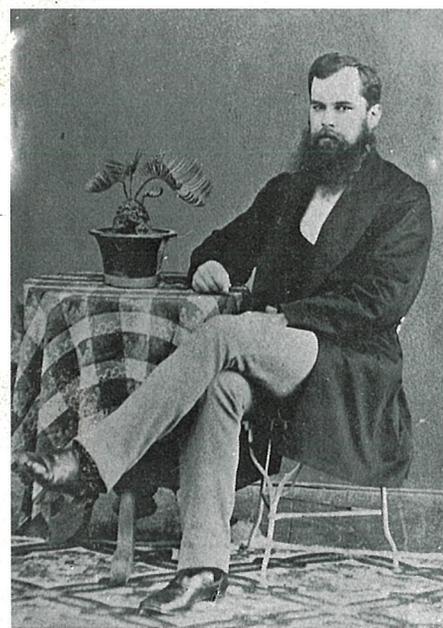
ホーイと家族 The Hoy Family

とバラの仲介で出会い、押川の招きに応じて仙台赴任を承諾した。ホーイとその妻メアリ(旧姓オールト)の間には5人の子供が生まれたが、長女のガートルードも長じて両親を助け、外国伝道に生涯を捧げた。



新潟港絵図
Niigata Port

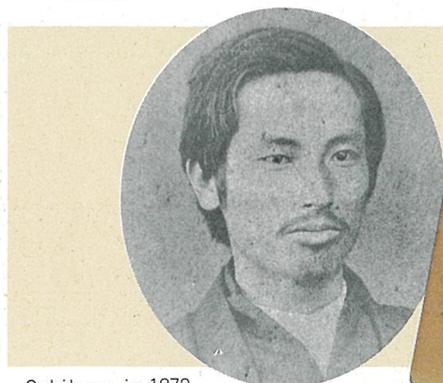
パーム Palm



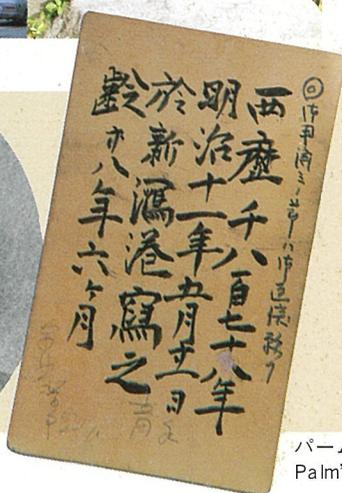
パーム病院跡



Palm Hospital



Oshikawa in 1878



パームの伝道文書(押川訳)
Palm's Tracts translated by Oshikawa



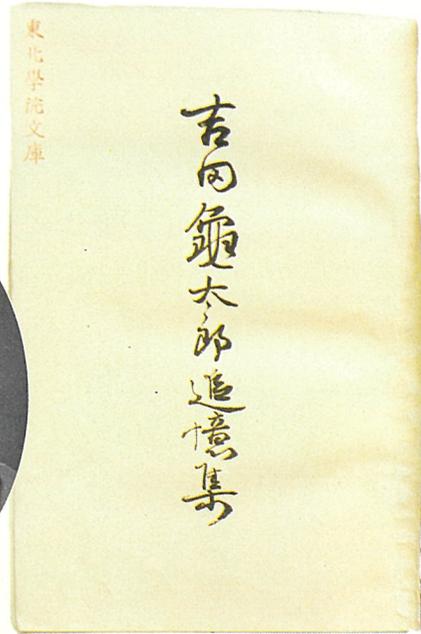
押川の新潟伝道

1877年、押川は新潟のパームを助ける任を受けて赴任したが、1880年の大火を機に、同労者吉田亀太郎の故郷の東北に転ずることとした。中央右のパーム病院の写真は、最近発見された貴重なもの。吉田は岩手の出身で、始め実業に携わったが、のち伝道に献身した。

押川と吉田亀太郎 Oshikawa and Yoshida



吉田亀太郎
K. Yoshida



Tributes to Yoshida



南町通り本願寺別院跡の礼拝堂
Old Temple as Sanctuary



仙台キリスト教講義所(現国分町付近)
Original Gathering Place



仙台教会の成立

仙台に移った押川は積極的な伝道を展開し、間もなく市の中心部(南町、東二番丁角)に廃寺を入手、これを礼拝堂として用いることとした。会員数は急増し、さらに近隣各地にもいくつかの教会が形成された。その維持・発展のためには日本人牧師の養成が必要と思われた。

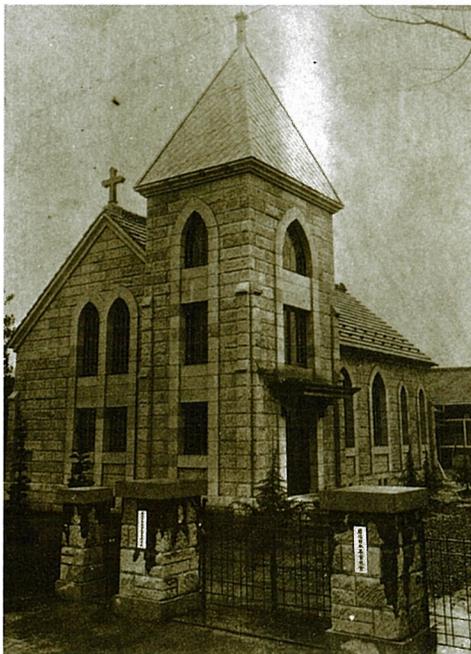


Synod Proceedings

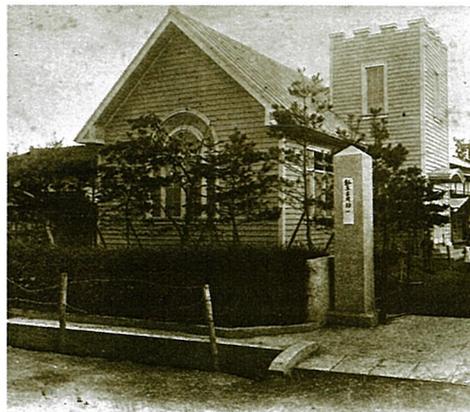


仙台教会(1901年完成)
Sendai Church

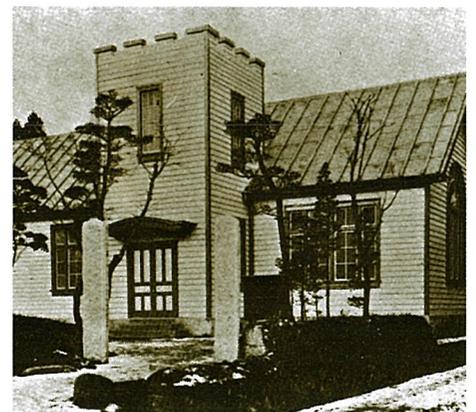
宮城中会
Synod Members



岩沼教会 Iwanuma Church



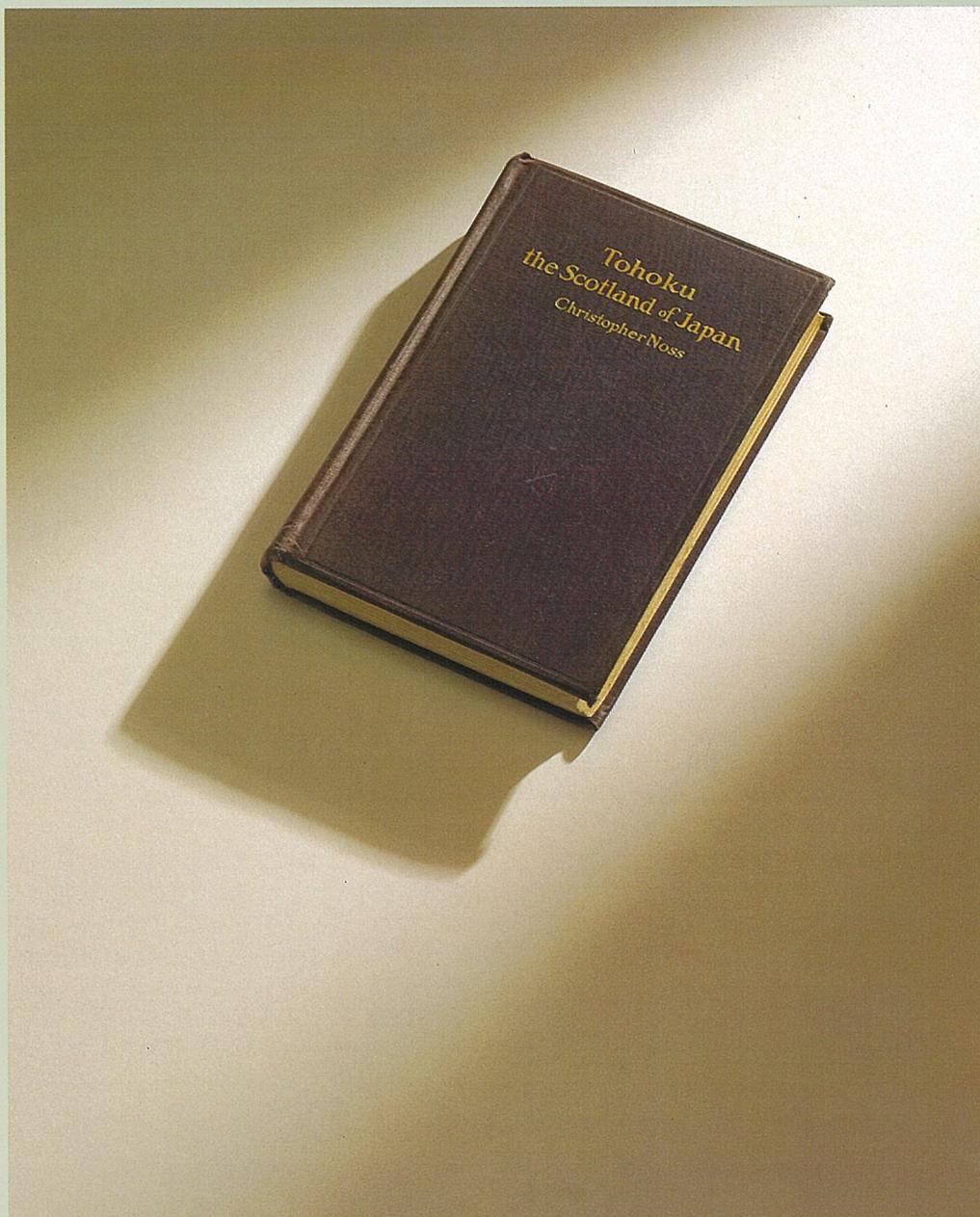
古川教会 Furukawa Church



石巻教会 Ishinomaki Church

宮城中会の組織

1885年、押川を議長として仙台、古川、石巻、岩沼の四教会をもって中会が組織され、全国的な組織の日本基督一致教会に加入した。東北学院には貴重な中会記録が多数保存されている。仙台教会の会堂はのちにシュネーダー夫妻らの労苦によって建てられた。



第II章

東北を日本のスコットランドに

草創時代

1886(明治19)年～1900(明治33)年

II 東北を日本のスコットランドに

押川とホーイの二人は、日本の伝道は日本人自身の手によるほかないとの確信を抱いていた。そのためには、牧師養成を目指す神学校の設立が急務とされる。1886(明治19)年早々、仙台に赴任して来たホーイのもとに、数名の青年たちが新しい知識を求めて集まって来る。同年5月、押川とホーイは6人の伝道者志望の学生を得、木町通りと北六番丁角の借家で私塾の形の学校を興こし、これを仙台神学校と名づけた。東北学院のささやかな出生であった。その中にはのちの神田教会牧師で力行会の創始者となる島貫兵太夫も含まれていた。経費のほとんどはホーイの支弁によったといわれる。同じ年には、プルボーとオールの二人の婦人宣教師が着任し、押川やホーイらの協力によって宮城女学校が設立された。仙台で最初的女子教育機関である。翌1887(明治20)年末には、D. B. シュネーダー夫妻が来日し、50年にわたる伝道と教育への献身の生涯に第一歩を印すことになる。

1891(明治24)年、仙台神学校は東北学院と改称され、伝道献身者以外にも普通・高等教育を施すようになり、次々と学制を整えると共に、購入した南町通りの校地には赤煉瓦造りの校舎を新築、その壮麗さは市民の目を奪った。その内部にはドイツ改革派教会の外国伝道局財務R. ケルカーの名に因む有力な図書室も設けられた。新進の詩人島崎藤村が作文教師として着任するものこのころである。

院長押川の名声は全国に聞こえ、文字通り笈を負うて集まる青年らのために、働きつつ学ぶ労働会が創立される(1892)。その中には、ランキャスター留学中に客死した金子謹三を記念する印刷所も設けられ、多くの伝道冊子を出版して東北伝道に貢献した。労働会は、全学院のインスピレーションとまで謳われ、数十年にわたり多数の人材を輩出した。こうして、東北学院の確かな礎がこの時期に据えられることになる。

このころ、文運もとみに栄え、1893(明治26)年には『東北文学』、3年後には労働会寄宿舎の機関紙『芙蓉峰』が発刊された。他方、ホーイの手による特異な英文雑誌『ジャパン・エヴァンジェリスト』も30年の歩みを開始した(1893)。

ところで押川の雄志は仙台の地に限られることなく、その視野はあるいは北海道(同志会)へ、あるいは朝鮮半島(京城学堂)へと拡がり、ついに東北学院長を辞して上京、政治や実業へと幅広い活動を展開するようになる。他方、ホーイの目も清朝末期の混乱の中にあった中国へと向かう。健康上の理由もあって、1900(明治33)年東北学院を辞したホーイは、家族と共に中国湖南省の岳州に転じ、そこに伝道・教育・医療の有力な拠点築き上げ、1927年の死にまで及ぶ。ホーイ夫人とその娘も第二次大戦後まで中国伝道に献身した。米・日・中そして天の四つの国の市民にふさわしい生涯であった。

こうして東北学院の将来はシュネーダーの双肩にゆだねられることになる。

The First Faculty and Students



For the Messenger.
LETTER FROM JAPAN.
 SENDAI, Japan, April 5th, 1886.
 Dear Brother Fisher:—On these hills,
 of my study, are three cities of
 By the grace of God we shall soon have
 two Reformed schools in Sendai—one for
 boys and one for girls. What are we going
 to do for them? The time is past for tle-
 lay in any missionary movements in Japan.
 The very pressure of historical force de-
 mands speedy action. God and man are
 at work. Hopefully yours,
 W. E. Hoy,

For the Messenger.
LETTER FROM JAPAN.
 63 Kami Naka no Machi, Sendai Ku,
 Miyagi Ken, Japan, April 30, 1886.
 Dear Dr. Johnson:—I am daily en-
 gaged in a systematic study of the Japan-
 ese language. It is encourag-
 ing to find that a number of our
 Four young men of considerable educa-
 tion wish to study theology now. They
 have been Christians for a number of
 years. If we go into this school they will
 be ours. At any rate I am going to sup-
 port one myself as my contribution to the
 cause of foreign missions.
 me.

Handwritten notes in English and Japanese, including a reference to the Board of Commissioners for Foreign Missions of the Reformed Church in the United States of America.

For the Messenger.
Foreign Missions.
 SENDAI, Japan, July 1, 1887.
 Dear Reformed Friends:—Yesterday
 Rev. Ohikawa, Bro. J. P. Moore and I
 went out to our little training school for
 evangelists, and made some farewell re-
 marks to our several students. The young
 men are as follows: Matsui, 23; Haya-
 saka, 24; Nishihara, 32; Hishinoto, 23;
 Abe, 20; Tamura, 19; Shimazaki, 20.
 M. Hayaasaka has a wife and two chil-
 dren. The others are unmarried. The
 Lord has blessed this little school; and I
 have faith that He will continue to be-
 cious unto it. It sprang up in His
 May it not grow on? Do you want it
 continued? Arrangements have been made
 by our Board to continue it. Will you
 assist?



Sendai Map in 1887



First Site of the School

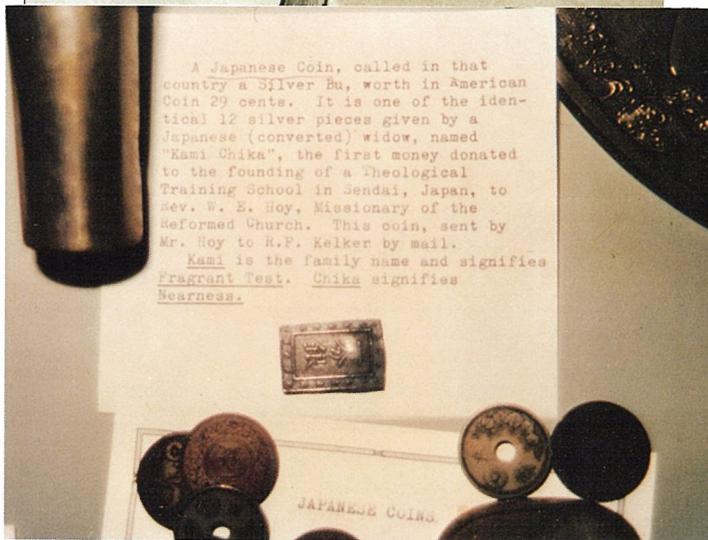
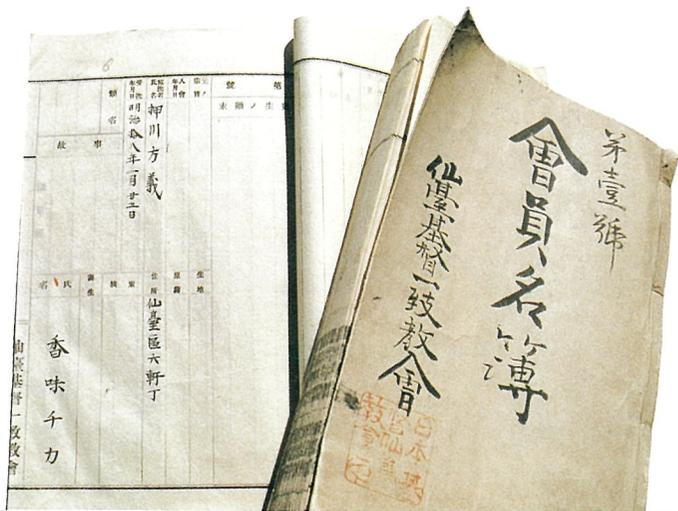


仙台神学校の発足

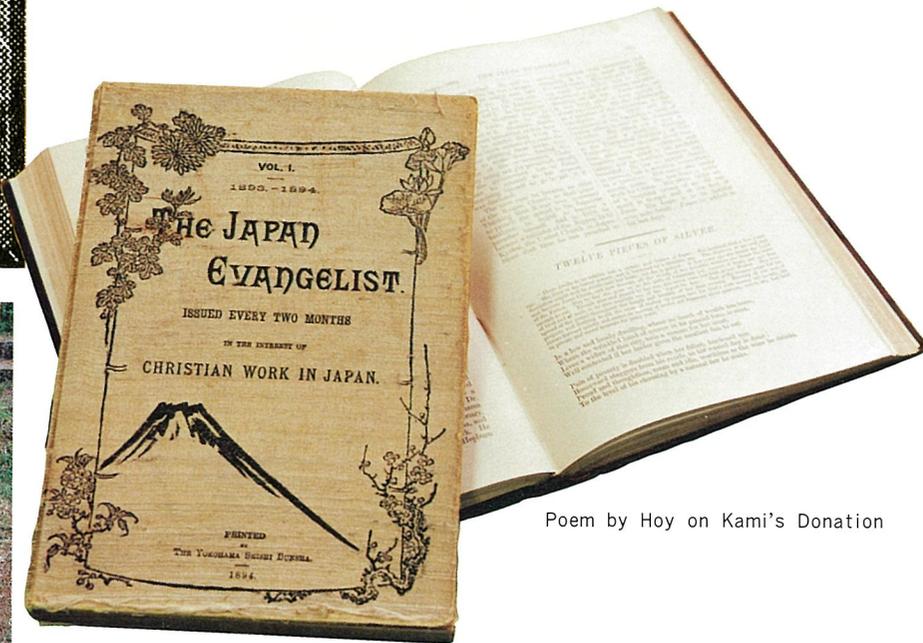
1886年7月のホーイの手紙は、すでに数名の学生が押川とホーイのもとで神学を学んでいることを伝える。二人はこの小さな学校を仙台神学校 (Sendai Theological Training School) と呼ぶことにした。上の写真は最初の六人かと推察される。後列左から2人目が島貫兵太夫。



Kami's Tomb Stone



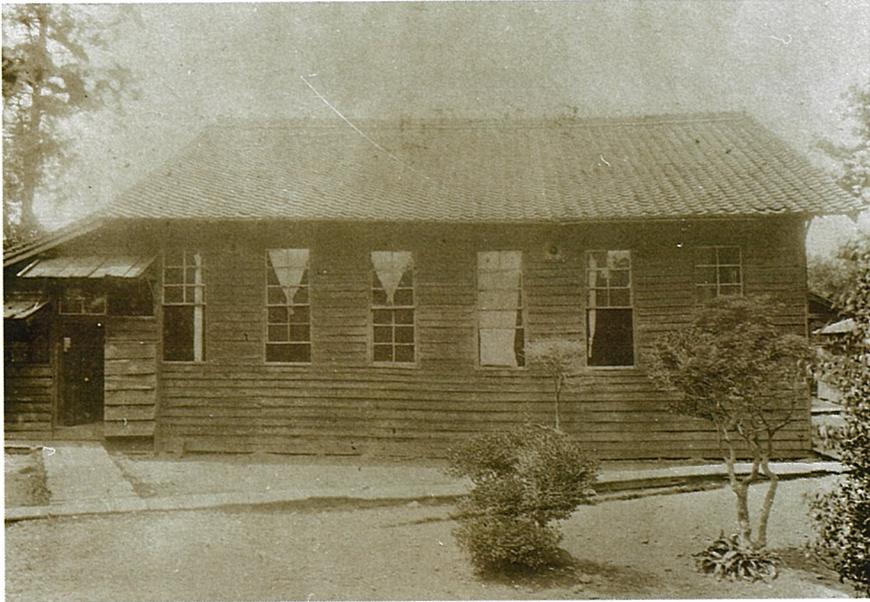
ランキャスター神学校に残る一分銀
Silver Coin in Display, Lancaster Seminary



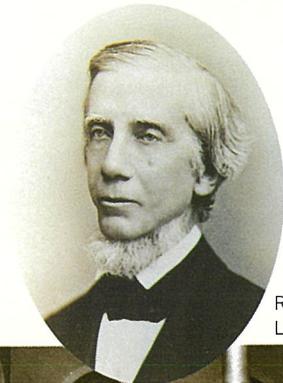
Poem by Hoy on Kami's Donation

香味ちかの銀貨12枚

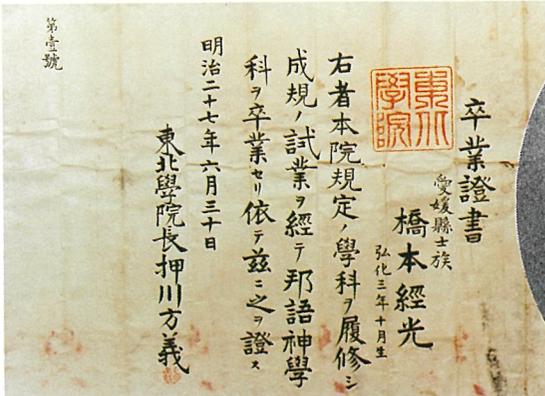
押川とホーイが神学校設立のための経費問題で悩んでいたころ、香味ちかという未亡人がその蓄えのすべてをささげた。その一枚は今もランキャスター神学校に保存・展示されている。ホーイはこの義挙を『ジャパン・エヴァンジェリスト』に一篇の詩としてうたいあげた。



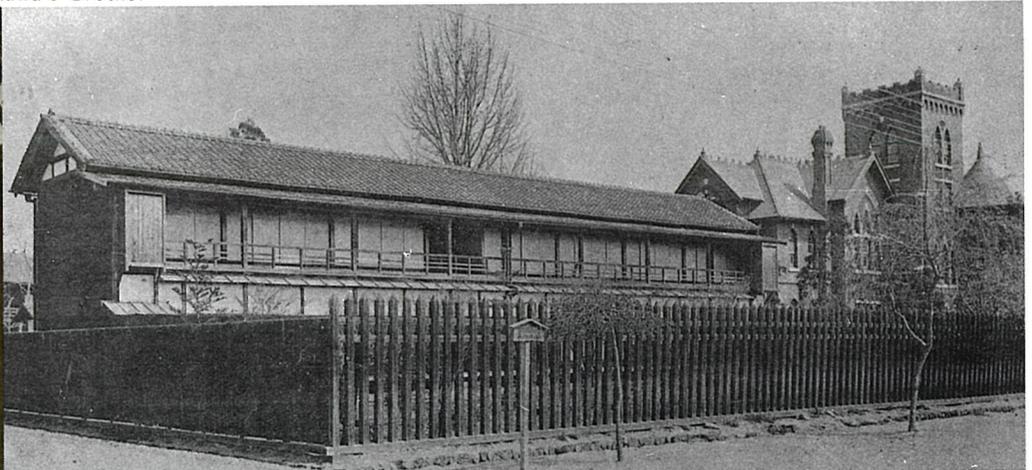
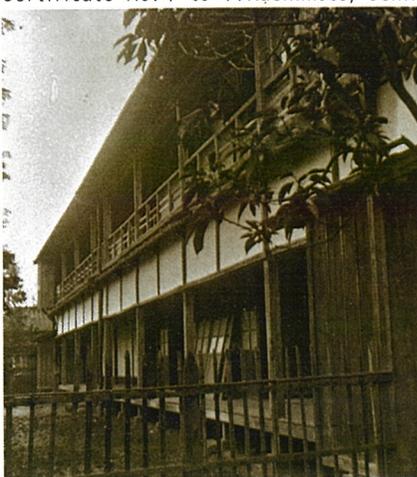
最初の教場 First Classroom Building



ケルカーと記念図書館
R. Kelker and Memorial
Library



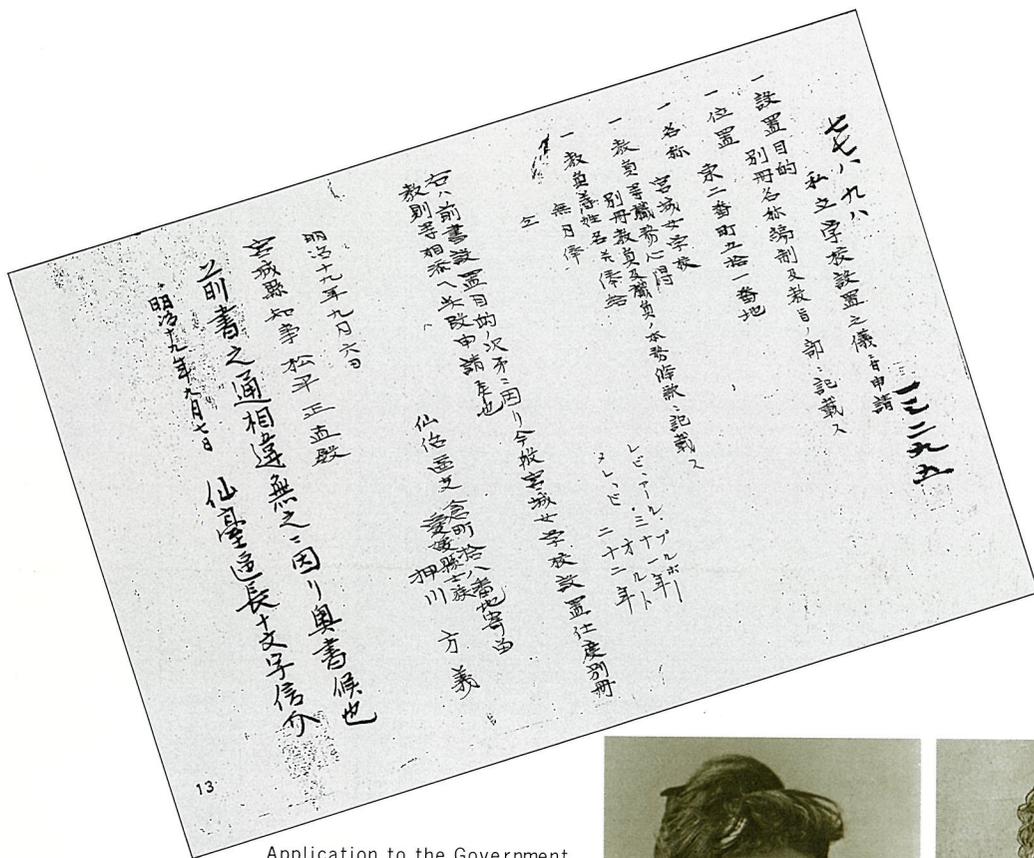
Certificate No. 1 to T. Hashimoto, Oshikawa's Brother



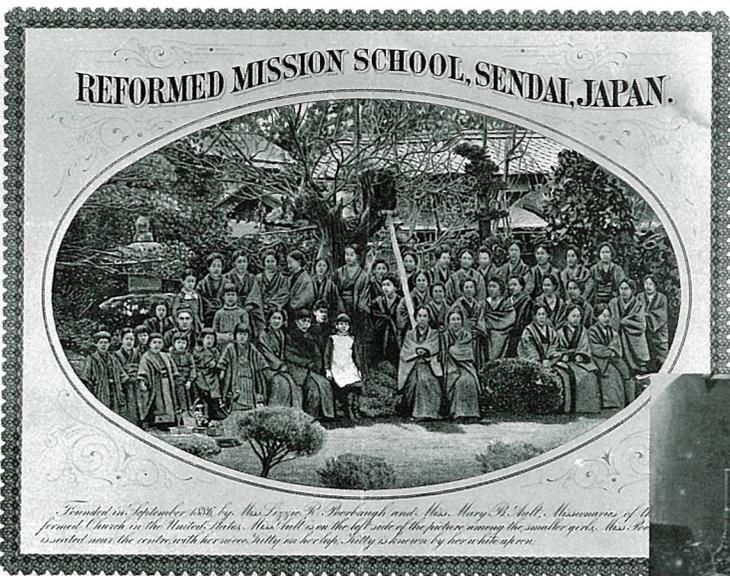
オールト記念館
Ault Memorial Hall

オールト記念館の建築

増加する学生のため、ホーイは私財を投じて教場および寄宿舍を建築し、義父の名に因んでこれをオールト記念館と名付けた。これらの不動産を日本人の手に委ね、その管理に任せるという方針は、当時あっては極めて独自のもので、母教会の外国伝道局との間に緊張をさえ生みかねなかった。



Application to the Government



最初の生徒と仮校舎, 1887
First Students and Temporary Building



プルボー
E. R. Poorbaugh



オールト
M. B. Ault



初期の生徒(1, 2, 3回生) 1888

宮城女学校の創立と発展

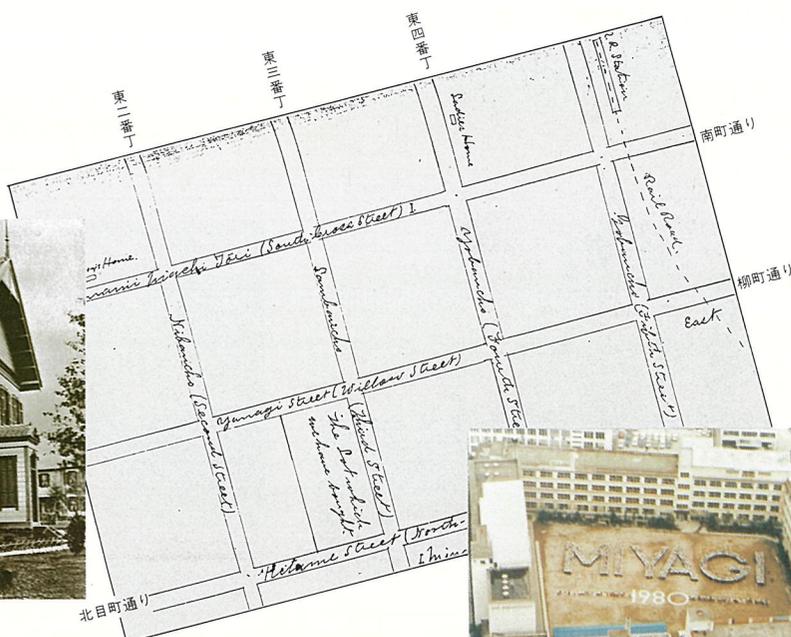
1886年7月、リズィ・プルボーとメアリ・オールの二人の婦人宣教師が来仙し、県当局の認可を得て9月から女子教育を開始した。学校は急速に発展・成長し、東北全体におけるキリスト者婦人の養育に大きく貢献することになる。市の中心部の校舎は壮麗を誇った



最初の校舎 Recitation Hall(1889年完成)



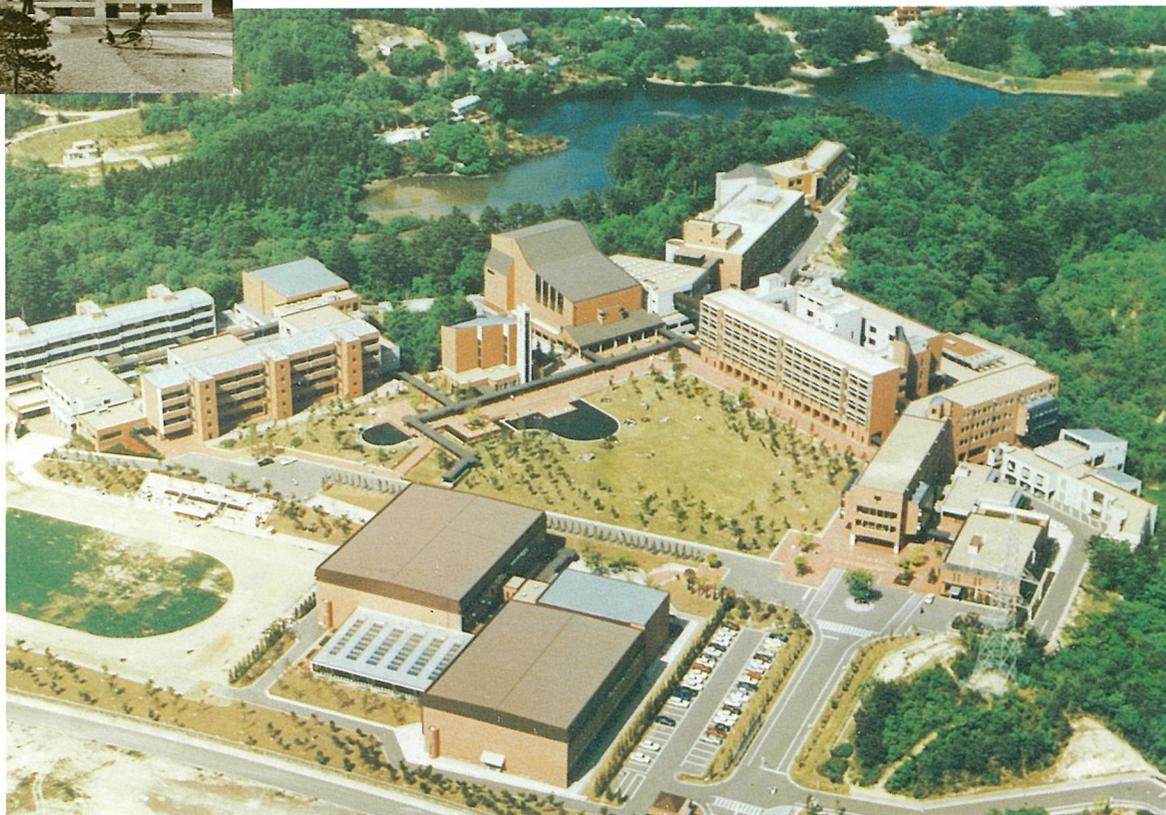
第一校舎(1904年完成)
C. Faust Memorial Hall



ホーイの手紙から
From Hoy Letter



東三番丁校地 Old Campus



桜ヶ丘校地 New Campus

が、1980年には仙台市北部に移転し、全国でも最も美しいキャンパスの一つとなった。同じ改革派教会から生まれた姉妹校として、幼稚園、中・高、大学まで3500名の在学学生を擁し、今に至るもキリスト教の伝統を守り続けている。

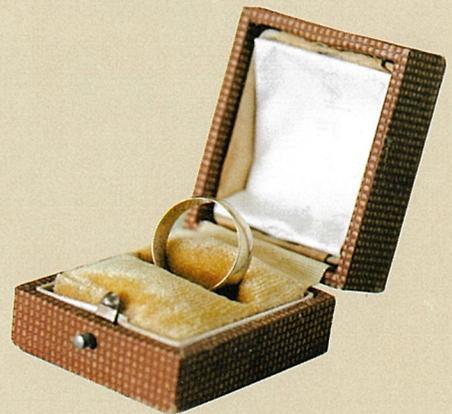
Schneider Homestead, Bowmansville, PA.



Schneider Home Church



The Newly-wed Schneders



Wedding Ring

シュネーダーの着任

D・B・シュネーダーは大学、神学校とホーイの親友であったが、1886年12月日本に着き、翌年1月来任、講義と説教を開始した。写真はボウマンズヴィルの生家と母教会、新婚の妻アンナ、結婚指輪である。右ページの集合写真は当時の在仙宣教師団。モール夫妻、ホ

BOARD OF COMMISSIONERS FOR FOREIGN MISSIONS
OF THE
REFORMED CHURCH IN THE UNITED STATES.

Questions to be answered in Writing by Candidates for Missionary Work, and mailed to
Rev'd ~~Francis S. Johnston, D. D.~~ Secretary of the Board, ~~Lancaster~~-Penn'a.
A. R. Boush

1. Please write out your name in full: *David B. Schneider*

2. Time and place of nativity? Mention the year, month and day; the town
March 23, 1857, at Down

3. Names and residence of your parents, written out in full? If not living
Bulger and Elizabeth John

4. Names and present residences of your brothers and sisters?
*Mrs. Sarah Fox, Red Run
Mr. Chas. B. Schneider, La
Miss Mary Schneider, Pa
Master Abner Schneider, Pa*

5. When and where were you converted? Was it in a revival of reli
In childhood

6. Were your parents at that time, either or both of them, profess
Both of them were

7. When and where did you unite with the Church of Christ? Of
In 1871 at Center Ch

8. At what academy or academies did you study?
Churchtown select sch

9. At what college? When graduated? How many years in co
F + W. College, 1880.

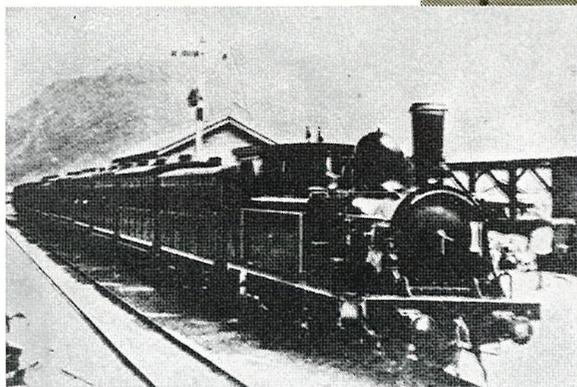
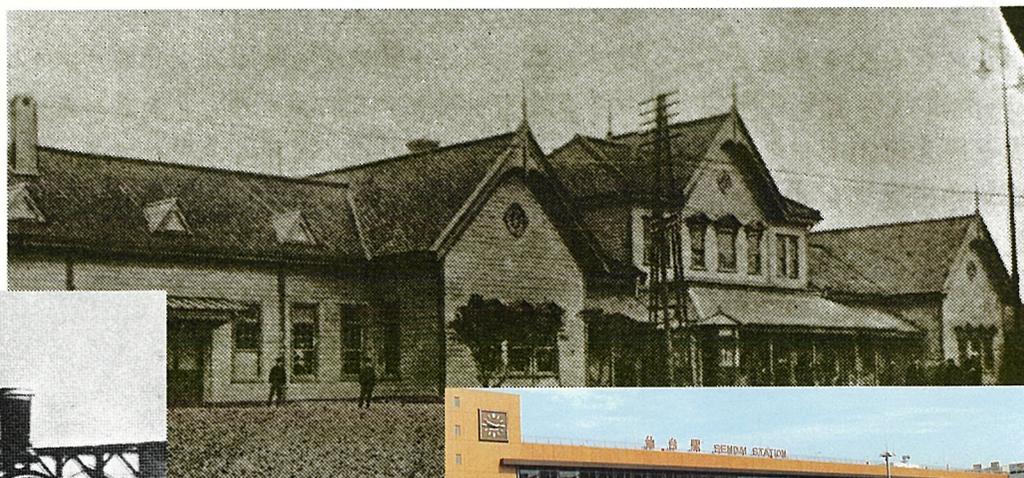
10. At what theological seminary? When graduated? How m
seminary, 1883

Missionaries in Sendai, 1889



宣教師志願書

Sendai Station Then



Sendai Station Now



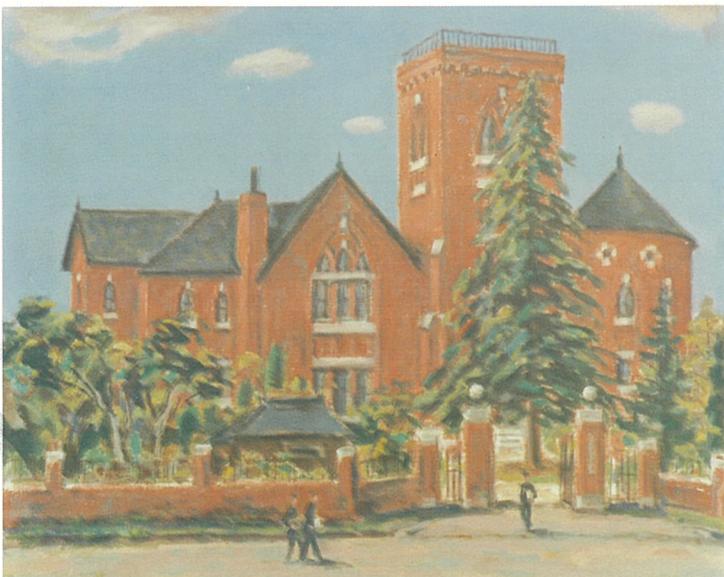
ーイ夫妻、シュネーダー夫妻、プルボー姉妹とその幼い姪キティが見える。東京、仙台間の鉄道は1886年10月に開通したばかりで、シュネーダーは列車で来仙した最初の宣教師となった。鉄道や電信など近代の利器は基督教の伝道にも大いに役立った。



神学部校舎 The Seminary Building 1891



Corner Stone

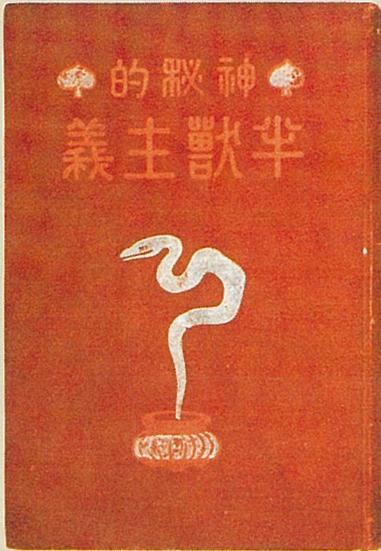


Painted by T.Fuse 布施佛次郎画



神学部学生
Seminary Students 1894

望された赤煉瓦の見事な校舎が完成し、市民の賞賛的となった。その中に設けられたケルカー記念図書館には内外の精選された蔵書3200冊が収められていた。のちに押川の蔵書も寄贈された。写真の石は戦災後、焼け跡から発掘された仙台神学校の礎石である。



岩野泡鳴著



全盛時の泡鳴

自然主義文学者岩野泡鳴
H.Iwano, Naturalism Writer

春浪天狗碑（東京雑司ヶ谷）



若き日の押川春浪、のちの冒険作家
S.Oshikawa, Later S.F. Writer



文芸活動の隆盛

折りから近代日本文学の勃興期にあたり、学院内でも文運とみに盛んであった。『文学会雑誌』、『東北文学』が創刊されて、教員・学生の寄稿を待ち、その中には岩野泡鳴や新進の詩人で作文教師の島崎藤村らの名もあった。帰京後出版された『若菜集』の詩想は仙台で煉

在仙当時の島崎藤村
T. Shimazaki, Poet



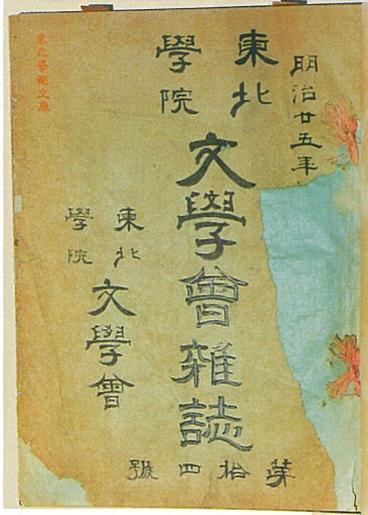
さればわれに取りて亡母の記念とも言ふべきラスキン
を待ちたりき
秋の日の暮れて家に歸れば
歌じ且つ興じ、互に水欄に
の風物いづれか吾等の語
り、流水のつきざるを眺
論の第三卷に於て、
るや高邁なる以太利
世の標準となし、絶

東北文學 (二八六)

藻葉

告別 (此文を藻葉に掲げたるは全く例外なり)

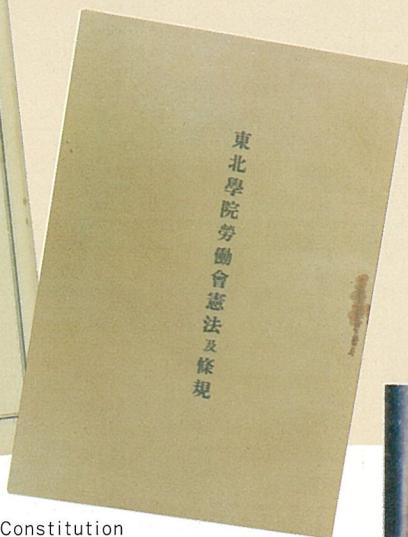
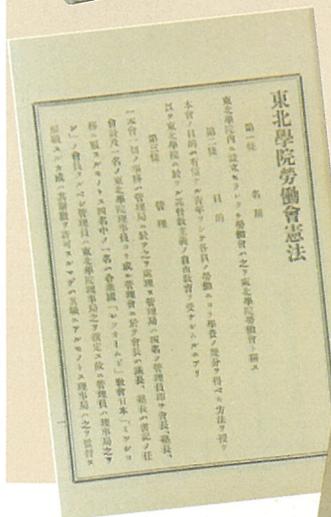
島崎春樹 われと
親しみ、われを教へたる東北文學多數の讀者、今や別
れてわが小歴史の忘れがたき記念とならんとす。
はじめに東北文學の讀者に見えたるは昨年の秋にして
はじめて東北文學の紹介を思ひ立ち、則ち近世畫家論
を繼ぐこと能はざるのみならず、また讀
に困するや勿論なれ
致すところ、物を學
と少なし。これ蓋し
返りに一つとしてそ
歸らんとす。言ふも
名のみにて、故あり
が美術論をも、僅に



『東北文學』編集委員

Literary Magazines by Students

られたものである。方義の長男押川方存 (後の春浪) もまたこのころ在学していた。藤村、泡鳴はのち自然主義作家として名をなし、春浪は日本における冒険・SF小説の先駆者となった。



Industrial Home Constitution



Newspaper Delivery Boys



労働会の貢献

押川を慕って集まる学生たちの自給・自立を因るため設けられた労働会は、多くの人材に勉学の機会を与えた。その業種は農業、洗濯、書籍、配達、牧場など多岐にわたった。金子記念印刷所は、11年のアメリカ留学ののち、神学部教授として帰国を目前に急死した

東八番丁の塾舎
Dormitory



Industrial Home Magazines



滝前丁の牛舎



国分町の売店
Book Store



金子謹三と墓石



金子謹三を悼んで寄せられた寄付によって設けられたものである。労働会は初めは押川個人の運営に頼っていたが、のちに理事局の管理のもとに移され、1921（大正10）年の廃止まで、学院全体の発展に大きく貢献し、その気風は高校、大学の二部に受け継がれた。

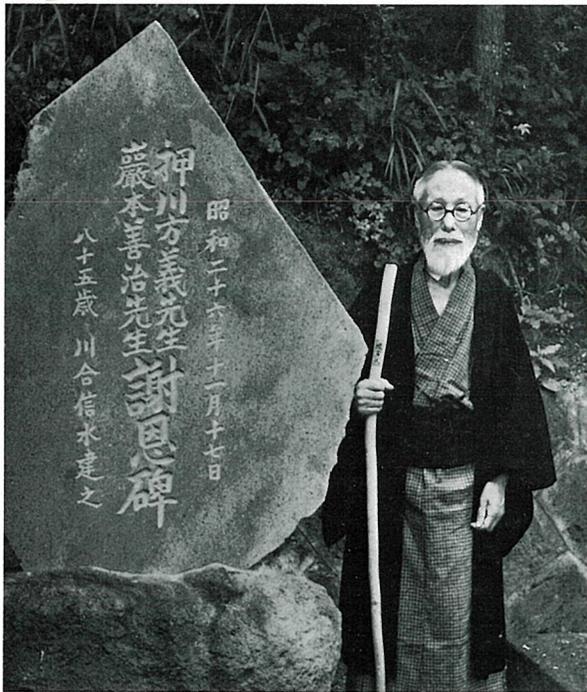


島貫記念碑(岩沼)
Shimanuki Monument

神田教会
Kanda Church, Tokyo



押川とその弟子たち
Oshikawa and his Students



川合信水
S. Kawai



Collected Letters of Oshikawa and Kawai

押川周辺の人々

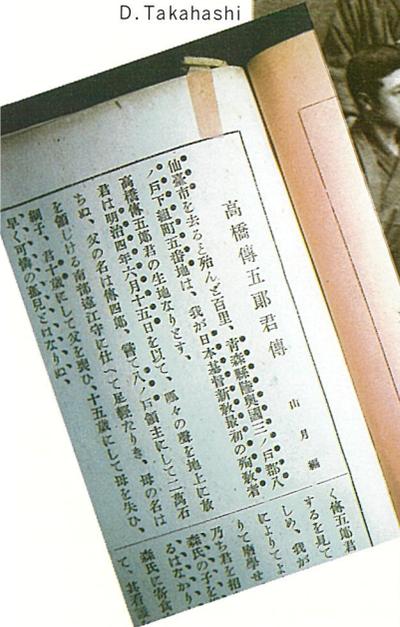
最初の六人のひとり島貫兵太夫はやがて東京の神田教会牧師となり、後にはアメリカ移民のための力行会を設立した。他方、川合信水は基督心宗教団を組織して独自の宗教活動を展開し、その精神的遺産は今も続いている。1893年、神学生高橋伝五郎は千島伝道に献身



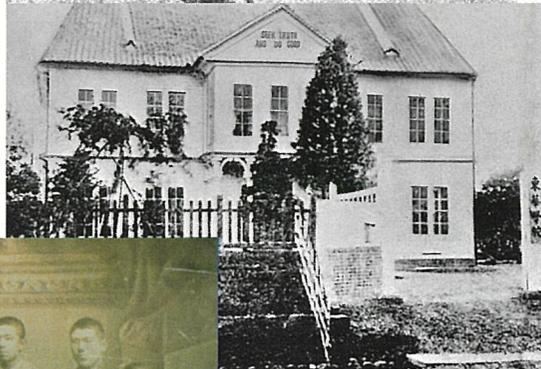
高橋伝五郎
D. Takahashi



送別会
Farewell for D. Takahashi,
Evangelist to the Kurile
Islands



『明治大正図誌』5より 越冬小屋



(上)山形英学校
Yamagata School
(下)東華学校
Toka School, Sendai



右は松村介石,
左は内村鑑三



北越学館教員と生徒
Hokuetsu Gakkan, Niigata

したが、越冬中に死去した。同じころ、仙台には東華学校、山形に英学校、新潟に北越学館などキリスト教を掲げる学校が建てられたが、いずれも数年で廃校となった。北越学館からは出村悌三郎、山川丙三郎、木村清松などが転校して来た。



遠軽の学田記念碑
Monument in Hokkaido



訪米中の押川

A. R. パーソロミュ著の押川伝



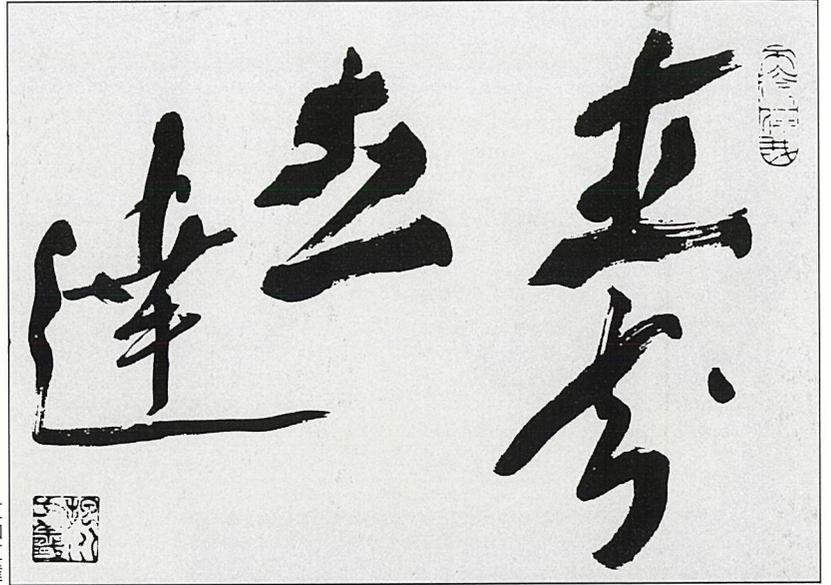
Correspondence of Oshikawa

押川の辞任とその後

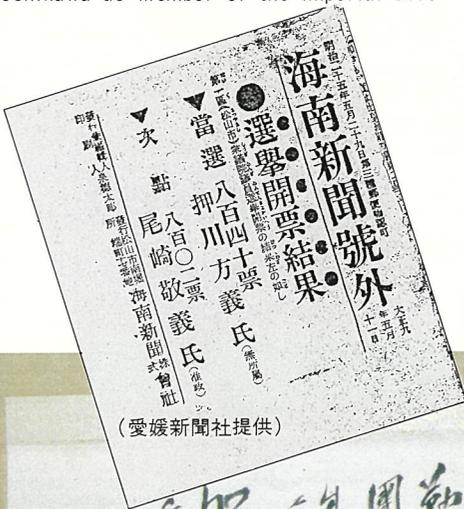
すでに1895年、押川は北海道同志教育会を興し、北見地方に学田を設けた。1901年、東北学院長を辞任し、大日本海外教育会によって朝鮮や中国などに雄飛を試みた。さらに後には、政界に進出し、愛媛県から代議士に当選した。1928年、東京で死去、盛大な葬儀が



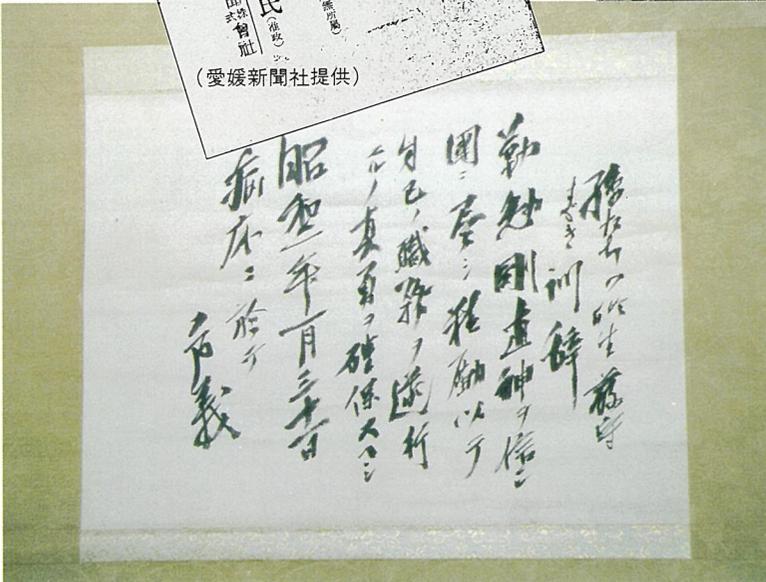
Old Oshikawa as Member of the Imperial Diet



直知直達



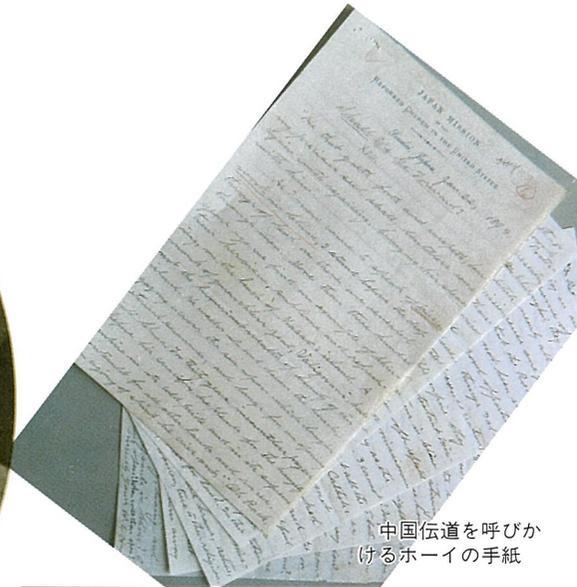
(愛媛新聞社提供)



勤勉剛直神ヲ信ジ国ニ
 尽シ精励以テ自己ノ職
 務ヲ遂行スルノ真勇ヲ
 確保スベシ

Tomb Stone, Sendai

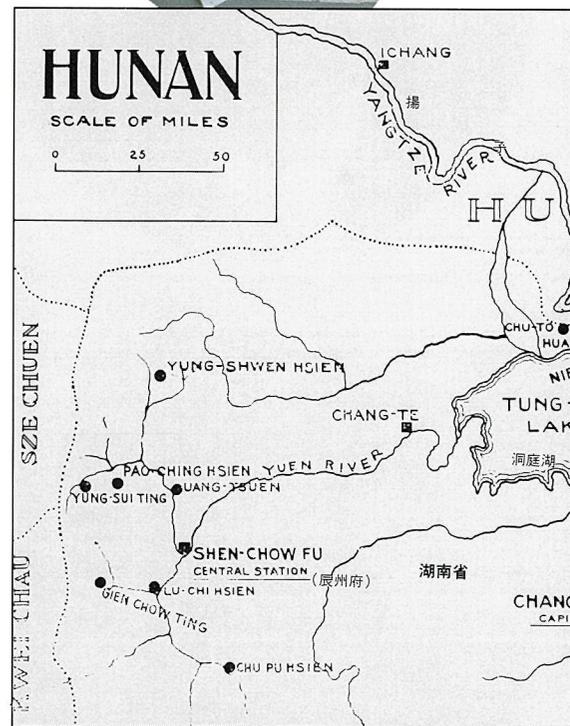
営まれた。まことに明治・大正を生き抜いた大志・大望の生涯であった。左下は押川がその家族に残した書、「脳溢血で倒れた次の日、孫の昌一を病床近くよび、墨をすらせ伊予紙に墨痕鮮かに遺訓をしたためて与えた」（『東北学院七十年史』より）。



中国伝道を呼びかけるホーイの手紙



ホーイ送別会
Farewell for Hoy



View of Lakeside Schools Tungting Lake



在中国宣教師団
China Mission

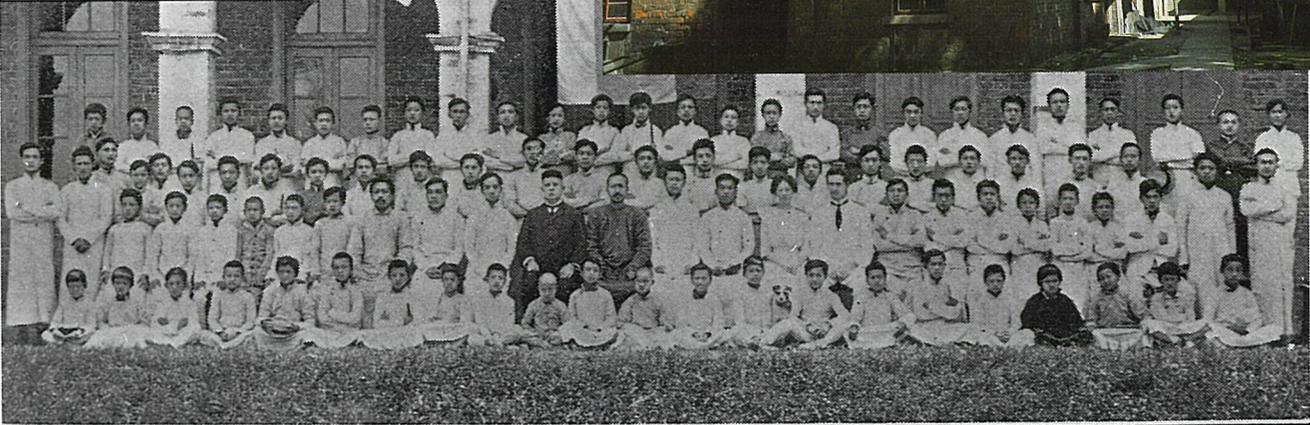
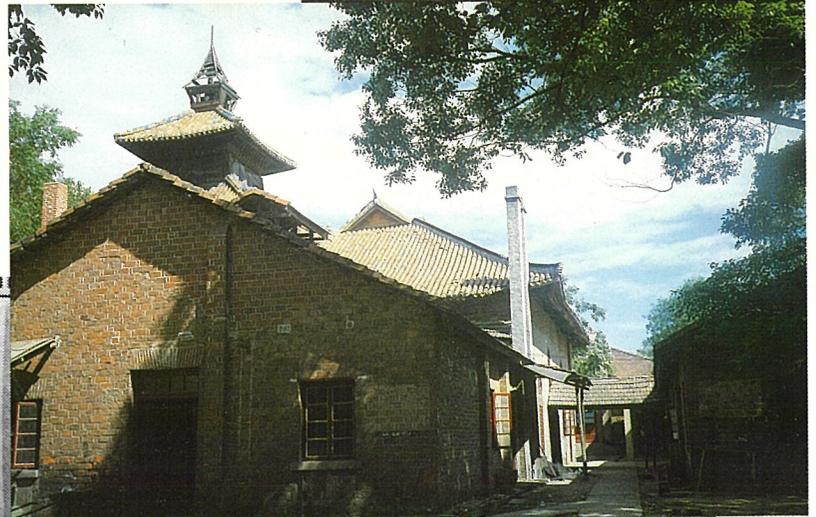
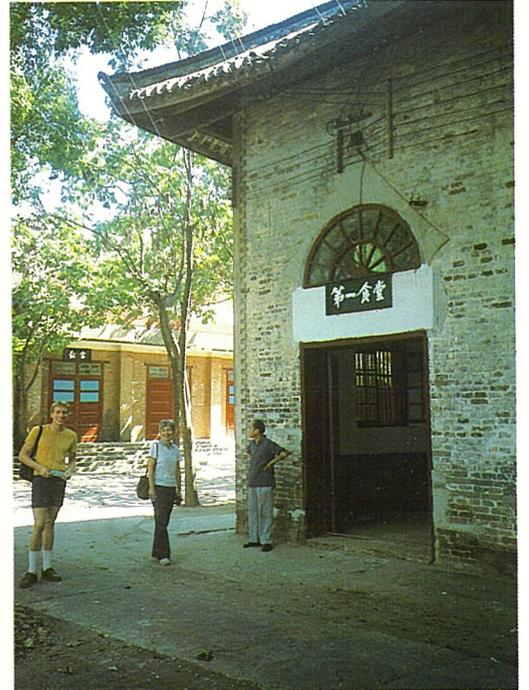
湖濱学校全景

ホーイの中国伝道

1900年、ホーイは東北学院を辞し、中国の湖南省岳州（現在の岳陽）に新しい伝道地を求めた。強い排他性、閉鎖性、政治的不統一など、非常に困難にもかかわらず、数年内には男子、女子両校、さらに病院を設立し、改革派海外伝道の有力な拠点を築きあげた。男子



禮拜堂(岳州)
Yochow Chapel Then and Now



PROFESSORS AND STUDENTS, LAKESIDE SCHOOLS

湖濱學校
Huping Christian College

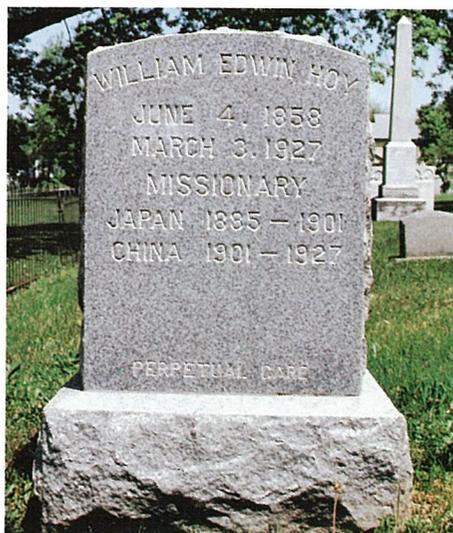
校は洞庭湖畔にあったので、湖濱学校と呼ばれた。中国の政治的混乱の直中、ホーイ夫妻の労苦は絶大で、数回にわたり国外退去を余儀なくされた。1927年3月、帰米の途次、船上で死去、故郷のミフリンバーグに埋葬された。夫人のメアリも1937年、日本軍の空爆下に



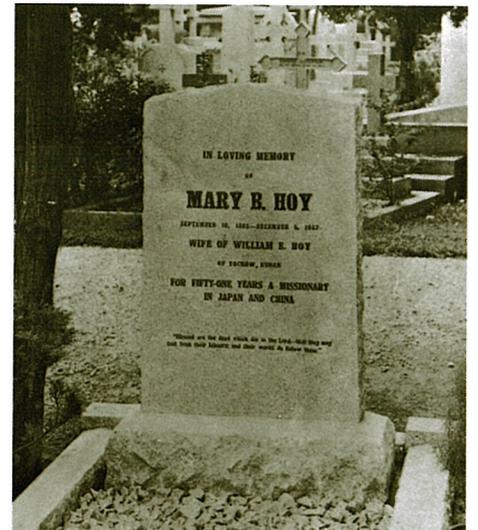
旧湖濱学校前に立つメンセンディク。右はその著『ホーイ伝』
Mensendiek in front of Lakeside School 1984



北山墓地記念碑
Monument in Sendai



ミフリンバーグの墓石
Mifflinburg, PA.



漢口の墓石
Hankow, China

あった岳州で死去、二人の息子の眠る漢口に埋葬された。長女のガートルードは両親の遺志を継いで伝道に献身し、日中戦争を通じて中国に残留した。中国革命ののちは日本に戻り、宮城学院で教鞭を取った。



第三章

LIFE LIGHT LOVE

興隆時代

1901(明治34)年～1930(昭和5)年

III LIFE LIGHT LOVE

第2代院長に就任したシュネーダーは、まず学制の刷新に力を注いだ。1902(明治35)年、普通科は徴兵猶予と上級学校への進学資格を得、2年後には専門部が専門学校令による資格を得た。東北学院発展の基盤はこうして積み上げられて行く。1905(明治38)年、東二番丁に普通科校舎が完成し、翌年には寄宿舎も落成した。一方、東北学院の母胎とも言うべき仙台教会は、1901(明治34)年秋に壮麗な新会堂を建設し、神学部の赤レンガ校舎と文字通り表裏一体をなして東北伝道の中心的役割を果たすことになる。

学生の間文化・体育活動も華々しい時代を迎えた。1911(明治44)年、前院長押川方義を迎えて創立25周年記念式典が盛大に行われた。最初の校歌が全校的に歌われたのも、この時である。間もなく普通科は中学部と改称され、専門部も神学科・文科の他に師範科と商科とを増設した。さらに南六軒丁に校地を取得するなど、著しい発展を遂げようとしていた矢先(1919)、仙台は空前の大火に襲われ、中学部の校舎と寄宿舎が全焼した。半生の努力の集積をことごとく失うほどの悲嘆の中、シュネーダー院長は、これを学院に課せられた最大の試練として受け留め、自ら先頭に立って再建に奔走した。その結果、学内外の広い募金活動に加え、外国伝道局からも多額の補助金を得て、3年後の1922(大正11)年には新校舎が完成し、翌年落成式を行った。正面にはLIFE LIGHT LOVEの3語が刻まれ、その後学院の建学の精神のシンボルとして親しまれることになる。

シュネーダー夫妻は、滞日50年の間に7回帰米し、日米間の国際親善、および学院の教育施設拡充のための資金募集に尽力した。1924(大正13)年の帰米の際も多額の資金を得て帰校したので、すでに取得していた南六軒丁の敷地に専門部校舎建築を開始し、1926年創立40周年記念式とあわせて落成式を行った。またミセス・シュネーダーは、学院内にキリスト教的な社交施設をとの悲願を抱いていたが、この帰米中、年来の希望を実業家ハウスキーパーに訴え、その心を動かして建築資金を得た。1928(昭和3)年に完成したこの社交館は、学生・教職員のみならず教会・婦人会など広くキリスト教関係の集会・社交に使用された。

大正末で同窓生の数は1,000名を越え、海外にもその支部が結成されるに至った。卒業生の中には母校へ戻って教壇に立つ者、国内外で伝道の任に就く者、学界や官界・実業界に活躍する者なども少なくなかった。また、外国伝道局からはノッス、ゲルハード一家、ゾーグなどすぐれた宣教師が次々と派遣され、学院をはじめ東北伝道史の各時代にわたって親しみ深い思い出と功績を残した。

シュネーダー院長は、学院のキリスト教教育の完成のため学校教会設立の必要を痛感していたが、帰米の際ラウハウザー女史から得た5万ドルの献金を基に、南六軒丁に礼拝堂を建築した。1932(昭和7)年、満州事変勃発の翌年である。



東北教會時報第壹卷第拾號
日五廿月五年四卅治明 (二)

本多庸一、笹尾兼太郎、マツデン、ノッスの四氏一團となりて七月一日より山形、秋田、岩手、青森の四県を巡回せられ、その途次新庄等に於ても演説會を開かるゝ筈なり。

● 押川方義氏
押川方義氏は去月申請より歸朝同月廿四日來仙、日本基督教會労働會東北學院等に於て説教演説の勞を取られ、五月一日午前零時十五分發の電車にて歸京せられたり。同氏は慶親王李鴻章等を謀り同國貴族の教育を盡力せらるゝことゝかりたるふつゝ、其創立以來在任せられたる東北學院長を辭せられ同學院顧問とあられたり。

● 新任東北學院長
前項記載の通り押川氏東北學院長の職を辭せられたるにより、シュネーダー博士の後に推舉せられ、態度も同辭せられたれど、理事日會の懇請より遂に就任せられたり。

● 仙臺日本基督教會近況
本年三月半ばより四月末までの調査によれば禮拜式出席の最大数は二百八十一名、最小数は百三十名、おして平均百六十二名強、祈禱會は最大數七十五名、最小數十八名、平均四十二名強、日曜學校は平均百三十名、四千五百四十一名、

● 決議し青森
時過閉會
三年五月一
名、減二十
市内在任
十一名。同
厘、支出
圓〇一錢八
七拾四錢四
六十八圓三
日曜學校は
人、生徒出
集金及び利
計は集金總
堂建築費寄
計五十七圓
圓八十七錢
積預凡一
千五百四十一

Synod Report

- 校長履歷
- 一 北米英國マシエルケア州
 - 一 宮城縣仙臺市奉天會館地居住
 - 一 ティンバクト、ボシニシエニクイ
 - 一 西曆一千八百七拾年三月廿九日
 - 一 千八百七拾年九月令衆國マシエルケア州
 - 一 州に於て公立學校教師トナリ千八百七拾六年三月マシエルケア
 - 一 月マシエルケア
 - 一 千八百七拾六年九月令衆國マシエルケア州
 - 一 クリミアマシエルケア州ニ入學千八百七拾年六月同校ヲ卒業ス
 - 一 千八百七拾年九月令衆國マシエルケア州
 - 一 アンド、マシエルケア州豫備科ノ英語教師ト
 - 一 ナリ千八百七拾年拾月モテ繼續ス
 - 一 千八百七拾年五月令衆國マシエルケア州
 - 一 スター、神學校ヲ卒業ス
 - 一 千八百七拾年六月令衆國マシエルケア州
 - 一 多ク於て監督教會教師トナリ千八百七拾年六月マシエルケア
 - 一 月マシエルケア
 - 一 千八百七拾七年拾月日本國ニ渡來ス
 - 一 千八百七拾年八月令衆國マシエルケア州
 - 一 院教師トナリ現今尚ホ繼續ス
 - 一 千八百七拾年八月令衆國マシエルケア州
 - 一 院教師トナリ現今尚ホ繼續ス
- Schneder Curriculum Vitae

BOARD OF DIRECTORS

DAVID B. SCHNEDER, D. D., *President and Treasurer.*

KUMETARO SASAO, PH. D., } *Secretaries.*
CHRISTOPHER NOSS, A. B., }

MASAYOSHI OSHIKAWA, (*Counselor.*)

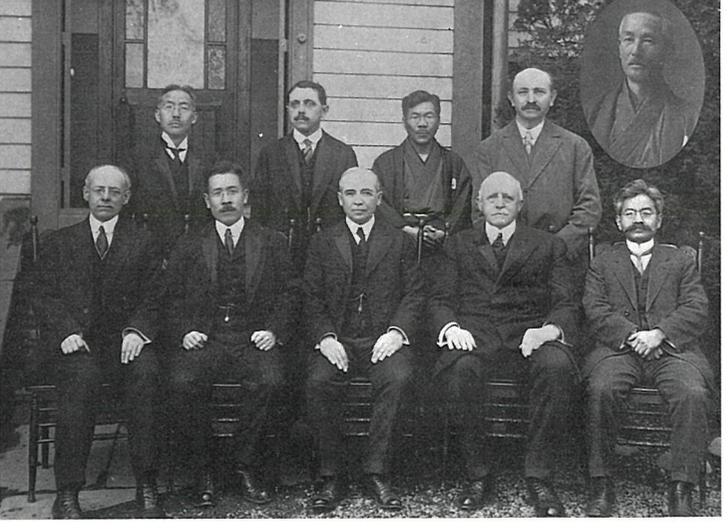
CHOHACHIRO KAJIWARA.

PAUL LAMBERT GERHARD, A. M.

ALLEN K. FAUST, A. M.

TEIZABURO DEMURA, A. M.

WILLIAM E. HOY, A. B., } *Honorary Members.*
MIBUO SAITO, }



理事会

シュネーダーの院長就任

押川とホーイの辞任後、院長に就任したのは44歳のシュネーダーである。以後の東北学院の発展はその人格と学識、信仰と祈りに委ねられた。これを支えたのは理事のノッス、ゲルハートらの宣教師、笹尾兼太郎、出村悌三郎、梶原長八郎などであった。

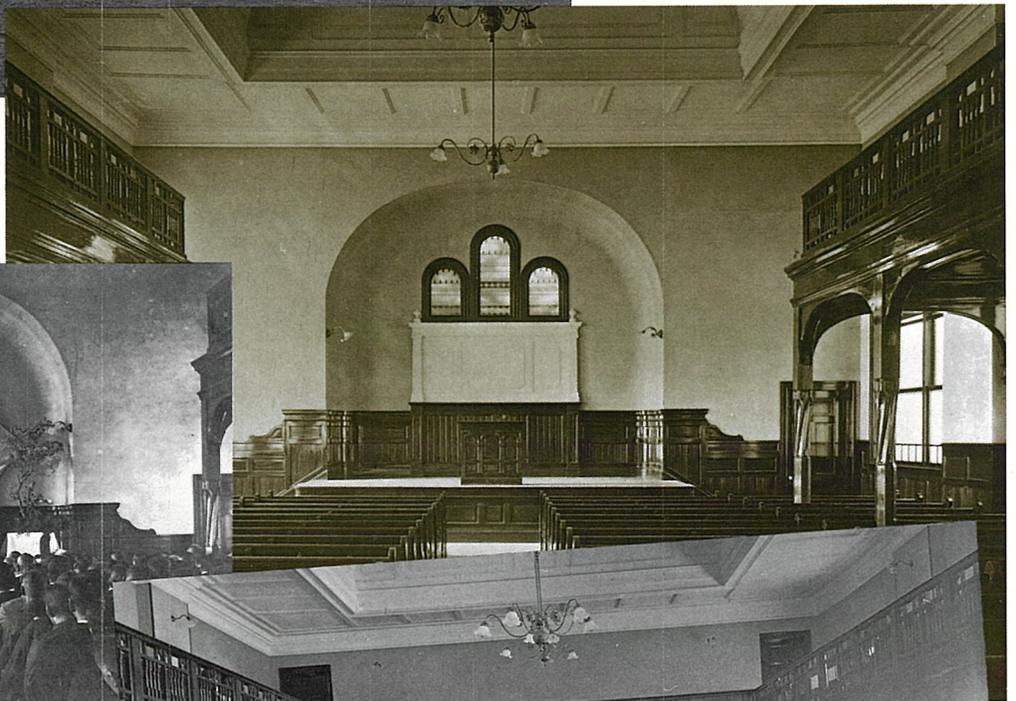


The Middle School Building



Painted by T. Fuse

Chapel Front



礼拝堂正面(創立25周年)

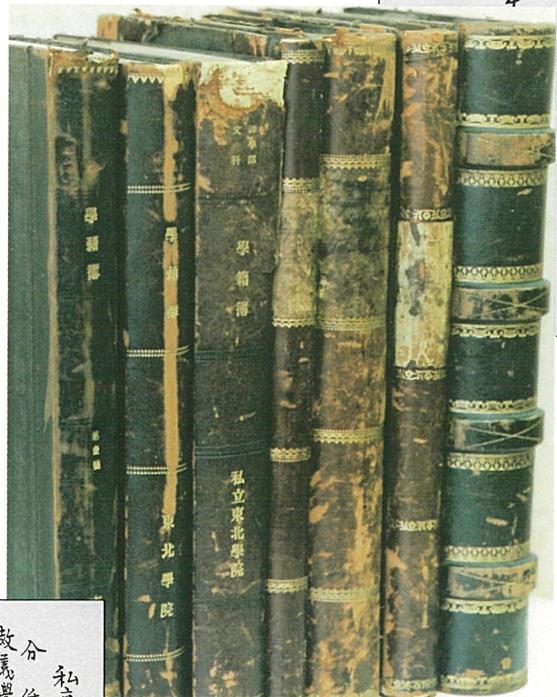
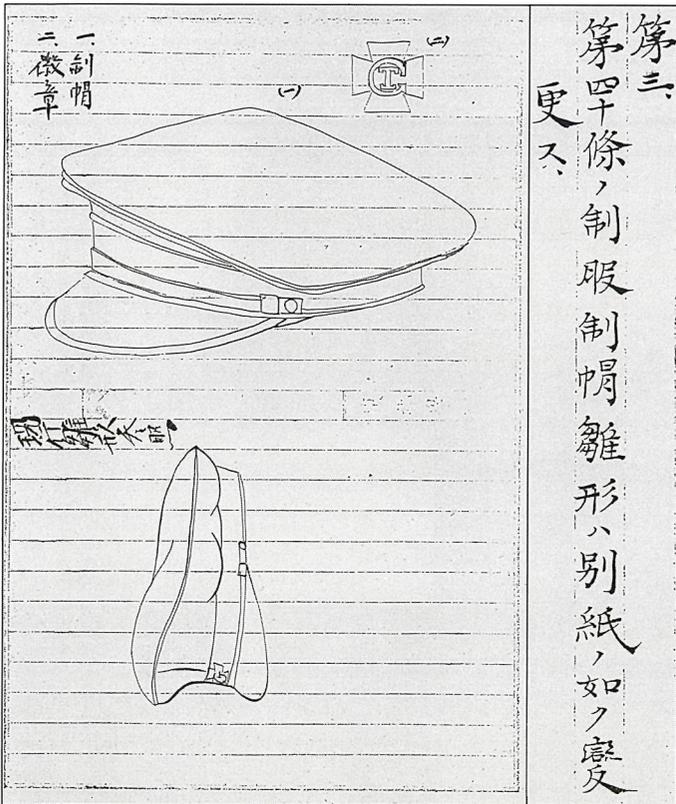
Chapel Balcony



普通科校舎の建築

シュネーダーの最初の事業は普通科校舎の建築で、1905年には総赤煉瓦の壮麗な建物が東二番丁校地に完成した。因みに、明治45(1912)年4月現在の在學生数は、普通科361名、神学科および文科合わせて250名であった。

本學院専門科文學部及神學部ヲ明治三十六年三月二十六日勅令第六十號專門學校令ニ依リテ認定相成度別紙書類相添ヘ以テ上申候也
 明治三十六年三月廿六日
 私立東北學院長 不才 牛
 文部大臣 久保田 讓 殿



私立東北學院専門科教員表

分任學科	專任兼任別	職名	氏名
神學部 教會學	本院普通科兼任	學院長	シエネカ
神學部 倫理學	本院普通科兼任	教授	福澤定興
神學部 國文學	本院普通科兼任	教授	深田康守
神學部 倫理學	本院普通科兼任	教授	伊藤鐵藏
神學部 倫理學	本院普通科兼任	教授	出村信三郎
神學部 倫理學	本院普通科兼任	教授	ケルハルド
神學部 倫理學	本院普通科兼任	教授	中村長之助
神學部 倫理學	本院普通科兼任	教授	梶原長八郎
神學部 倫理學	本院普通科兼任	教授	フアウスト
神學部 倫理學	本院普通科兼任	教授	芭尼余太郎
神學部 倫理學	本院普通科兼任	教授	須藤鬼一
神學部 倫理學	本院普通科兼任	教授	七種泉三郎
神學部 倫理學	本院普通科兼任	教授	阿却能文
神學部 倫理學	本院普通科兼任	教授	落合吉之助
神學部 倫理學	本院普通科兼任	教授	デホレスト
神學部 倫理學	本院普通科兼任	教授	ウーレンバ

Faculty Members

私立東北學院専門科課程表

學科	科目	年次	時数
神學部	神學	第一學年	12
	神學	第二學年	12
	神學	第三學年	12
	神學	第四學年	12
	神學	第五學年	12
	神學	第六學年	12
	神學	第七學年	12
	神學	第八學年	12
	神學	第九學年	12
	神學	第十學年	12
	神學	第十一學年	12
	神學	第十二學年	12
文學部	文學	第一學年	12
	文學	第二學年	12
	文學	第三學年	12
	文學	第四學年	12
	文學	第五學年	12
	文學	第六學年	12
	文學	第七學年	12
	文學	第八學年	12
	文學	第九學年	12
	文學	第十學年	12
	文學	第十一學年	12
	文學	第十二學年	12

College Curriculum

専門部・神学部の発展

前記のように人数の上で多数を占めたのは普通科（1915年より中学部）であるが、その上の専門部は文科、師範科、商科などの専攻を設け、高等教育機関としての地位を確立した。

SCHEDULE OF THE THEOLOGICAL COURSE			
First Year	Second Year	Third Year	
REGULAR COURSE			
Propaedeutics	N. T. Exegesis	N. T. Exegesis	3
Apologetics	O. T. Exegesis	O. T. Exegesis	2
N. T. Greek	Biblical Theology	Dogmatics	4
Hebrew	Church History	Synodics	1
N. T. Expository Study	Dogmatics	History of Doctrine	3
O. T. Expository Study	Christian Ethics	Comparative Religion	3
Biblical Introduction	Homiletics	Christian Ethics	3
Church History	Music	Homiletics	1
Music	Gymnastics	Pastoral Theology and Church Government	2
Gymnastics		Music	1
		Gymnastics	2
25	25	25	25
PROFESSIONAL COURSE			
Bible	N. T. Exposition	N. T. Exposition	3
N. T. Exposition	O. T. Exposition	O. T. Exposition	2
Bible, History and Geography	Biblical Introduction	Church History	3
Apologetics	Biblical Theology	Dogmatics	3
Propaedeutics	Church History	Synodics	1
History and Geography	Dogmatics	Comparative Religion	3
Educational Psychology	Christian Ethics	Christian Ethics	3
Physiology	Homiletics	Homiletics	1
English	History of Philology	Pastoral Theology, Church and Government	2
Chinese	English	English	3
Music	Chinese	Music	1
Gymnastics	Music	Gymnastics	2
	Gymnastics		2
27	27	27	27

神学部カリキュラム

Theological Department

AIM

It is the aim of the Theological Department to prepare young men for the Christian ministry. There are two courses, a Regular Course and a Provisional Course, each of them covering three years. The Provisional Course has been established to meet the present urgent need for Christian workers, by making provision for such candidates for the ministry as for various reasons can not take a full course of preparatory training.

FACULTY

DAVID B. SCHNEIDER, D. D.,
Propaedeutics, Dogmatics and Practical Theology.

CHRISTOPHER NOSS, A. B.,
Apologetics and Christian Ethics.

WILLIAM E. LAMPE, A. M.,
New Testament Exegesis.

CHOHACHIRO KAWAHARA,
Exegetical and Practical Theology.

KEMETARO SASAO, Ph. D.,
Exegetical Theology, Philosophy and Comparative Religion.

ALLEN K. FAUNT, A. M.,
Psychology.

TEIKAKURO DEMURA, A. M.,
Chinese.

SABURO FUREZAWA (Special Teacher),
Chinese.

KOICHI MOHIMOTO (Special Teacher),
History and Geography.

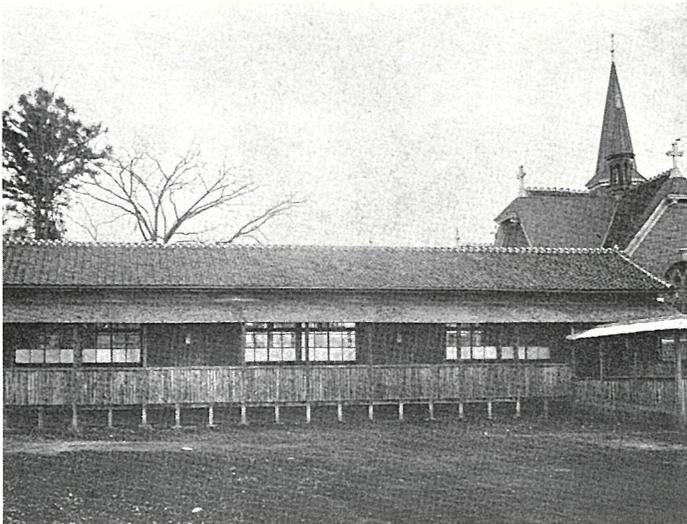
193

BIBLE WOMAN'S WORK.

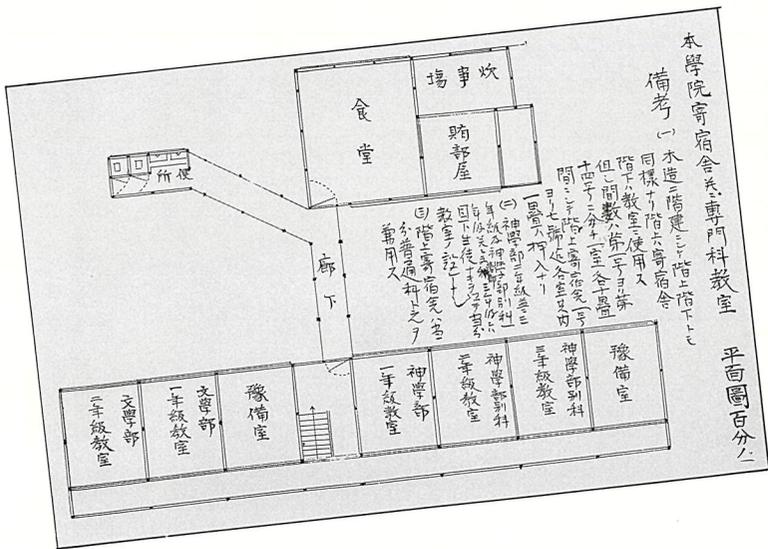
Our Bible Women are doing a splendid work. Japan is no exception to the rule that the great work of bringing women to Christ must be done largely by their own sex.

*Diagram of School Property
Japan Mission
Santai, Japan.*

of these women will be found among the majority of whom are graduates of the Mission, or by individuals who are supported by the Mission, but it is not a feeling of obligation to

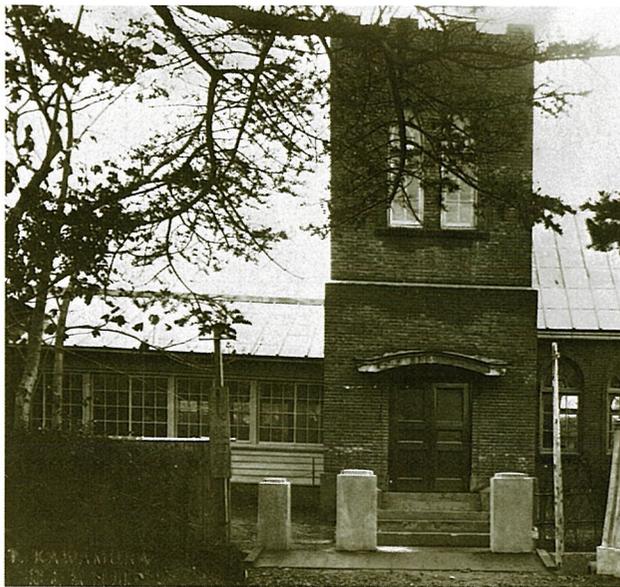


専門部教授陣 Faculty

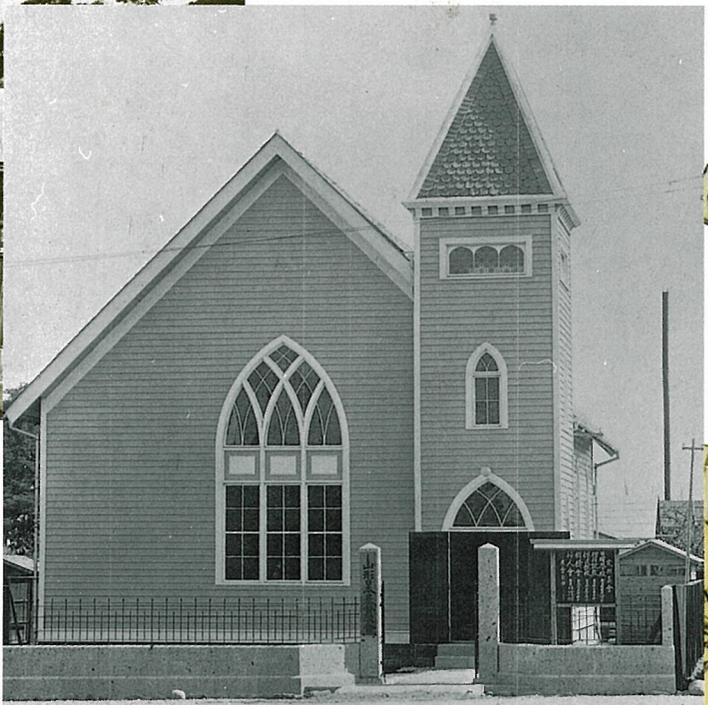


専門部学生 College Students

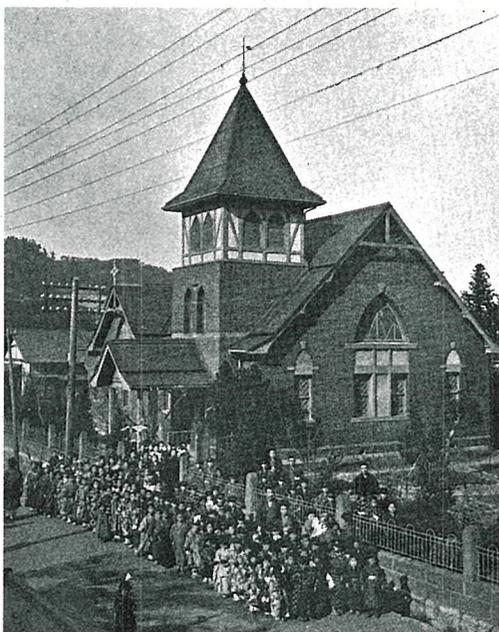
最終的には神学部は高等学部卒業後さらに三年の課程を設け、日本基督教会の教職者養成に大きく貢献する。出身者は東北のみならず広く全国の教会に赴任した。その50年の歴史で卒業生は300名を越えた。



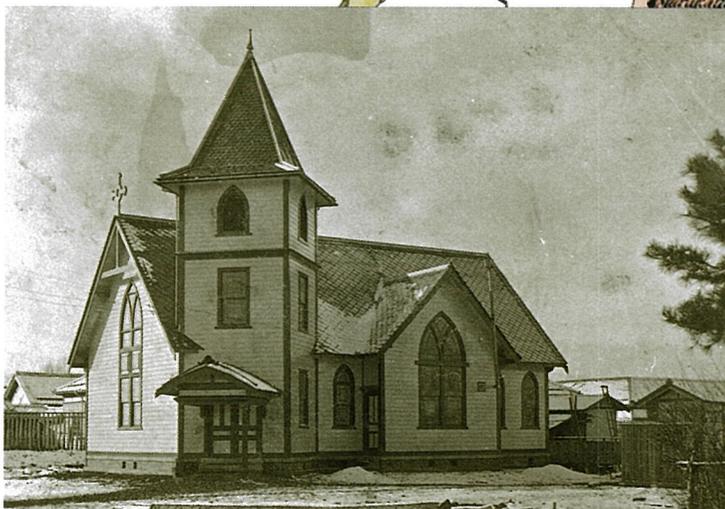
秋田教会 Akita



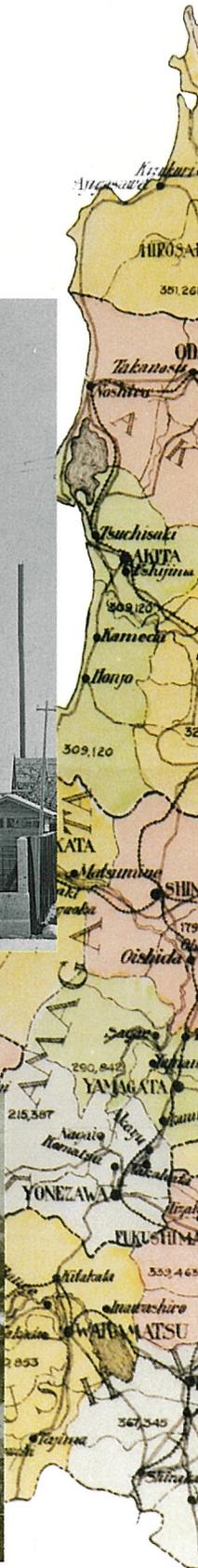
山形教会 Yamagata



福島教会 Fukushima

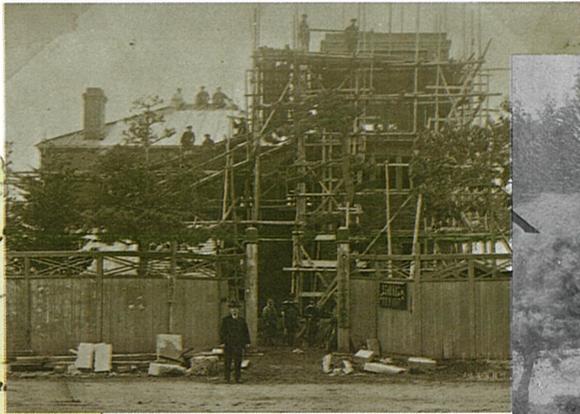


若松教会 Wakamatsu

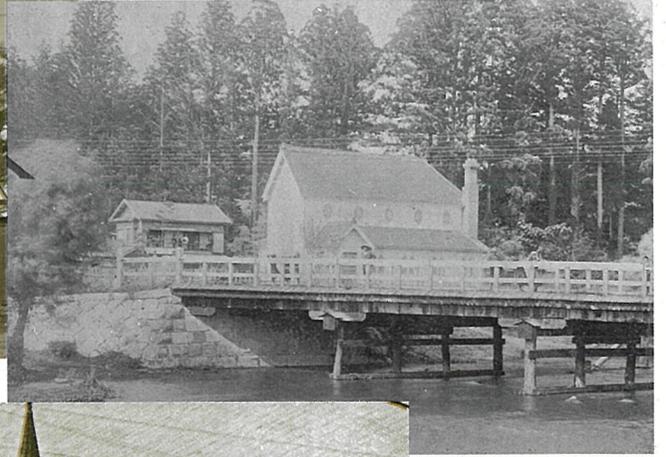


東北の諸教会

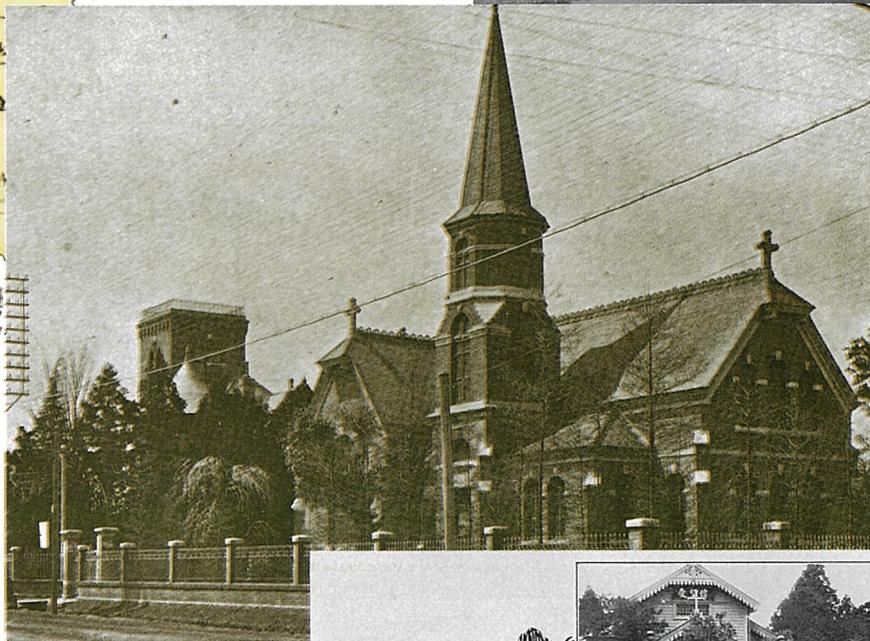
ドイツ改革派は日本伝道開始の時点で、それまで未開拓の東北地方に責任を持つこととなった。日本基督教会東北中会は宣教師団と協力して、宮城はもちろんのこと、青森から岩手、秋田、山形や福島で活発な伝道を展開した。1923（大正12）年の中会記録によれば、



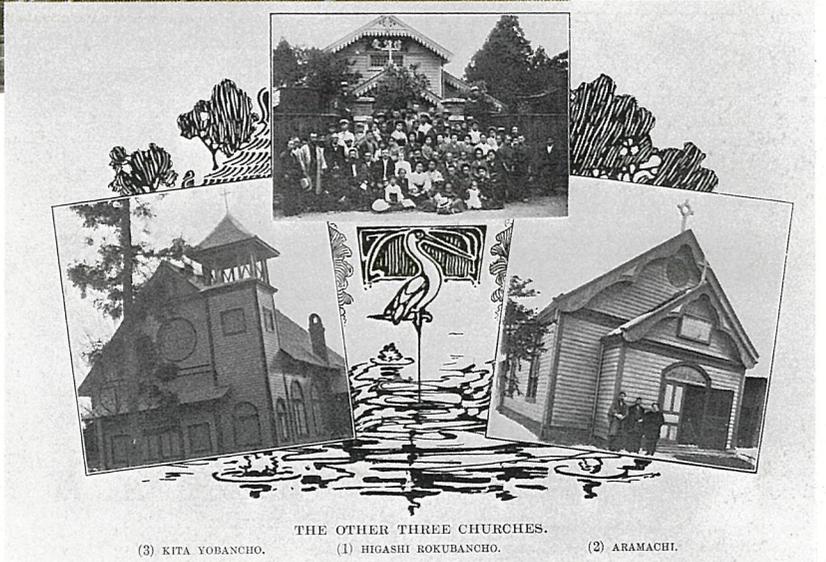
青森教会 Aomori



盛岡教会 Morioka



仙台教会
The Sendai Church



仙台市内の三教会

東北6県の関係教会数は伝道所を含めて56、教職者54名、信徒総数3842名、献金総額は24058円に達した。この年、外国伝道局は宣教師14名を派遣し、東北学院、宮城女学校、諸教会に約75万ドルの援助を支出している。



商科広告研究会
Abvertisement Club
1927

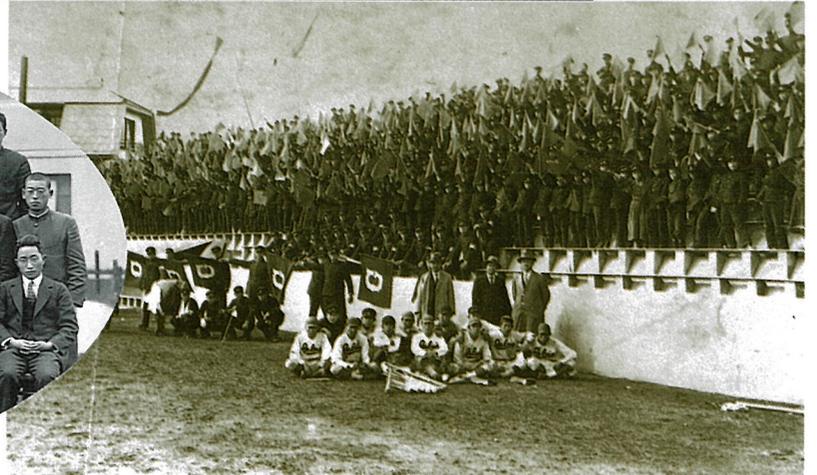


グリークラブとゾーグ夫妻
Glee Club Members

英語劇 Drama Club



キリスト教青年会 1929
YMCA Members



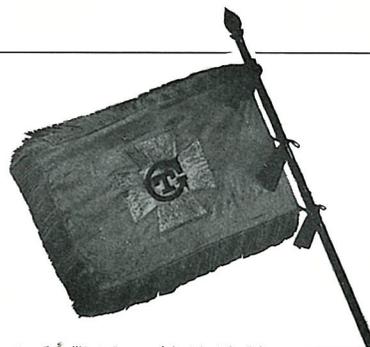
中学部応援団風景
Middle School Cheer-Leaders' Party 1930

活発な学生活動

学制が整うと共に、文芸・体育の各分野でさまざまな活動が展開された。写真は商科の広告研究会の展示、英語のシェイクスピア劇、グリークラブの活躍などを示す。他方、運動部の活動も盛んで、例えば柔道部は三年連続全国制覇の偉業をなしとげたので、優勝旗は



永久保持となった(1926年)。その他、野球、サッカー、テニス、弓道など、東北の雄としての学院の名は全国に聞こえた。



25th Anniversary with Former President Oshikawa



一 登國樹徳光りびえ
 福香澎湃岸を噴み
 處もたへに時を得て
 庶幾く北斗を匂ひ來む

二 攝理の御手の畏きに
 幾城雪の辛酸も
 内外の教友よ恵まよ
 はたどせ餘り春深み

三 師恩のつなぎ絶えもせず
 聖き汗血とがれし
 けみ屏樓の天を靡し
 いよ理想を榮えてゆく

四 感恩に胸の弦鳴れど
 願ふは「靈殿」の八束穂の
 陸へる友よ「聖路」ふみ
 「信」望「愛」の心候しく

五 時劫の岸に頼げば
 また初さゝび行手にも
 おはれ樓頭五十尺
 風信機に纏れる校名を

六 校歌ゆたけき日の本の
 靈潮廻りて玄き頃
 珠雙龍のるがごと
 T G 章の色ゆかし

七 健児の群のつぎひ来て
 此處を「ホー」餘所に異む
 母校の庭分したはしき
 於東北の「光榮」かも

八 靈覺著き礎に
 其がこしかたの史橋ば
 院道奇しく地に響びて
 其の所縁さう傳はるれ

九 いま断いてん術もなく
 やがて實らん折をこご
 國に奉仕へて民念ひ
 真の幣たらはせよ

十 要護の幸の齋かれて
 雲の柱が頼まるゝ
 われ人共に仰ぎ瞻む
 壽入けふこそ嬉しけれ

十一 日本帝國萬々歳
 東北學院萬々歳

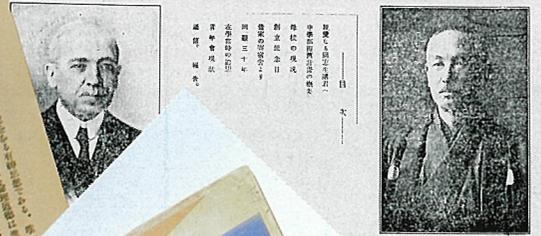
歌 校 及 旗 校

School Flag and School Anthem

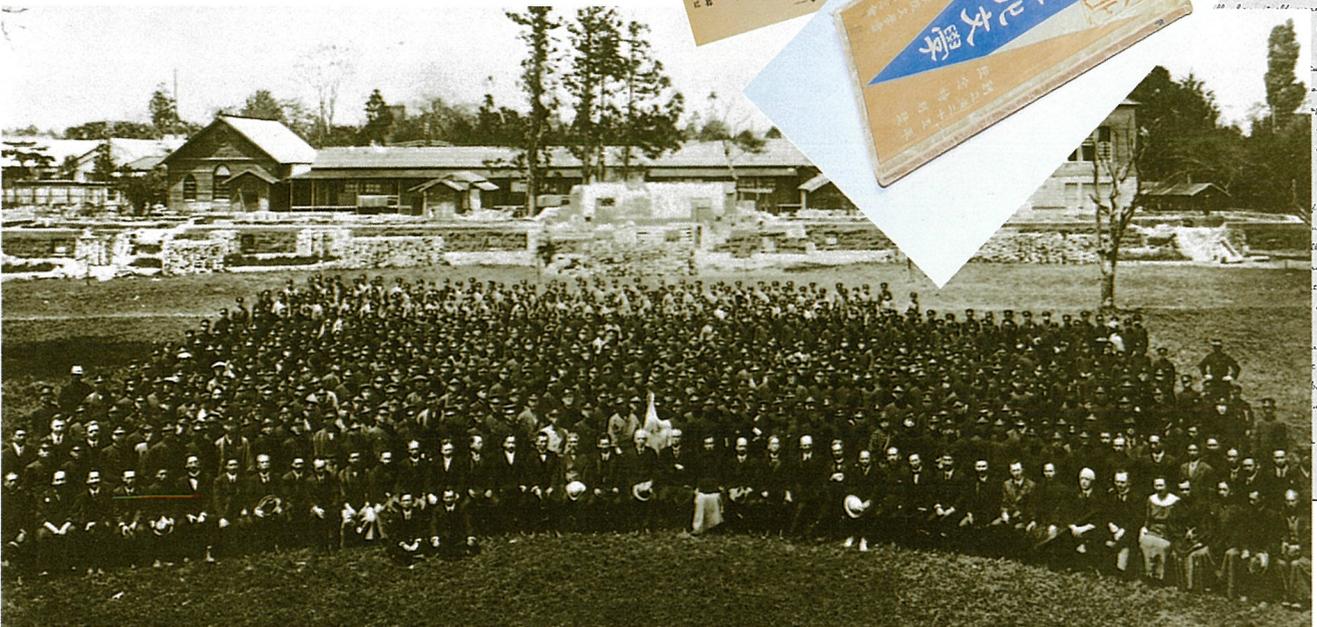


25th Anniversary with Memorial Banners
記念のパナーを持つ教職員・学生

(一) 號三十四第 報時院學北東 日十月六年十正大
報時院學北東
 ▶ 號念記年週五十三立創 ◀



押川先生講演大要
 先生は、本校の創立二十五年を記念して、本校の歴史を振り返り、その間、先生が本校に与つた影響を述べられた。先生は、本校の創立は、日本の教育界に大きな影響を及ぼしたと述べられた。先生は、本校の創立は、日本の教育界に大きな影響を及ぼしたと述べられた。先生は、本校の創立は、日本の教育界に大きな影響を及ぼしたと述べられた。



35th Anniversary, Temporary Classrooms in the Rear

completed thirty-five years of
 a month. During these years,
 school has done a good work for
 us... and more on the
 this thirty-fifth
 sure. Of the work
 an war confidence,
 spiritual education
 work like that of
 alumnus with one
 But this begins
 of about 6,000 you
 out or must raise
 ll must yet other
 round for Middle
 tiful in the years
 in the Hokkaido
 will be given up
 in each Depart
 t work
 school was found
 mean before for

創立25、35、40年記念式

このころ、創立記念日が5月15日と決められた。25周年には、押川前院長も臨席し(写真右上)、前年制定された校旗の下で、最初の校歌がはじめて歌われた。日露戦争から間もないころとて、軍歌のメロディが用いられたという。

40th Anniversary 新築の専門部校舎

東北學院創立第四十年記念式並
専門部校舎新築落成式執行順序

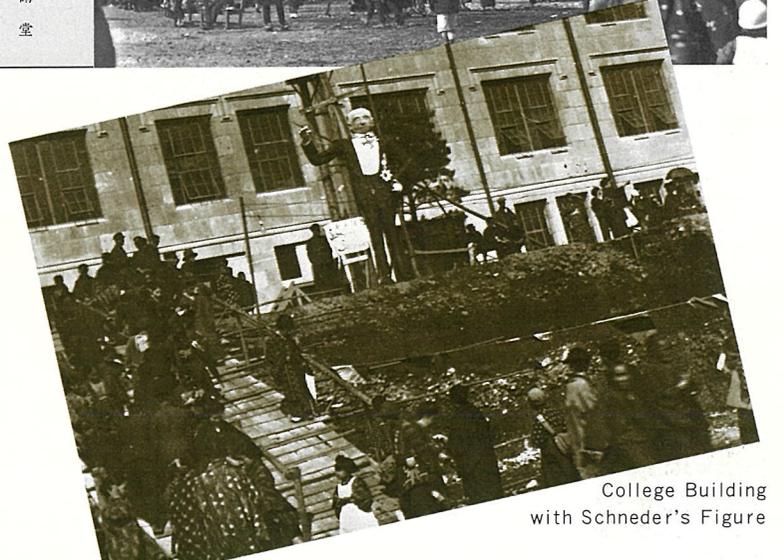
一、十月十六日(土)午前九時 中 學 部 講 堂
 一、開 立 記 念 式 (禮堂、教職員、生徒、同窓生)
 二、器用講話及祝詞
 三、器用講話及祝詞
 四、器用講話及祝詞
 五、演 講 (Jury, I live in Thee) 同 創 立 者 ホーイ博士
 六、感 謝 詞 押 川 方 義 士
 七、感 謝 詞
 八、祝 詞 (田六) 講 師
 九、祝 詞 (田六) 講 師

二、十月十六日(土)午後一時三十分 専門部新校舎屋上
 一、開 立 記 念 式 並 二 落 成 式 (一、校 案)
 二、器用講話及祝詞 (三五番) 院 門 長
 三、器用講話及祝詞 院 門 長
 四、器用講話及祝詞 院 門 長
 五、器用講話及祝詞 院 門 長
 六、器用講話及祝詞 院 門 長
 七、器用講話及祝詞 院 門 長
 八、器用講話及祝詞 院 門 長
 九、器用講話及祝詞 院 門 長

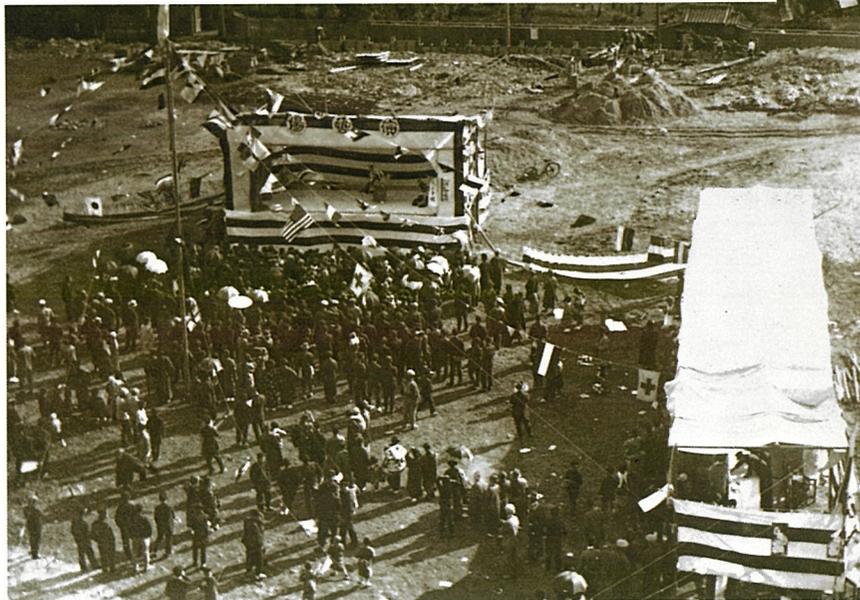
三、同日(土)午後五時 新 校 舎 食 堂
 同 窓 會 禮 堂 並 二 同 窓 會 (會 費 金 委 員 會)
 四、十月十七日(日)午前七時 神 學 部 講 堂
 早 天 祈 禱 會 (午前七時五分 學院教育(中學部講堂))
 五、同日(日)午前十時五分 學院教育(中學部講堂)
 六、同日(日)午後二時 中 學 部 講 堂
 七、同日(日)午後七時 中 學 部 講 堂
 八、同日(日)午後八時 中 學 部 講 堂
 九、同日(日)午後八時 中 學 部 講 堂
 十、同日(日)午後六時三十分 中 學 部 講 堂
 十一、同日(日)午後六時三十分 中 學 部 講 堂
 十二、同日(日)午後六時三十分 中 學 部 講 堂



押川および吉田亀太郎 Old Oshikawa



College Building with Schneder's Figure



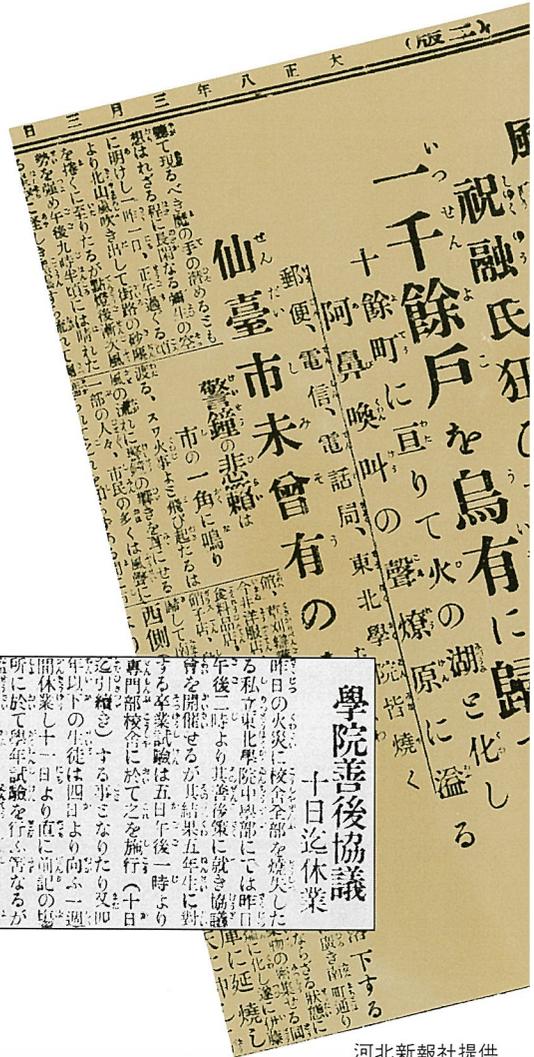
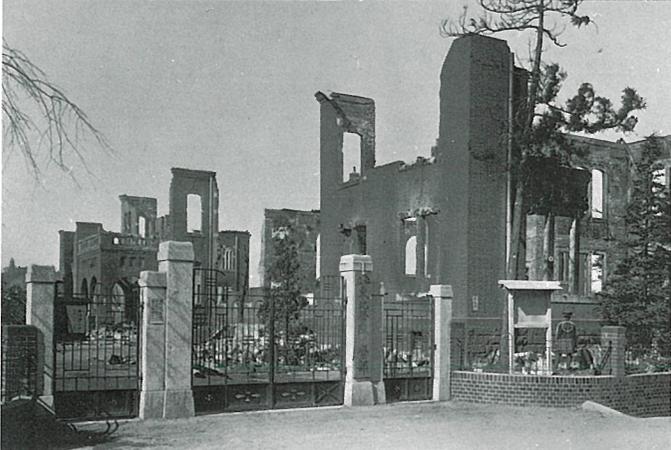
祝賀会場
Reception on the Campus

肅啓愈御清穆の段慶賀の至に奉存候
 陳者本月十六日午後一時三十分より
 南六軒丁専門部校舎に於て本院創立
 第四十年記念式並に校舎新築落成式
 舉行致し候間御貴臨の榮を得度此段
 御案内申上候 敬具

大正十五年十月一日

東北學院長 デー、ビー、シユネーダー

35周年は、中学部焼失の直後で、仮校舎の記念式においてシュネーダーは再建の決意を明らかにした。創立記念日を10月に変更した40周年は、中学部の再建、専門部の新築を祝う喜びの機会となった。創立者の押川とホーイは揃って来校し、祝意を表した。



昨日の火災に校舎全部を焼失した私立東北學院中部には昨日午後二時より其善後策に就き協議を開くが其結果五年生に對する卒業試験は五日午後一時より専門部校舎に於て之を施行(十日引續き)する事となり又四年以下の生徒は四日より向ふ一週間に於て學年試験を行ふ筈なるが尙詳細に涉りて院長の訓示ある日なれば在校生一同は四日前八時東三番丁日本基督教會に集合すべしといふ大に本院にては不日中も新學年開始までに竣成して生徒

河北新報社提供 From Local Newspapers



仙台大火 中学部の焼失と再建

1919年3月2日夜、折りからの強風の中で発した火災は、中学部校舎を焼き尽くし、善美を誇った建物はすべて灰塵に歸した。六十歳を越えていたシュネーダー院長は失望の中から立ち上がり、広く内外に募金を呼びかけ、再建に取りかかった。十数万ドルに及ぶアメ

Foreign Missions

ALLEN R. BARTHOLOMEW, EDITOR

The Housekeeper Social Hall

SOME years ago the need for a building, in connection with North Japan College for the social life of teachers and students, was brought to the attention of Mr. and Mrs. Henry M. Housekeeper of Philadelphia. These dear friends have ever been prompt in giving help to all worthy causes in the Church, and this need at once struck a responsive chord in their liberal hearts. They gave the amount necessary for this building due to the cost of labor and the stands as a memorial to the beautiful life of the sainted Sarah A. Housekeeper. Most impressive dedicatory services were held on March 3rd, in the presence of a large and grateful gathering of teachers, students, alumni and friends of the institution. It is a two-story stucco structure. It consists of a large dining room, a double kitchen and keeper's quarters on the first floor; and one large and three small meeting-rooms on the second floor. The up- nese way of sitting on cushions on the floor. Surely this building comes as a blessing from God, who will bless the man who gave the gift that made the social gift should inspire



ハウスキーパー
H.M. Housekeeper



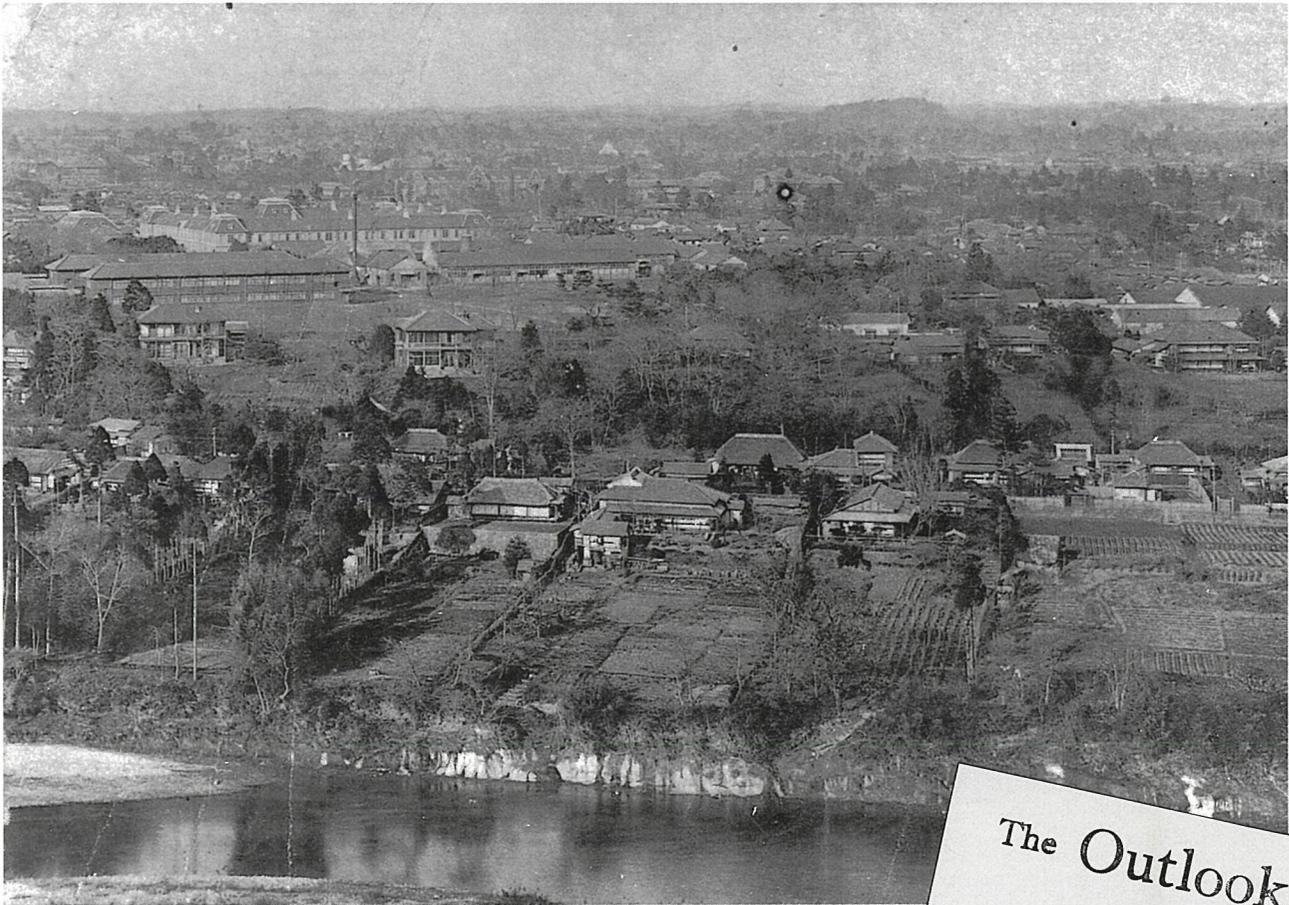
学院教会の集会
College Church Gathering



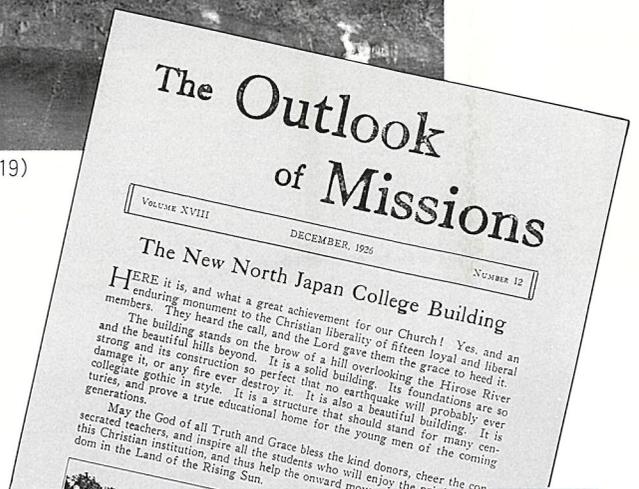
ミセス・シュネーダーのバイブル・クラス
Bible Class of Mrs. Schneder

社交館の建設

かねて伝道と社交のための特別な建物を願っていたミセス・シュネーダーは、篤志家ハウスキーパーの寄付によって、現在の東二番丁校地の一部にハウスキーパー記念社交館を建て、教職員、学生、教会員のさまざまな目的に役立てた。



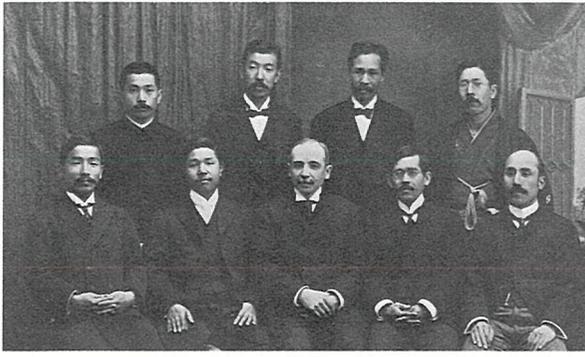
Sendai Then (before 1919)



Sendai Now

専門部校舎の完成

シュネーダー婦米中の募金によって、専門部校舎が完成したのは1926年のことであった。上の写真は土地入手以前の様子を示す珍しいもので、現在の校地および仙台市街との対比が極めて興味深い。画面中央左手に現シップル館と旧ブラッドショー館が見える。



同窓会委員 Officers of the Alumni Association



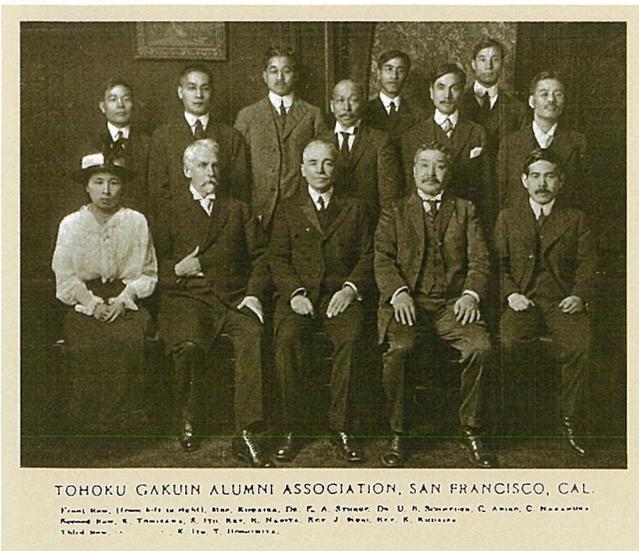
Alumni News No. 1



Alumni Books

年度別卒業生一覽

期	神學科	法學科	本	計
1894.6	2	2	2	6
25.6			3	3
26.6			3	3
27.6	2	3	12	17
28.6	2	4	5	11
29.6	2	2	4	8
30.3	4	4	6	21
31.3	3	5	2	10
32.3			2	6
33.3	2			2
34.3			5	6
35.3	3	4	4	11
36.3			8	12
37.3	神學科	4	12	16
38.3	神學科	2	14	17
39.3	神學科	2	17	21
40.3		2	20	30
41.3			25	28
42.3	2	4	30	39
43.3	2	1	38	45
44.3		8	38	52
45.3		1	29	33
大正2.3	1		40	45
3.3	7	2	58	72
4.3		神學科	38	43
5.3	1	60	7	68
6.3	6	51	10	67
7.3	1	6	58	75
8.3	1	2	63	80
9.3	3	82	11	96
10.3	神學科	神學科	66	69
	第一	第二		
11.3	1	3	85	110
12.3	2		80	109
13.3	2	2	76	103
14.3		3	81	122
15.3		1	85	126
計	41	72	25	1173
			102	15
			25	27
			98	1578



北米支部

同窓生の活躍

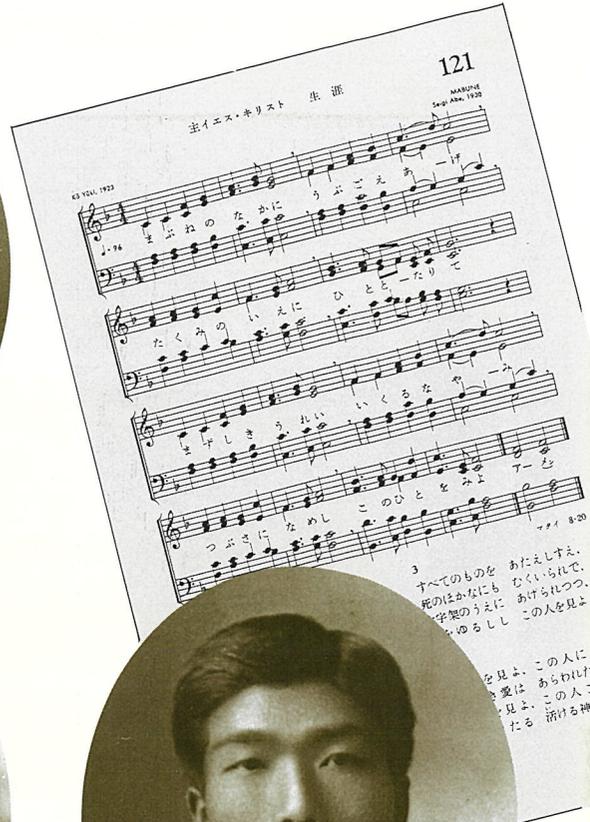
既に早くから同窓会が組織され、シュネーダーが会長に就任していたが、会員数の増加につれて十いくつかの支部や職場T G会が組織され、募金と祈りによって母校を支えた。これまで刊行された名簿の厚さからも会の発展が推し知られよう。



木村清松 S. Kimura, Evangelist



梶原長八郎 C. Kajiwara



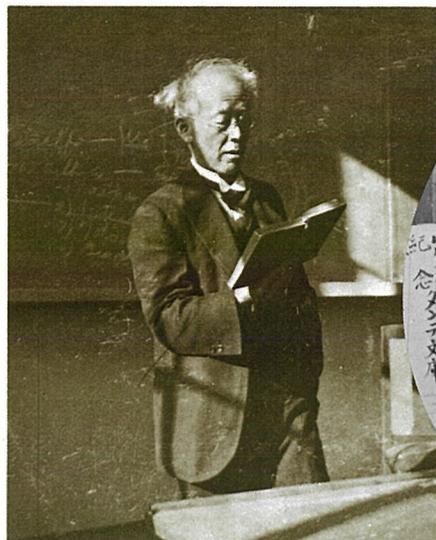
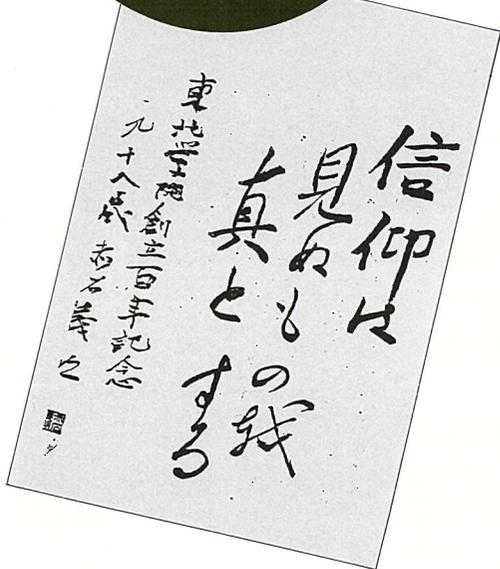
赤石義明 Y. Akaishi



五十嵐正 T. Igarashi



安部正義 M. Abe



山川丙三郎 H. Yamakawa

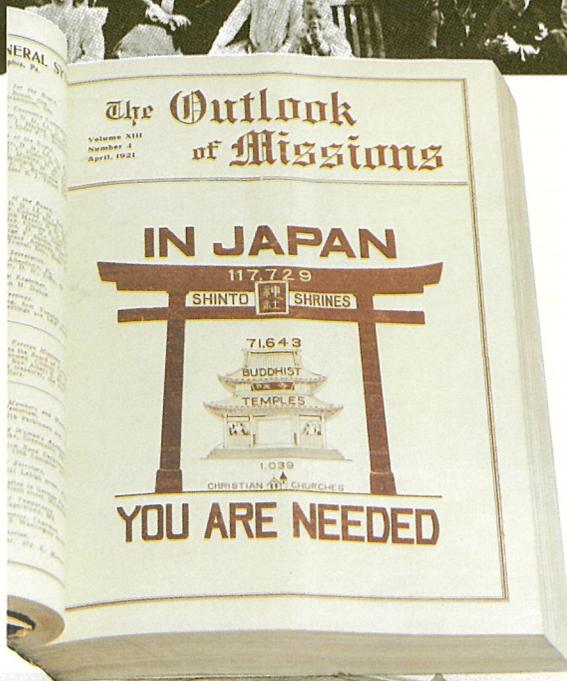


Dante Collection

上には何人かの代表的な卒業生を掲げた。大衆伝道者として知られた木村清松、学生・生徒をこよなく愛した梶原長八郎、現行讃美歌121番「まぶねのなかに」の作曲者安部正義、学院教会牧師赤石義明、中学部長五十嵐正、ダンテ研究家山川丙三郎である。



太平洋を渡る宣教師たち
Missionaries en route to the Fields



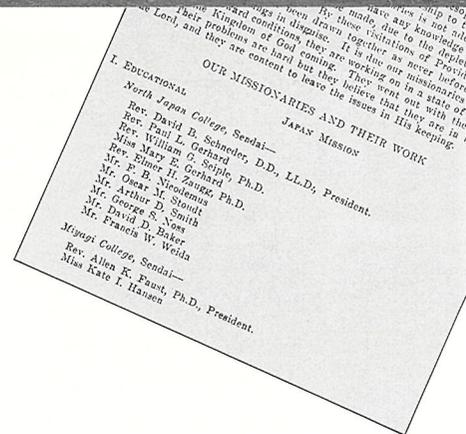
改革派教会の月刊誌



在日宣教師団
Japan Mission



宣教師社団事業所
The Mission Office



宣教師の時代

アメリカの母教会内でようやく海外伝道への関心が高まるにつれて、第一次世界大戦後には多くの宣教師たちが続々と太平洋を越えて日本や中国に送られた。その中には、ランキヤスター神学校教授の地位を捨てて来日し、会津の使徒と仰がれたC・ノッス、山形・秋



ノッスと家族
The Noss Family



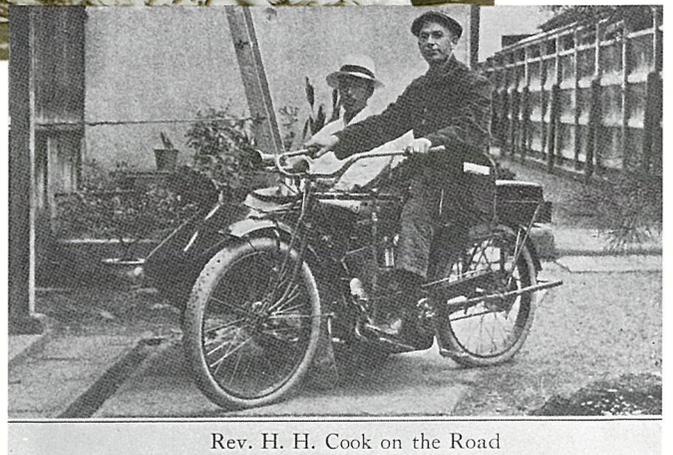
会津伝道中のノッス
Noss itinerating

在日宣教師団
Japan Mission



For I am not ashamed of the gospel,
for it is the power of God unto salvation
to every one that believeth.

北山墓地クックの墓



Rev. H. H. Cook on the Road

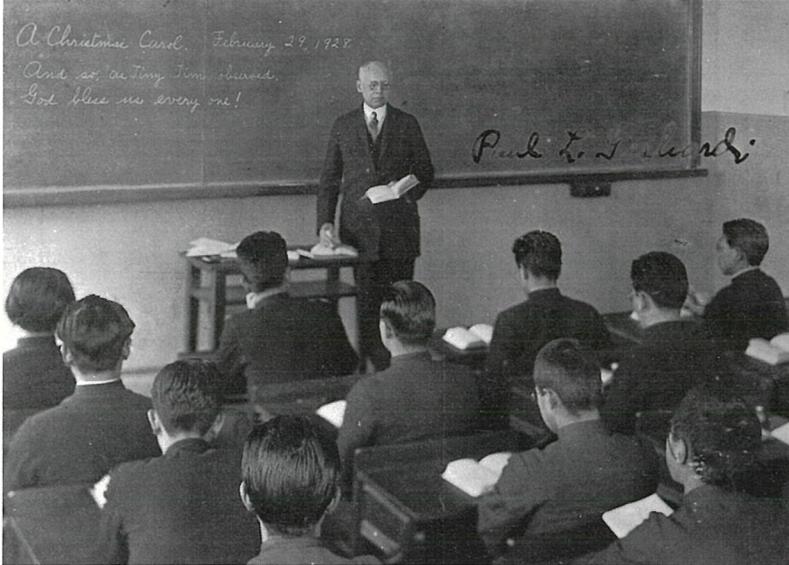
田に伝道したが、若くして歿したクック、宮城女学校で長く教鞭を取り、広く敬愛を集めたファウストやクリーテ、ハンセンとリンゼーなど数え切れない人材が多数含まれる。



P.L. ゲルハートと家族
The Gerhard Family



ミス・ゲルハート
Bible Class of Miss Gerhard



ゾーグと家族
The Zaugg Family



ゾーグと学生たち 1941

ゲルハート一家は、独自の授業法で知られたポール・ゲルハート、その妹のミス・ゲルハート、長男で後に音声学者として戦後日本の英語教育に大きく貢献したロバートなど、数十年にわたって献身し、広く尊敬を集めた。神学部長、財務理事、理事長を歴任したゾー



シュネーダー一家と
アンケニー夫妻
The Schneder Family

『河北新報』1923年10月20日付

在米東北學院院長 シ博士の熱誠 日本救援の奔走に 深甚の同情喚起

シ博士の熱誠、日本救援の奔走に、深甚の同情喚起。シ博士は、東北學院の院長として、日本に於ける震災の惨状を聞き、深く同情を覚悟し、米國に於ける同胞に、日本救援の事をお願いする。シ博士の熱誠、日本に於ける同胞に、深く同情を覚悟し、米國に於ける同胞に、日本救援の事をお願いする。シ博士の熱誠、日本に於ける同胞に、深く同情を覚悟し、米國に於ける同胞に、日本救援の事をお願いする。

院長來信の一節

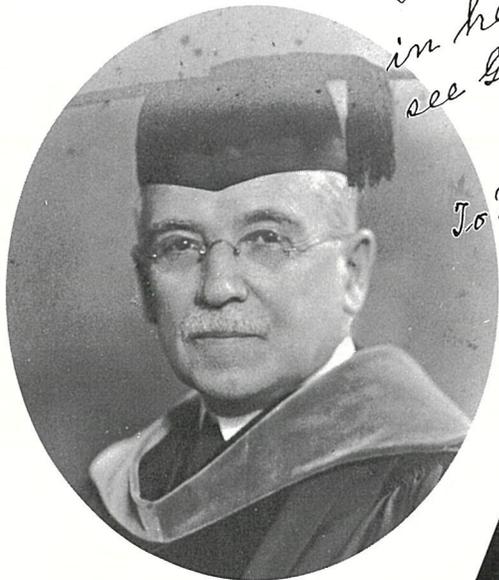
震災の報米國に傳はるや否や、シュネーダー院長は、倒さるれども望を失はず。このローマ字の電文を急送せられたことを以て見ても、今度の震災に就いて如何に院長が學院の上を心痛せられたかが察せられる。なほそれと共に九月三日附にて早速出村院長代理に宛て書翰を送せられ左はその一節である。恐るべき震災の報を得て驚愕に耐えませんが、未だ詳細の事を承知しませんが、定めて紙紙に盡し難き惨害があつたに相違ありません。是が爲めに單に都市や當該地方のみならず、全國家が恐るべき損失を被り進進を阻害せられたるは痛心の至りです。仙臺の入畜に被害なく建築物に破損ならんことを祈つて居ます併し卒業生諸君や學生諸君の中には定めて罹災者がありませう。又近年學院を援助された同情者中に死傷者や被害者があること、想はれます。私共は是等の方々に対し衷心より同情を表し又神に祈願を捧ぐるものであります。米國が全力を盡して同情を表することを希望し、私共も人々に出來得る限りのことをするやうに獎勵して居ます。



関東大震災(上野駅附近)
Kanto Earthquake (1923) and Schneder's Appeals for Help

グは現行校歌の作曲者である。シュネーダーの長女メアリは宮城学院の宣教師として奉仕したが早逝した。次女マーガレットはA.アンケニーと結婚し、二人とも数十年にわたって日本伝道に尽力した。晩年のシュネーダーは風貌までも日本人らしくなり、学院関係者や

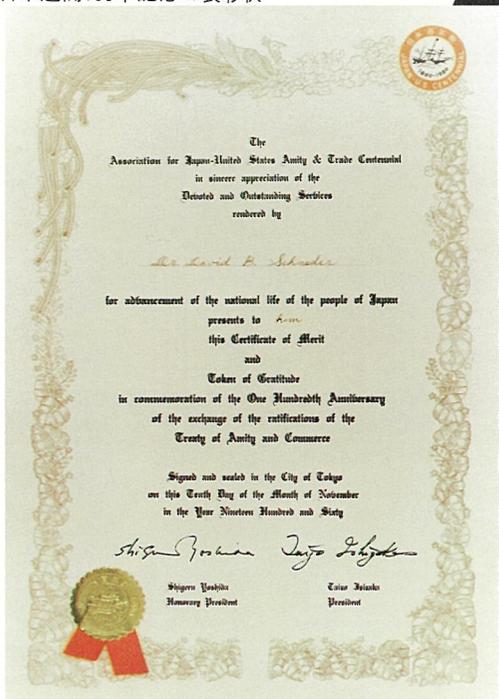
"Blessed are the pure
in heart: for they shall
see God." Matt. 5: 8.
D.B. Schneder.
To Mr. C. Okamoto,



Schneder with T. Kagawa



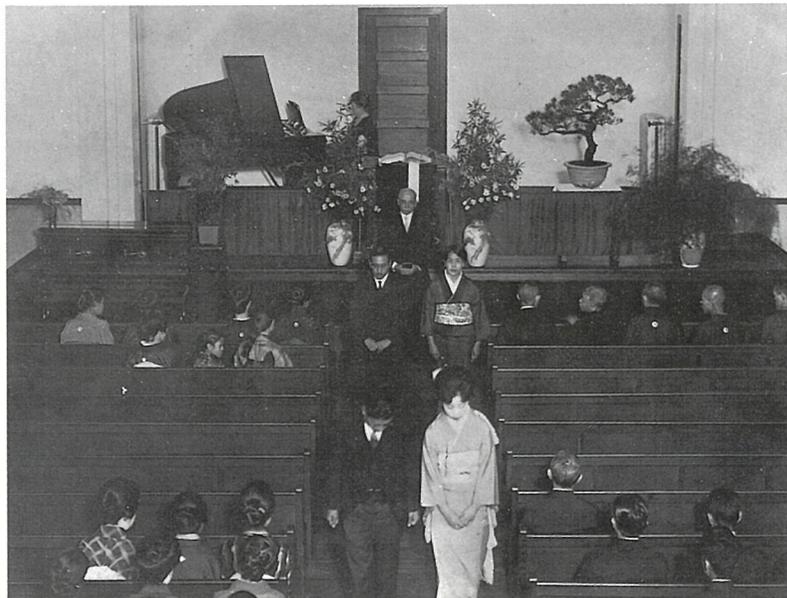
日米通商100年記念の表彰状



河北新報社提供
From Local Newspapers
(1934年8月11, 12日)

「ダニエル会」(聖書研究会)
Schneder's Bible Class 1933

仙台市民だけでなく全国的にも知られ、政・財界にも支持者が少なくなかった。また、日本在住宣教師たちの長老として、キリスト教勢力を結集した高度の総合キリスト教大学の創設を提案している。他方ミセス・シュネーダーは飾らない人柄と持ち前の伝道熱心によ



酒井暎吉結婚式司式のシュネーダー
Schneider officiating at Wedding Ceremony

伝道に「出陣」するミセス・シュネーダー
Onto the Field of Battle



Inviting the Graduating Class



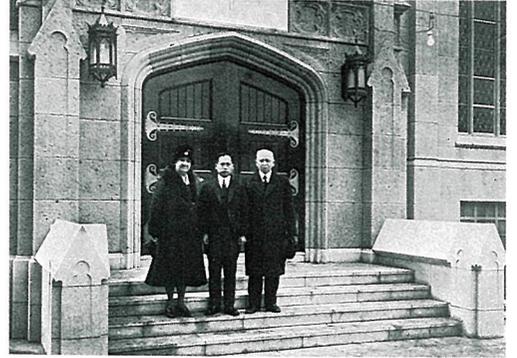
Tract on
"Visiting
Evangelism"



Visiting the Sick

って、ことに婦人たちの間で大きな成果を収めた。写真は病者を訪ねて祈る夫人とヘルパーの布施豊世。左中央は卒業する学生たちを社交館に招待する夫妻。学生の多くはその折りに生まれて初めて洋食の食べ方を習ったと伝えられる。

シュネーダー夫妻と赤石牧師
The Schneders with Pastor Akaishi



學院教會の設立

基督教主義の學校に學校教會のあることは當然のことである。吾が學院にも其必要の唱道されて居つたのは久しいことである。邁般學院理事會にて學院の教職員及其家族並びに生徒の禮拜傳道を目的として、愈々學院教會を設立することゝなつた。

となり學校として届かない宗教教育を此所に充分施行することが出来ることゝ學院の使命を果すことが出来ることゝ期待されて居る。先頭創立者會が開かれ其中から委員を擧げ設立の準備、牧師招聘等の重要な事項の決定をなさしむることゝなつた。禮拜は直に次ノ日曜日から開始さるゝ筈である。尙教會の設立せられるまでの間當分中學部講堂を用ゆる筈である。(一期)

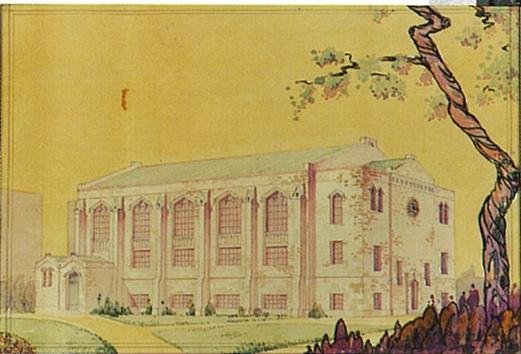


ラーハウザー
E. A. Rahauer

The Rahauer Memorial Chapel



完成予定図



ラーハウザー記念礼拝堂の完成

1932年に完成した礼拝堂は千人以上の収容力を持ち、既に仙台教会から分離していた東北学院教會の使用に供せられた。教勢は大いに挙つてたちまち数百人に達した。米国モーラー社製のパイプ・オルガン、英国製のステンド・グラスなど耳目を驚かすに十分であった。

Rom. 1. 16



"Ware wa fukuin wo haji to sezu,
kono fukuin wa judayabito wo haji-
me kirisshiyabito subete shinzuru
mono wo sikiwan to no ~~chi~~ Kami no
chikara tareba

Hata ^{katte} Amerika
to Yurofu ^{aida wa}
kono ^{to} no
tame ^{no}
to ^{subyo}
goza ^{hiku}
naka ^{wandii}
kem-



第IV章

我は福音を恥とせず

苦難時代

1931(昭和6)年~1947(昭和22)年

IV 我は福音を恥とせず

1930年代に入ると全世界に経済不況の嵐が吹き荒れ、アメリカの母教会も極端な財源不足に陥った。昭和初頭には年額5万ドルを越えていた経常費援助も、4割減を余儀なくされ、東北学院は未曾有の苦難に直面するに至った。学院は独立自給を強いられ、経費削減を計ると共に、シュネーダー自ら先頭に立って100万円の基本金の募金に着手し、親交のあった財・政界の有力者にも協力を求めたが、その達成は容易でなかった。

苦難は財政面に留まらなかった。資源に乏しい日本は、国運の伸張を海外植民地と市場の獲得に求め、欧米先進国との経済的・軍事的緊張は高まる一方であった。大正デモクラシーは影をひそめ、非常時体制の強化が叫ばれ、軍国主義への傾斜が急速に強まり、軍事クーデターが続発する。学生・生徒には軍事教練が課され、軍人の教官が配属されるに至るが、キリスト教学校もこれを受け入れざるをえなかった。こうして、満州事変が勃発し(1931)、日支事変へと拡大(1937)、ついに第二次世界大戦へとなだれこんで行くのである。国内の思想統一を画策する軍閥政府の統制強化は、学院にも動揺をひき起こさずにはおかなかった。

1936(昭和11)年に迎えた創立50周年記念を機に、80歳の老院長シュネーダーの「我は福音を恥とせず」と題する説教は、NHKを通じて全国に放送され、深い感銘を残した。それはどのような時代にあっても、建学の精神たるキリストの福音を守り通そうとする祈りの表われでもあった。

辞任したシュネーダーの跡は出村悌三郎が第三代院長として継ぎ、難局に当たることになる。シュネーダー夫妻はアメリカへ渡り、米大統領と面談するなど、緊迫の度を加えつつあった日・米関係の改善・打開に尽力するが、大勢はいかんともしがたかった。シュネーダー夫妻が二つの祖国と呼んだ日・米の開戦を目にせずに世を去ったのが、せめてもの幸いであった。

創立以来50年にわたって多くの有力な伝道者を送り出して来た神学部が、東京の日本神学校と合同する形でその歴史を閉じたのも(1937)、この時代を象徴する出来事であった。

ついに太平洋戦争が勃発し、戦火が激しくなると、文科系学校としての学院の歩みも苦渋の度を加えた。学生・生徒、教員は、あるいは兵卒として応召され、あるいは軍需工場や勤労奉仕に徴用・動員され、校舎や礼拝堂までも軍に接収されるに及び、学院はその存立そのものまでもおびやかされる。苦肉の策として設置された航空工業専門学校が、かろうじて学院の存立を保ったのである。

物心両面にわたる苦難は、1945(昭和20)年7月10日の仙台空襲によって頂点に達した。南六軒丁の専門部、東二番丁の中学部の建物は焼失あるいは破損し、すべてが失われたかのごとくであった。敗戦によって外部からの圧迫は除かれたものの、戦後の窮乏と混乱は復興への途の遠く長いことを思わせるばかりであった。

Old Schneder emphasizes the Christian Heritage (sketched by S.Kikuchi 1931)

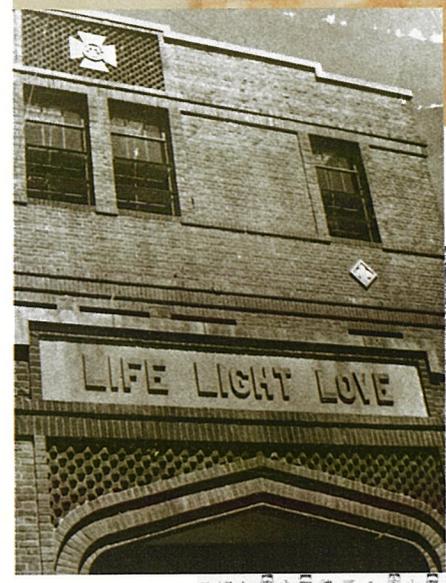


東北学院時報

第百三十三号

送金並に轉居
同窓會用振替口座
○仙臺 八八三番
募金部用振替口座
○仙臺 三三三番
○仙臺 一五一番
會費各社轉居の際には御
察會宛に是非御一報を御
願ひ申上げます

目次
非常時局下に於ける吾等の覺悟 田村 佛三郎
○非常時局下に於ける吾等の覺悟
○基本金寄附約各社へ
○基本金寄附集計書(共七)
○三品 田村 佛三郎
○同窓會
○酒原 佛治



目障りな米英標語
問題になつた東北學院の玄關

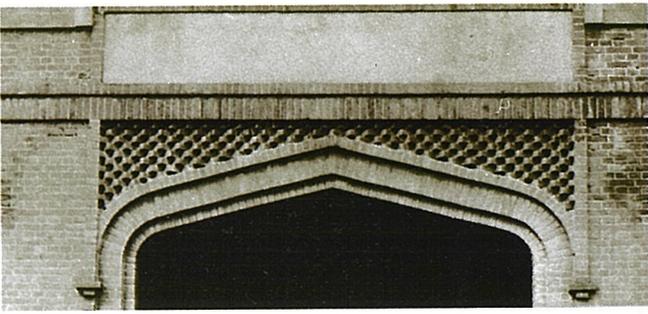
「LIFE LIGHT LOVE」の三文字は、米英の文化を代表するものであるが、我が國の文化を代表するものではない。従つて、我が國の文化を代表するものとして、この三文字を玄關に掲げることが、我が國の文化を代表するものとして、不適切である。従つて、この三文字を玄關に掲げることが、我が國の文化を代表するものとして、不適切である。

非常時局下に於ける吾等の覺悟

田村 佛三郎

我々の國は、今日、空前の大變に對して、生死存亡の境に立たされてゐる。我々の國民は、この大變に對して、如何に覺悟し、如何に奮起し、如何に努力すべきであるか、これが我々の當務である。我々の國民は、この大變に對して、如何に覺悟し、如何に奮起し、如何に努力すべきであるか、これが我々の當務である。

New President Demura's Appeal for National Crisis



Life Light Love erased

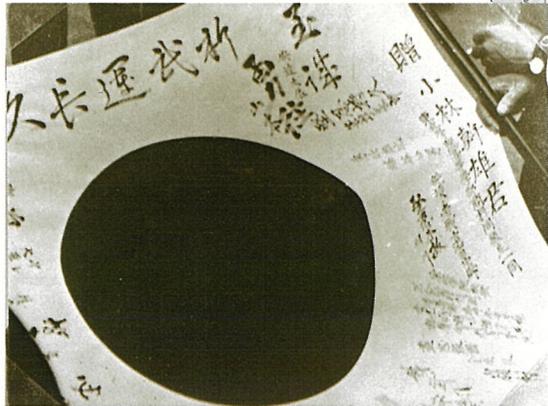
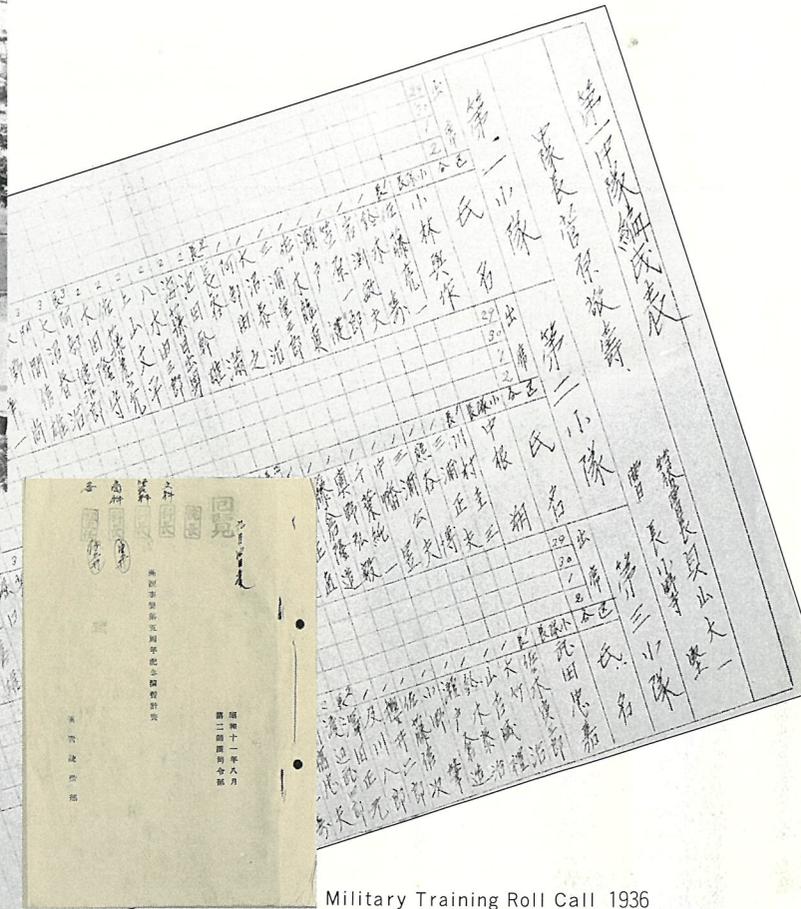
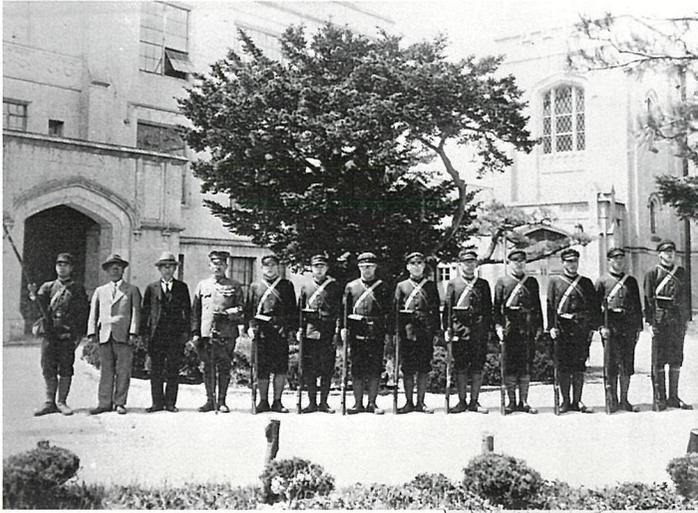
Local Newspaper attacking the English Motto (1942年9月9日付「河北新報」)

「LIFE LIGHT LOVE」の三文字は、米英の文化を代表するものであるが、我が國の文化を代表するものではない。従つて、我が國の文化を代表するものとして、この三文字を玄關に掲げることが、我が國の文化を代表するものとして、不適切である。従つて、この三文字を玄關に掲げることが、我が國の文化を代表するものとして、不適切である。

非常時体制の強化

中学部教諭菊地整吾による上のスケッチは緊迫する時流に対する老院長の憂慮を写し出して余りある。やがて第二次世界大戦が始まると、LIFE LIGHT LOVEの三文字までも敵性語として消去を止むなくされる。

戦歿卒業生慰霊祭の折りに
Students in Military Uniform 1938



With Prayers for a drafted Friend 1939



中学部教練 Military Training in the Middle School

(三) 神観、国体観及国家観等に関する要注意状況

(1) 東北学院配属将校の基督教神観に関する質問問題
 仙台市南六軒丁所在東北学院(日本基督教教会所底)配属将校歩兵大佐安達保蔵は、本年五月十七日同学院高等学部文科三年生に対して「基督と天皇陛下とはどちらが偉いか」との質問を行ひ多少問題を醸せる模様なるが、其の状況左の如し。

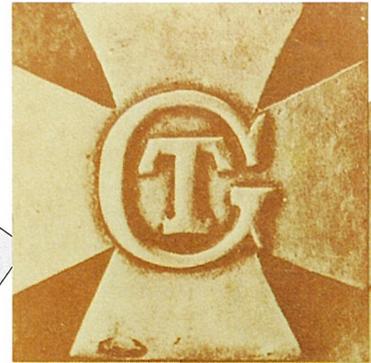
(イ) 配属将校の質問 五月十七日安達配属将校は自己の担任教練を高等学部文科三年生に対し授業(当日雨天の為室内にて授業)中、同学生導の思想動向を打診せんとして、先づ基督教信仰者及受洗者を尋ねたるに数名あり、次で之等数名の学生個人を指名して順次「基督と天皇陛下とはどちらが偉いか」との質問を發したるに、右学生等は質問の意外にして且出題者の真意に疑問を抱き孰れも「本問題は余りにも重大に付書面答申にせられたし」との答を為したる模様なり。

『戦時下のキリスト教運動』(1972)より

軍国主義の足音

った文科系学校の学生には、召集令状が発せられ、ペンを銃に持ち換えた学徒兵たちは続々戦場に向かった。「キリストと天皇とどちらが偉いか」などという設問がキリスト者を悩ましたのもこの時代のことである。

Anniversary Song
 北越学院 創立五十周年記念歌
 北越学院 創立五十周年記念歌
 ALTO MELODY
 TENOR
 BASS



記念運動会
 Field Day, May 15



五十周年記念式
 50th Anniversary



展覧会 Exhibition

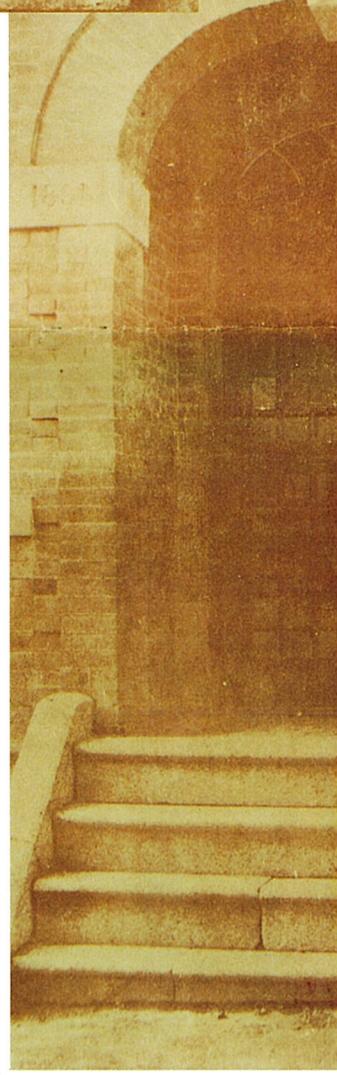
Schedule of Events

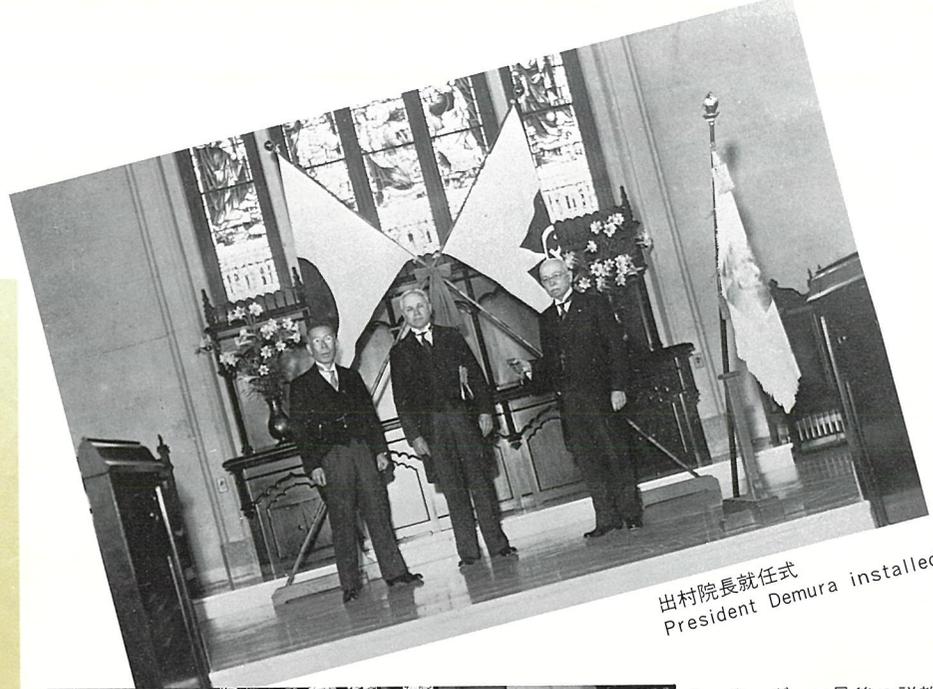
時間	内容	場所
10:00	開会式	北越学院
10:30	記念式典	北越学院
11:00	祝賀会	北越学院
11:30	演奏会	北越学院
12:00	昼食	北越学院
13:00	講演会	北越学院
14:00	懇話会	北越学院
15:00	閉会式	北越学院

北越学院 創立五十周年記念行事

創立50周年記念行事

1936年に迎えた創立50周年は、迫り来る戦争の足音の中でのわずかな平安の一時であった。華やかな記念式典の一部として、かねて引退を表明していたシュネーダーの後を継いだ出村悌三郎の院長就任式が行なわれた。北越学館から東北学院に転じ、押川、ホーイ、シュ





出村院長就任式
President Demura installed



シュネーダーの最後の説教
「我は福音を恥とせず」
Last Sermon "I am not ashamed
of the Gospel" May 10, 1936

東小学院時報
第百二十二号
創立五十周年
紀念特輯



Special Issue of the 50th Anniversary



出村悌三郎
T. Demura



The Retired Schneders

ネーダーのもとに薫陶を受け、イエール、ハーバードなどで学んだ新院長は、名誉院長シュネーダーとともに、自給・自立の重荷を負うこととなる。

昭和三十年十月一日

東北學院時報

滞日五十年の思い出

目次

- 滞日五十年の思い出
- 基本金募集部報(二十二)
- 東北學院鏡後
- 事變應召者芳名
- 母校近事
- 母學部
- 高等學部
- 戦地同窓
- 戦地だより
- 浅沼喜
- 金須時
- 藤田
- 鈴木
- 日下
- 會
- 附

東北學院時報

滞日五十年の思い出

デ、ビ

〔眞説明〕

別項全国中絶途の際仙臺放送局内に於ける勤務同窓生を隔んでの歓迎會、右より前列シ、鈴木重書、後列、宇田道夫、人見達、中村興二、村上英介等の記者、宇田重書参照

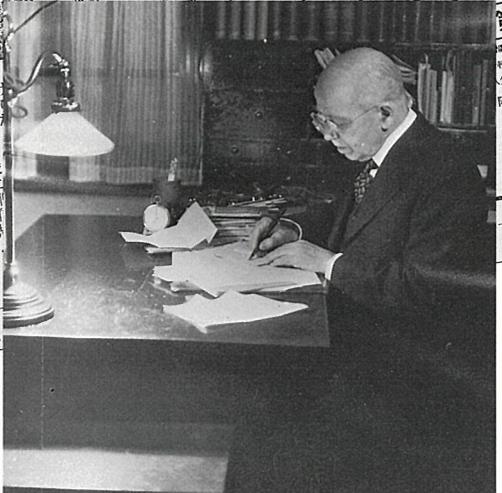
〔眞説明〕

本稿はシユネーダが歸朝に際し、り全国中絶にて放送せられた諸演



Schneder broadcasting "Fifty Years in Japan" (NHK, July 4, 1938)

御好意で誠に御座います。私は今日でも矢張り故國を愛して居ります。私の生れた國、私の祖先がドイツから移住して開拓に従事し發達し愛して居りました。私は青年時代に(多分十九才の時)アメリカの建國百年記念博覽會を見物しました。その時初めて日本人を見ました。その時初めて日本人を見ました。私は其の最近私の家内と一緒に秩父丸でカリフォルニア州の海岸を航海し、多分之が見納めになるかも知れないと思ひながら夕陽の美はしく照り映えてゐる故郷の山々を眺めた時に何となくはなした。物悲しく感じたので御座いました。けれども幼兒が双方の親に對して同時に同じやうに苦心を懐くことが出来るやうに、私は双



執務中のシュネーダ



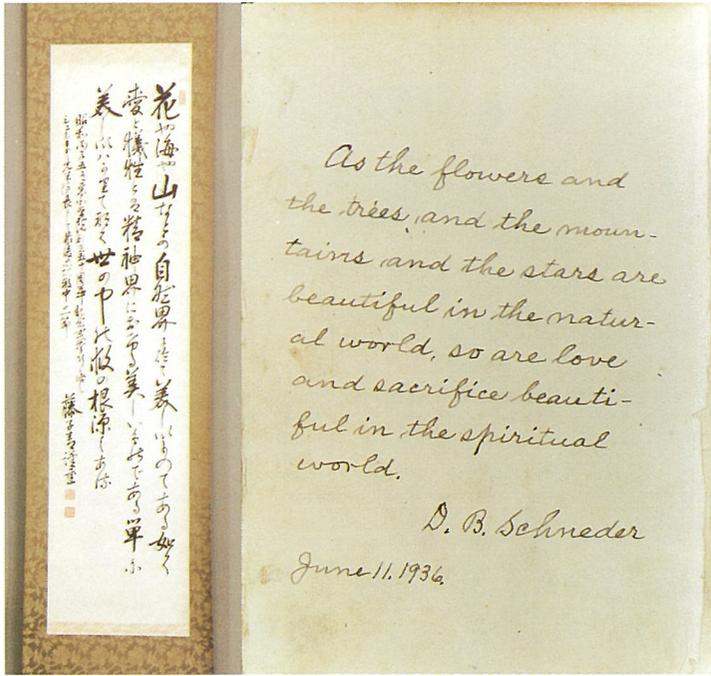
シュネーダ葬儀 The Funeral Oct 10, 1938



シュネーダ葬列 The Funeral Procession

「滞日五十年の思い出」

アメリカから帰った82歳の老シュネーダは、NHKを通じて五十年に及ぶ日本滞在の思い出を全国に放送した。写真は放送室でのシュネーダ。下は永眠したシュネーダの学院葬。葬列は東二番丁・北目町通り角を通り過ぎようとしている。



シュネーダー筆蹟「滞日五十年の思い出」から

Schneder Biography by Mensendiek



Selected Sermons



シュネーダー愛唱讃美歌

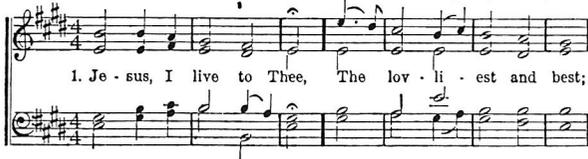
勲三等旭日中綬章
3rd Order
Imperial
Decoration



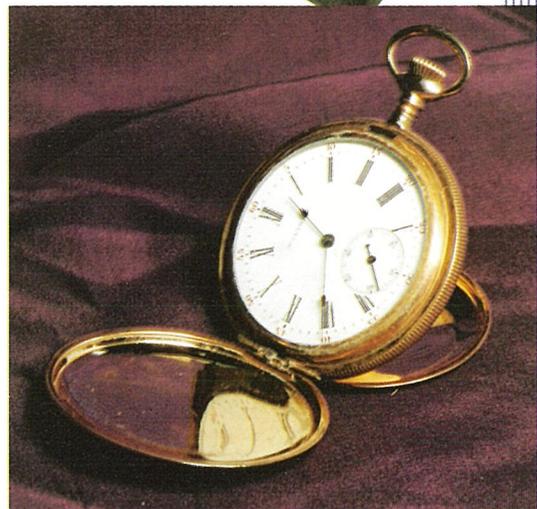
JESUS, I LIVE TO THEE.

"Mornington." S. M. (First Tune.)

REV. HENRY HARDAUGH, (1817-1867) 1850. Garret Colley Wellesley, Lord Mornington, (1733-1781) 1760.



Imperial Gift



シュネーダー愛用の金時計

思い出の品々

50年におよぶ教育界での貢献に対し数々の栄誉が寄せられたが、学院当局は創立85周年には『シュネーダー説教集』、90周年には和英両文の『シュネーダー伝』を出版して顕彰の意を表した。なお1968年の「明治百年」に際し、教育功労者として宮城県知事の表彰を受けた。

日一月三 報時院學北東 年二十和

神学部合同問題

昨七月廿一日の理事會で神学部と日本神学校との合併の可否を決定し、その結果として、神学部は日本神学校に合同することになった。これは、日本神学校に神学部の合同による利益が、神学部を維持するよりも多いと判断されたためである。また、神学部は、日本神学校の神学部に合同することによって、神学部の教育水準を向上させることができると見込まれた。さらに、神学部は、日本神学校の神学部に合同することによって、神学部の教育水準を向上させることができると見込まれた。さらに、神学部は、日本神学校の神学部に合同することによって、神学部の教育水準を向上させることができると見込まれた。

神学部合同問題

昨七月廿一日の理事會で神学部と日本神学校との合併の可否を決定し、その結果として、神学部は日本神学校に合同することになった。これは、日本神学校に神学部の合同による利益が、神学部を維持するよりも多いと判断されたためである。また、神学部は、日本神学校の神学部に合同することによって、神学部の教育水準を向上させることができると見込まれた。さらに、神学部は、日本神学校の神学部に合同することによって、神学部の教育水準を向上させることができると見込まれた。

神学部合同問題

昨七月廿一日の理事會で神学部と日本神学校との合併の可否を決定し、その結果として、神学部は日本神学校に合同することになった。これは、日本神学校に神学部の合同による利益が、神学部を維持するよりも多いと判断されたためである。また、神学部は、日本神学校の神学部に合同することによって、神学部の教育水準を向上させることができると見込まれた。さらに、神学部は、日本神学校の神学部に合同することによって、神学部の教育水準を向上させることができると見込まれた。

DR. SCHNEIDER'S REASONS FOR NOT DESIRING THE UNION OF THE TOHOKU GAKUIN SEMINARY WITH THE UNION SEMINARY IN TOKYO.

It is not wise that all future ministers of the Protestant Church should spend their six or more years of preparation amid the environments of very large cities.

It is much better to allow such seminaries (as North Japan College), as are strategically located outside of the great population centers, to remain.

Such regions often have their own particular characteristics, and Christian ministers trained in their environments, and understanding their characteristics, will have advantage over others.

The presence of theological schools in some central cities of each of these regions will go far to make such a city an influential Christian center for that region.

A wise distribution of such Christian centers is far better than the concentration of everything in one center.

The outlying schools might be small in numbers, but also a small number has its advantages as well as it disadvantages.

The removal of the seminary from its location in Sendai and the merging of it with the theological seminary in Tokyo would:

1. Weaken the whole evangelistic work in Tohoku.
2. Weaken the remaining part of the Tohoku Gakuin as a Christian institution of learning.
3. Weaken Sendai as a Christian center.
4. Weaken the interest of the Reformed Church in our whole educational work for young men in Sendai.

It would almost certainly remove Dr. Zaugg from our work in Sendai, and Dr. Zaugg is a necessary man to the future of North Japan College.

THE ADVANTAGES OF SUCH REMOVAL

A financial saving.

It would enhance interdenominational comity and good-will.

The prospect of going to a comparatively large school in Tokyo to study theology would make an appeal to our Middle School students that our own seminary does not.



神学部教授 The Seminary Faculty



The Faculty and Students 1937

推(日本神学校へ転学し昭和13年3月の卒業生) (5名)	
本 田 繁	多賀城市町ヶ谷二丁目1の18
村 田 武	東京都豊島区要町1の37の4
中 山 敏 美	東京都新宿区西新宿
✦山 田 三 郎	
✦宮 井 信	
推(日本神学校へ転学し昭和14年3月の卒業生) (5名)	
半 抗 滋	
李 斗 星	
李 殿 冕	
✦藤 嶋 範 彦	
✦山 口 宗 義	
推(日本神学校へ転学し昭和15年3月の卒業生) (5名)	
✦原 田 信 幸	
✦熊 坂 信 夫	
中 山 年 道	青森市長島二丁目10の3
青 藤 実	内閣府白木浜井場1
高 橋 長 四 郎	大宮市大坂町45の266
	大宮高校
推(日本神学校へ転学し昭和16年3月の卒業生) (4名)	
遠 藤 伝	野田市中野台180
井 関 守 司	岩手県二丁目3の2
水 野 和 夫	仙台市根岸町10の8
門 馬 義 久	鎌倉市国田1989
	朝日新聞社

日本神学校へ転学した学生の名簿

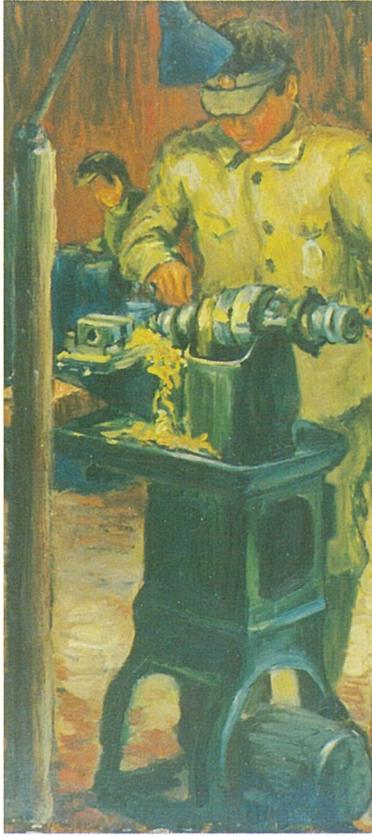
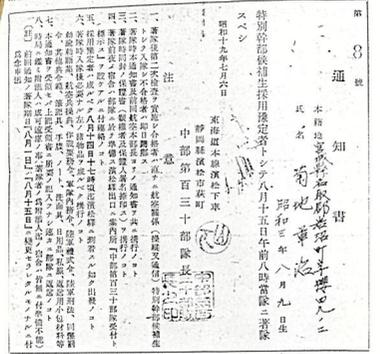
神学部の廃止

そもそも神学校として建てられた学院が、神学部の廃止を決断せざるをえなかったことのうち、その困苦の大きさが知られよう。英文は日本神学校との合併の得失を論ずるシュネーダーの文章。現在の基督教学科は戦後の神学部復活の試みである。

河北新報社提供 1941年12月23日



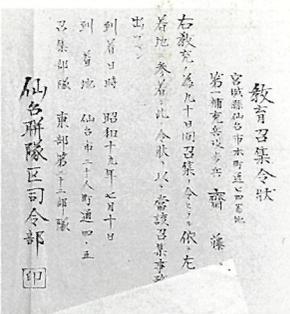
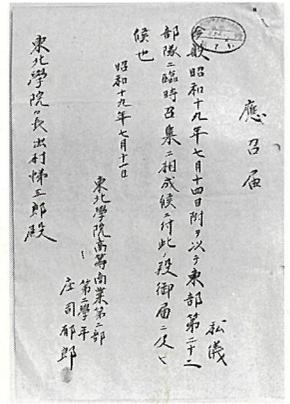
Draft Notices



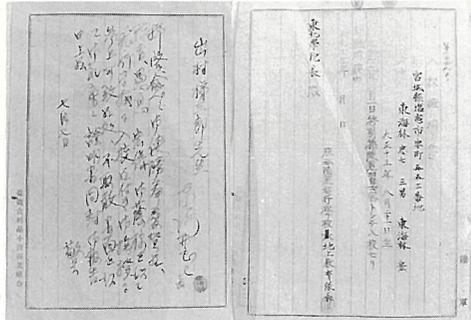
Oil Paints by a Student



College Students Mobilized for Construction



学徒出陣壮行会 Send-off for Drafted Friends



時に宣教師たちは監禁され、中にはスパイ容疑で投獄される者もあった。油絵は当時の商科学生熊谷栄吉が徴用先の苦竹造兵廠で、特に許可を得て描いたものである。中央写真は青葉山の護国神社参道造成のための勤勞奉仕(高等学部学生)。

Sendai in Flame



中学校焼跡 Middle School Ruins



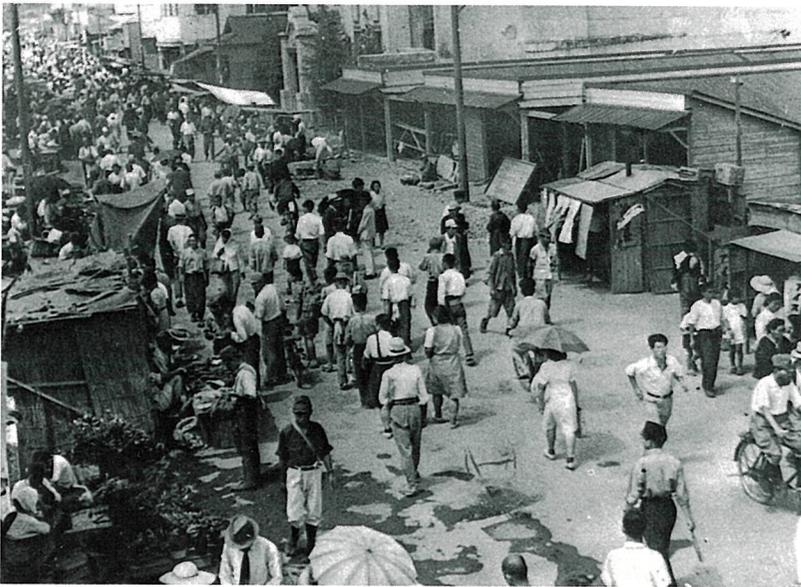
南町通東二番丁角現況



Ruins of the Former Seminary Building

仙台空襲

敗戦直前の空襲によって、校舎の多くは被災し、既に財政難から手放していた旧神学部校舎もまた、見るも無残な姿となった。油絵は前ページと同じ卒業生の手による。資材不足のため、障子紙を張ったベニヤ板に画かれている。



Black Market



左右とも河北新報社提供 Clearing the Debris

終戦後の混乱と復興

空襲を受け壊滅した東自郵電局の電信課は、飯島吉と
して、東北学院講堂の地下室（約八〇坪）におかれた非常
常置設備を拡張し、幸いにも去てきた東川の電信機器
を補充するなどして、終戦を過ぎた。

終戦直後の世相は、国民一人ひとりが、その日その日
の生活に苦しんでいた。電信課の従業員もその例にまら
ず、食糧は極度に不足し、住むに家もなく他者の世話をう
け、あるいは焼け残った住宅も壊れるという窮乏のド
ン底にあった。

日目の暮しに追われ、月に一度の公休を待ちきれず、
残り少ない休職をとるか欠勤までして、衣・食・住を求
め歩いた。このような次第が続いた職場の勤務状態は著
しく悪化していた。

当時の一日、一人前員負担電報通数は全国一という高
率を示し、遅り残された電報は郵便に頼るよりかはな
く、操行者が先で打電したものが、本人よりも遅れて
配達されるものが続出するなどのことは、日常のこと
であった。

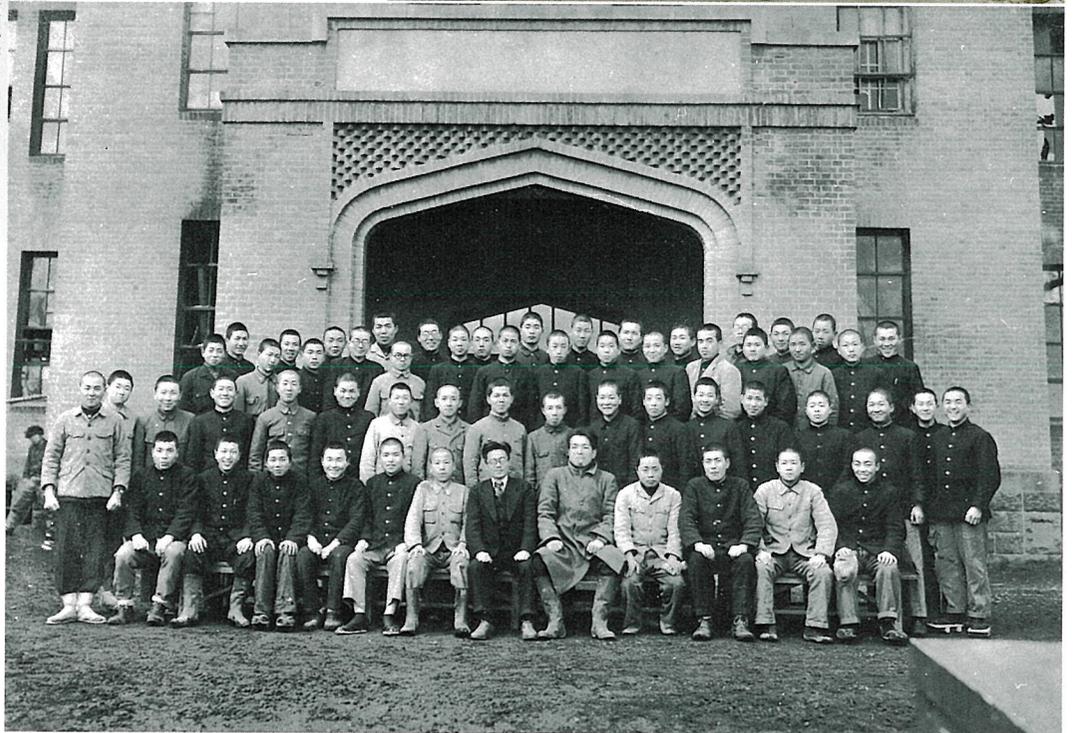
ある日、電報が郵便で遅延し二ヶ月もかかったという苦
情が新聞投函となり、ひくひかされたことがあった。こ
れに對し、電信課員が河北新報で、勤労を切切と訴え
答弁しているが、当時の電報の状況をよく表現したもの
といえよう。

「電報が遅れる」「風びゅうが多い」という非難は
責任者達において既に十分知りすぎているので、今更
この種で責いのがれどか、非難はしかならぬ回答はし
ないだらうから、自分達電報の現状を率直に申し上げ

—118—



荒浜海岸にて Faculty Excursion



昭和21年度卒業生

Middle School Students, 1947



戦後の苦難

日本の無条件降伏によって戦火は止んだものの、物心両面の困窮は計り知れなかった。上の2枚は当時の東一、東二番丁。中央は専門部教授たち、下は中学校卒業生。戦時中、電信局仮局舎に用いられた礼拝堂には、まだ標札がかかっている。



第V章

エホバを畏るゝは知識の本なり

復興時代

1948(昭和23)年～1958(昭和33)年

V エホバを畏るゝは知識の本なり

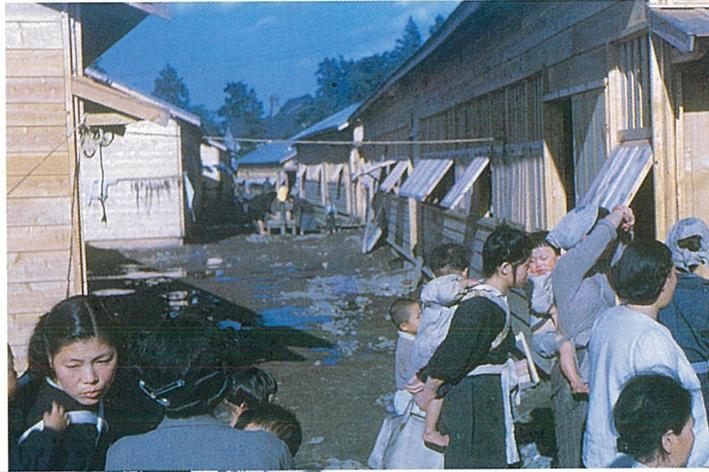
東北学院は戦災の焼跡と敗戦の虚脱から復興へと立ち上がった。アメリカ占領軍の進駐はキリスト教にとって解放とも受け止められた。アメリカの母教会はいちはやく援助の手を差し伸べ、復興資金を惜しみなく送ると共に、戦時中帰米していた宣教師たちに加えて、多数の若い有能な宣教師を派遣し、復興に協力させた。1953（昭和28）年に完成したシュネーダー記念図書館こそは、その目に見える表れであり、そこに掲げられた「エホバを畏るゝは知識の本なり」（津田郁筆）という聖句は、再建に向けての建学の精神のあらたな確認であった。

平和と民主主義を軸とする新しい教育理念にのっとり、学院もその制度を整え、新制中学校・高等学校を月浦利雄校長のもとに、文経学部の新制大学を小田忠夫学長のもとに設置し、発展の礎を据えることになる。新たに設置された学校法人東北学院理事長には鈴木義男が就任した。1946（昭和21）年11月、第4代院長となった出村剛は、小学校から大学までを含む大東北学院建設の夢を68万坪の八木山校地入手にかけたが、結局は実現を見なかった。出村剛は1949（昭和24）年9月、病没し、同年末には出村悌三郎も逝去、第5代院長に就任したA、アンケニーも間もなく永眠、戦争の傷痕の浅くないことを思わせた。以後、学院復興と発展の重責を担うのは小田忠夫である。1951（昭和26）年5月、第6代院長に就任してから、1982（昭和57）年3月の逝去まで、30年の長きにわたって在任し、見るべき成果を収めた。

制度の整備、すぐれた教職員の獲得と並んで、校舎や校地、諸施設の補修、拡張、新築が着々とすすめられ、大学・中・高ともに研究・教育の必要を次第に満たすようになった。戦争中は困難を極めた宗教活動も、毎日の礼拝、教職員修養会、キリスト教青年会、公開クリスマスなど、目覚ましい展開を見せ、仙台市内外の教会に有為の人材を多くもたらすことになる。大学には各研究所が置かれ、文経学会の研究成果は『論集』として公にされて現在に至る。

1955（昭和30）年、復興10年を画して創立70年記念行事が盛んに開かれ、その一端として刊行された1,000ページにも上る『東北学院七十年史』（花輪庄三郎編著）は広く名著のほまれを得た。50周年に計画されながら実現を見なかった企ての、見事な実りであった。

学生・生徒の課外活動も隆盛の一途をたどり、自治活動、文化面、体育面と目覚ましい活躍は、東北学院の名を全国にとどろかせた。ちなみに創立70年当時の在学学生数は、大学・中高、さらに昼は働き夜学ぶ二部を含めて約5,000名、卒業生の総数は14,000名を越えている。同窓会活動も活発となり、30箇所の方支部、13職場のTG会を数えるに至った。戦争中は刊行できなかった「学院時報」も復刊され、同窓生や父兄と学校当局を結ぶ心の絆の役割を担うことになる。こうして、復興の歩みは慎重かつ堅実に進められるのである。



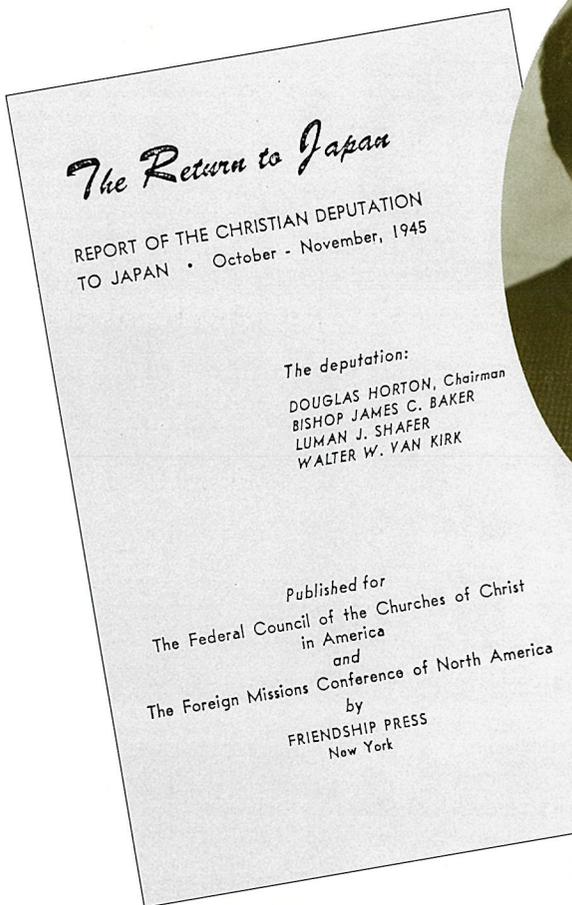
Barracks for the Repatriates



Sendai THEN and NOW

昔と今 (1950・1985)

組写真はそれぞれ同じ位置から撮影した東一番丁、片平丁、および田町を示す。上は川内追廻の引揚者住宅（現在の市立博物館付近）。市の中心部では戦災の焼跡に幅数十メートルの幹線道路が縦横に作られながら、降れば泥濘、晴れば砂塵を巻き上げる有様であった。



アメリカ教会視察団報告書(1945年10月, 11月)



Mrs. A. Ankeney

March 3-
 rest hands,
 How thrilled we were to get your precious letter,
 the friends arrived to meet us! it was such
 a joy, so full of loving kindness that it
 made us feel more at home as this changed
 trip. You see, in a way we feel we had come
 and in another way, as if we were walking in
 a part of heaven or night vision, from which we must
 only wake up. It may be some time before we get
 used to the situation and can face it with equi-
 vinity.
 So far our language is all right, and now we have
 only one more stretch, the trip to Seoul. I hate your
 down with us tonight & helps us through all the
 real tape of getting established. No more just going
 about as you please!
 Don't worry, Cooper, about the mysterious acid.
 I don't think I'm allergic to it to
 reaction, so did not take any more.
 It's been helped anyway - not
 On the second night out, she
 was, poured all the stuff on the
 my face. Dandruff in beard
 from the dining room & galley - You
 and it! After several days at sea we
 the captain to stop the boat & let us
 in talking us of the letters & cards that
 writing to Mrs. Bivstad. Somehow
 it a farewell message of to have
 ed so sorry they do say though! We
 will from here to the Philippines.
 Congratulate Heide on his
 & the boat.

Mrs. Ankeney's Letter to Her Sister



1950

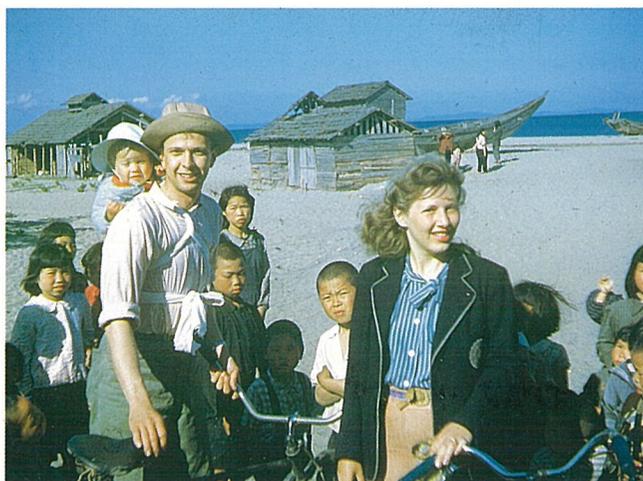
合計	(002,027,111)	(002,027,111)	(002,027,111)	昭和年
合計	110,000,000	110,000,000	110,000,000	110,000,000
経常費	100,000,000	100,000,000	100,000,000	100,000,000
臨時費	10,000,000	10,000,000	10,000,000	10,000,000
合計	110,000,000	110,000,000	110,000,000	110,000,000

新しい協力関係

戦争終結の秋にはアメリカの諸教会は日本に代表を送り、復興への協力を約した。エヴァンジェリカル教会と合同していたドイツ改革派も、全力を挙げて仙台の二つの学校の復興に力を貸すことになった。手紙は1947年3月、日本に帰任したミセス・アンケニーが妹に



Missionaries Pre-war Returnees with New Arrivals 1949

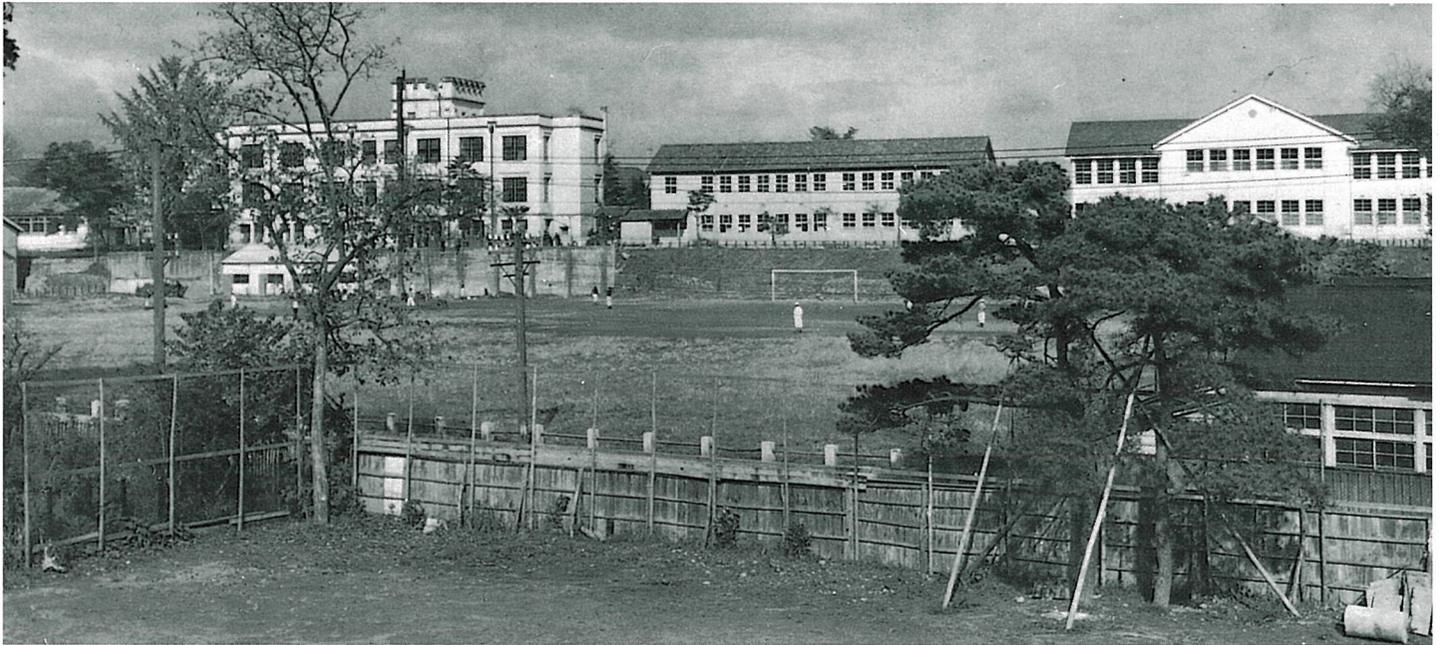


セヶ浜伝道に奮闘するウイリアムズ夫妻
The Williams' in Action



救援物資を配るラマーズ宣教師
Lammers distributing Relief

宛てたもので、変わり果てた日本の様子を伝える。戦前からの宣教師に加えて、J-3と呼ばれた若く有能な働き人たちが多数派遣され、一時期を画した。その多くは日本に永住を決意し、今なお全国各地で教育と伝道の第一線に立っている。

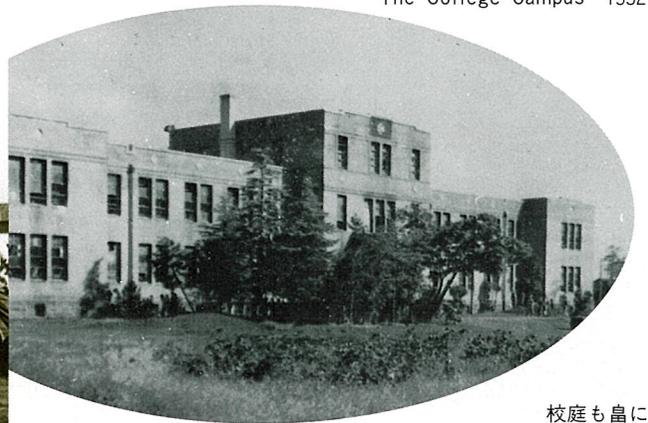


土樋から見た大学

The College Campus 1952



テニス・コートに復元する中・高生(1948)



校庭も島に
The Middle School Campus 1947



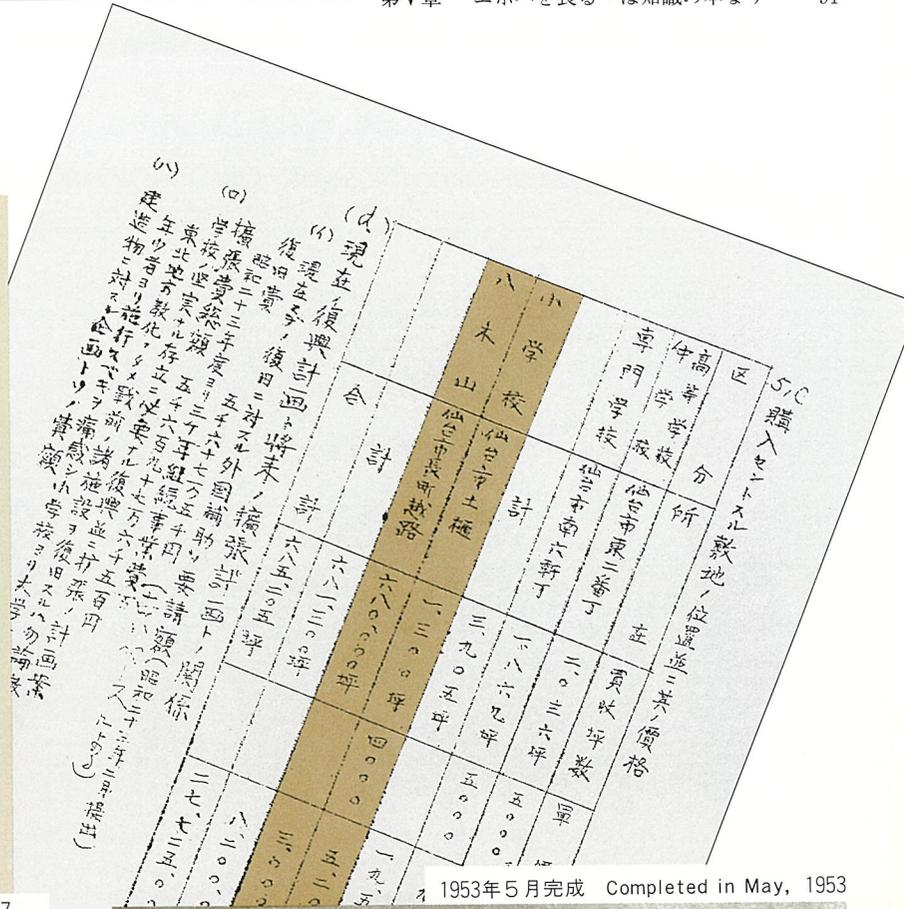
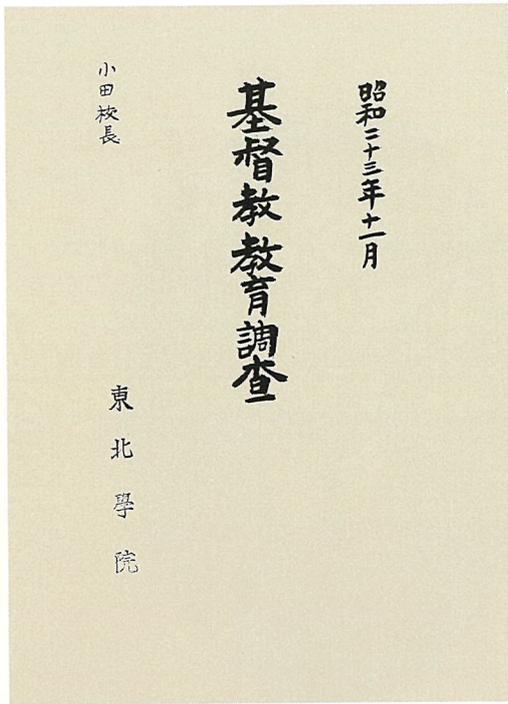
東九番丁寄宿舍 The New College Dormitory 1949



修復された中・高礼拝堂。説教者は木村清松。
The High School Chapel Restored

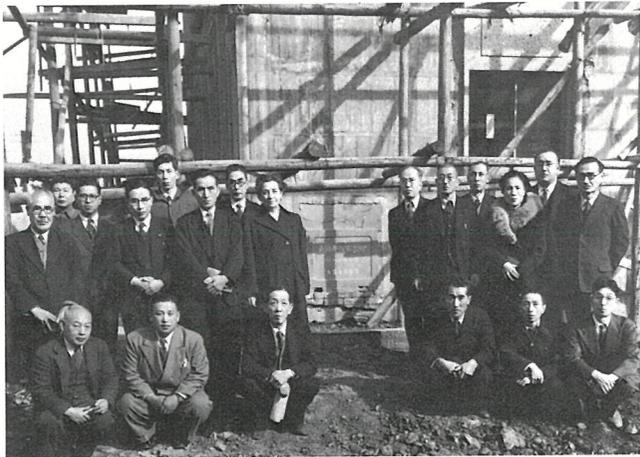
進む復興

インフレと資材不足の中で、被災した建物の修復と新築が進められ、東九番丁には寄宿舍が建てられ、困難な学生生活の救いとなった。シュネーダーが戦前募金してアメリカに寄託してあった13,000ドルも送金されて、シュネーダー記念図書館として実った。

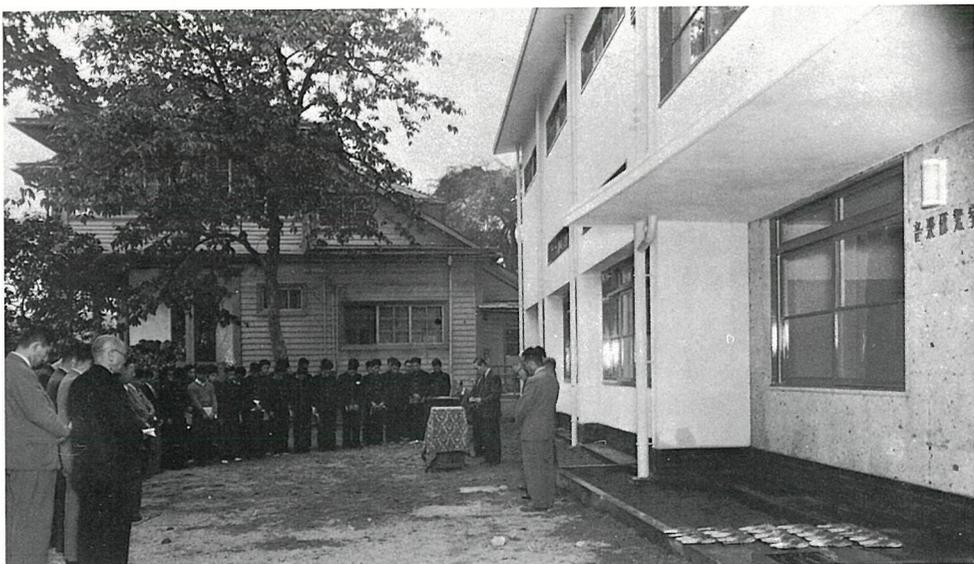


The Future Plan for TG 1947

1953年5月完成 Completed in May, 1953



The Schneder Memorial Library under Construction



音楽館献堂式 Dedication of Music Building 1956



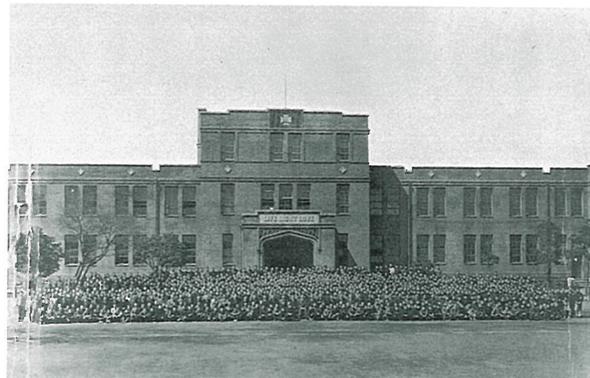
新制中・高教職員 The High School Faculty 1949



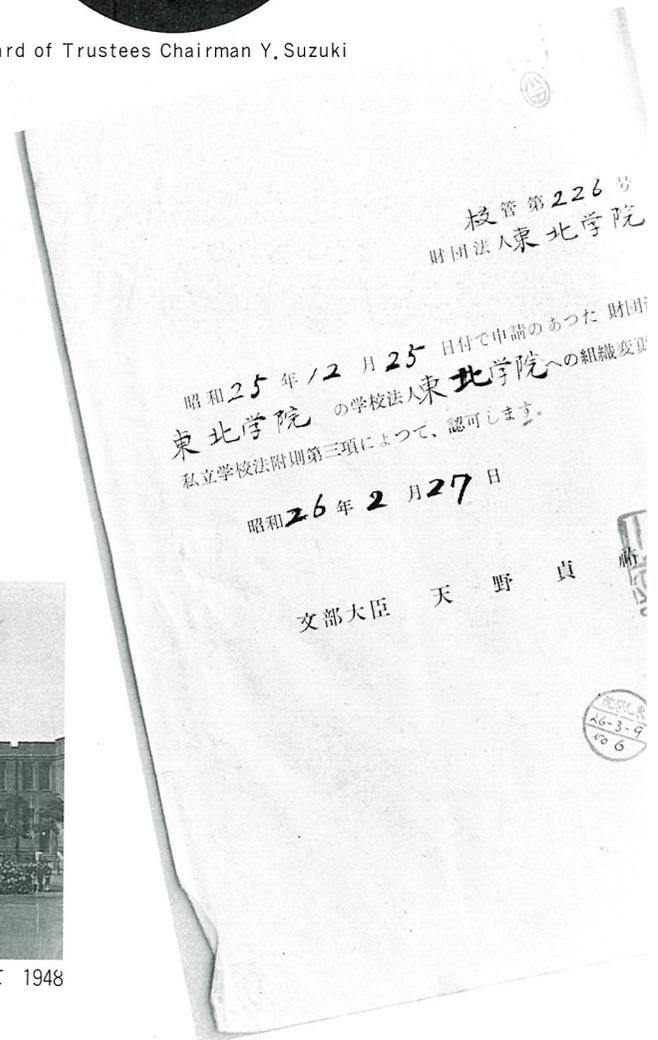
Board of Trustees Chairman Y. Suzuki



新制中学卒業生 1949



アメリカ教会代表エルマンを迎えて 1948



校管第226号
財団法人東北学院

昭和25年12月25日付で申請のあつた財団法人
東北学院の学校法人東北学院への組織変更
私立学校法附則第三項によつて、認可します。

昭和26年2月27日

文部大臣 天野 貞

26-3-9
106

新学制による出発

戦後の教育改革によって、東北学院は新制中学、高校、大学と制度を整え、学校法人としての認可も得、初代理事長には鈴木義男が就任した。鈴木理事長は中学部の卒業生で、東北大学法学教授を経て国会議員となり、法務大臣として活躍した。



The College Faculty 1948



専門学校応援団 The College Cheer Leaders 1947



現大学67年館前にて

The College Faculty and Students 1952

上は外国伝道局代表エルマンを迎えて専門学校教職員(1948年)。下は同氏を再度迎えての大学教職員、学生一同(1952年)。後の建物はアメリカ教会の援助によって、戦後最初に建てられた木造の9、10、11、12番教室。



The Ankeney's 若きアンケニー夫妻



小田院長就任式 1951

T. Oda Installed as President

東北学院時報 第164號

六十五周年記念號

我らは進みゆく
—キリスト教の真性を持つて—
アルフレッド・アンケニー



東北学院の歴史を語る
アンケニー院長

東北学院時報

発行所 東北学院
編集長 小田忠夫
編集委員 小田忠夫 小田忠夫 小田忠夫
発行 小田忠夫
印刷 小田忠夫



(1) 昭和26年9月20日

東北学院時報 第167號

新院長紹介の辞
鈴木義明
（東北学院新院長就任式演説）
本校は、創立六十五周年を迎え、新院長として鈴木義明氏が就任されました。鈴木氏は、東北学院に長く勤務し、その間、学務、教務、学生生活各方面に多大の貢献をなされ、その熱心と誠実が、学院の発展に大きく寄与されました。鈴木氏の就任は、学院の前途に明るい希望を抱かせるものであります。鈴木氏は、新院長として、学院の発展に努め、教育の質の向上を図られたいと願っています。

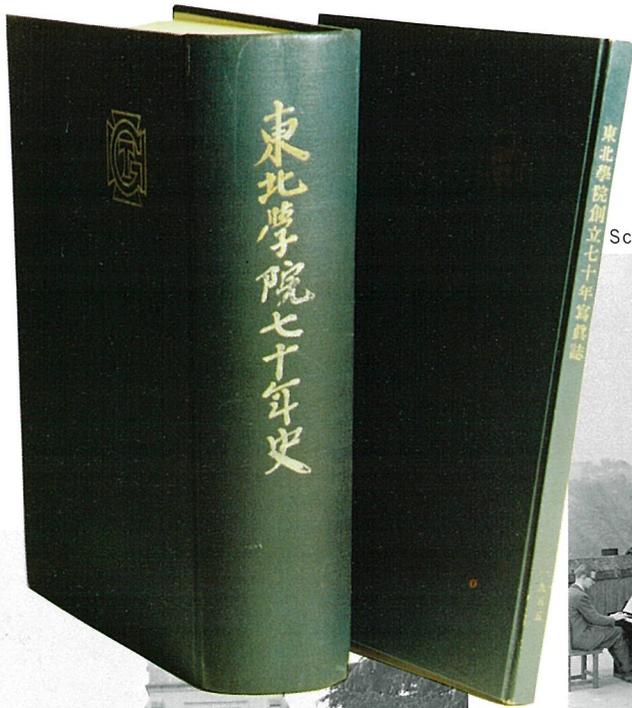


（写真説明）小田新院長（院長就任式）

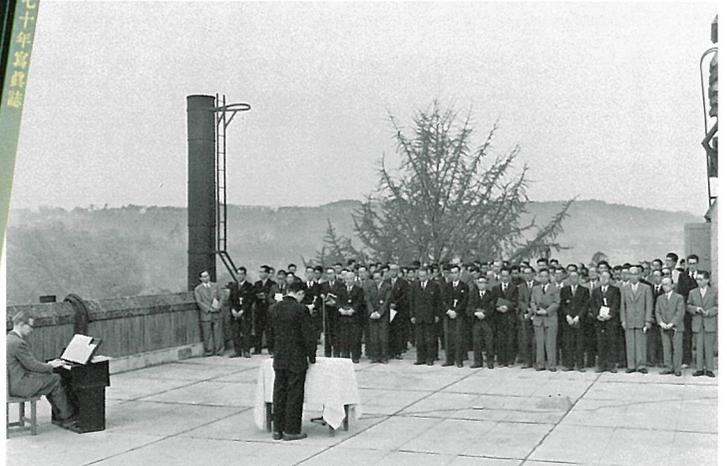
就任の御挨拶
小田 忠夫
本校は、創立六十五周年を迎え、新院長として鈴木義明氏が就任されました。鈴木氏は、東北学院に長く勤務し、その間、学務、教務、学生生活各方面に多大の貢献をなされ、その熱心と誠実が、学院の発展に大きく寄与されました。鈴木氏の就任は、学院の前途に明るい希望を抱かせるものであります。鈴木氏は、新院長として、学院の発展に努め、教育の質の向上を図られたいと願っています。



た小田忠夫が東北学院のその後の発展の担い手となる。



School History



早天祈禱会 Early Morning Prayer Meeting



海をこえた母夜叉

十年ぶり再び礼拝の鐘
東北学院大卒業生から

今、米国の東部地方に在る東北学院の卒業生が、母国に贈った鐘の音は、平和への讃歌である。

サンケイ新聞社提供
1955年4月26日付

贈られた礼拝堂の鐘

東北学院創立七十年を記念して、卒業生が母国に贈った鐘の音は、平和への讃歌である。この鐘は、卒業生が母国に贈った鐘の音は、平和への讃歌である。



Chapel Bell Donated by the Alumni in the U.S.



教室での祝会 Dinner in the Lecture Rooms

苦難を切り抜け発展
東北学院創立70周年迎う

東北学院創立七十年を記念して、卒業生が母国に贈った鐘の音は、平和への讃歌である。

毎日新聞社提供

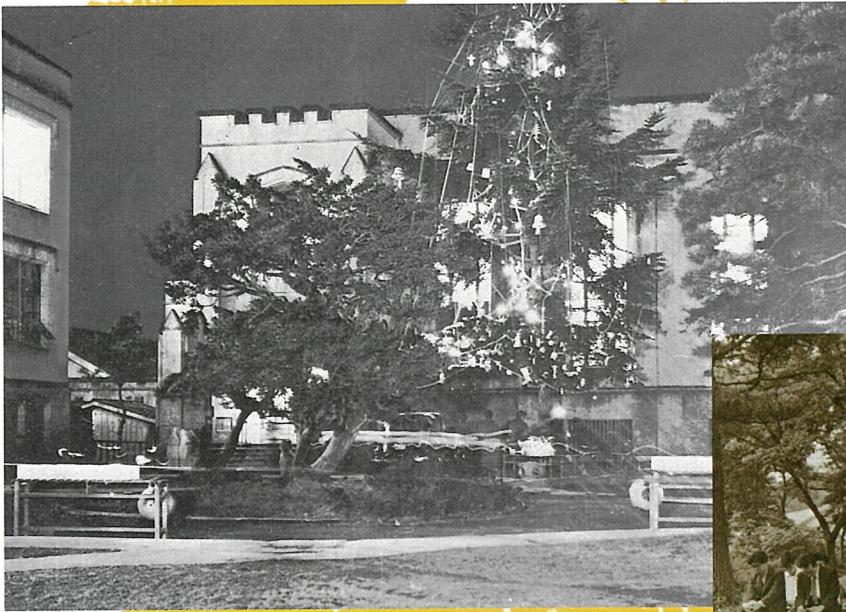
東北学院創立七十年を記念して、卒業生が母国に贈った鐘の音は、平和への讃歌である。

創立70年記念

制度、施設もようやく整った1955年、創立70年の記念行事が意義深く挙行された。記念式典、早天祈禱会、祝会など、今から見ればまことにささやかだったが、戦後10年の復興に感謝が捧げられた。在米同窓から贈られた鐘の音は、また平和への讃歌であった。

東北学院

同窓会クリスマス



Illuminated Trees 1954



Faculty Retreat



歓迎

2日(日)
后6時~8時
学院礼拝堂
義明牧師
クラブ



College Summer Retreat 1955



High School Summer Retreat 1959

盛んな宗教活動

戦後の基督教「ブーム」もあって、学内でも各種の宗教活動が活発に展開された。右上は中山平での教職員修養会。下は大学、高校の基督教青年会の夏期学校。学校や寄宿舎での礼拝も規則正しく守られた。このころから同窓会クリスマスは、市民に公開された。



第35回全日本サッカー選手権大会 1955



全国高・専校全日本優勝 1947



準硬式野球部第10回国体優勝 1955



青山定期戦復活 1949



サッカー仙台一中定期戦再開 1946



Middle School Field Day 1948

体育活動の隆盛

戦争中はおよそ縁遠かったスポーツも、平和の到来と共に一気に盛んになり、東北学院の名を全国に知らしめた。特に野球やサッカーなどは全国優勝の栄誉に輝き、関係者を喜ばせた。右下は中・高の運動会。



第Ⅵ章

地のきわみまでも

発展時代

1959(昭和34)年以後

VI 地のきわみまでも

着実な復興は、やがて輝かしい発展時代を招来することになる。すなわち1962（昭和37）年、東北学院はキリスト教精神に立つ優れた技術者を世に送るため、多賀城市に工学部（機械工学科、電気工学科、応用物理学科、のちに土木工学科）を新設した。また1964（昭和39）年には、文経学部を文学部（英文学科、基督教学科、史学科、二部英文学科）と経済学部（経済学科、商学科、二部経済学科）に分離し、翌1965（昭和40）年には法学部（法律学科）を新設した。こうして東北学院大学は、文・経・法・工学部を擁する東北唯一の私立総合大学となった。さらに前後して、各学部に大学院研究科を設置し、研究者養成体制を整備した。その間東北学院は、地域社会の期待と要望に応じて、高等学校榴ヶ岡校舎を1959（昭和34）年に、また幼稚園を1962（昭和37）年に新設した。

しかし、いかなる発展も必ずしも抜けるような青空の下、平坦な道を歩むものではない。東北学院も昭和40年代前半の世界的趨勢とも言える「大学紛争」の激しい嵐にさらされたのである。極めて政治性を帯びたこの紛争に対し、大学教職員は一致して収拾のための努力を重ねた。ここで経験した大きな「問いかけ」を内省的に受けとめ、大学革新のための数々の努力が今なお続けられている。

施設・設備の拡大と充実は、この時代の特記すべき事柄である。校舎、教室、研究室、礼拝堂、図書館、記念館、寄宿舎、特に泉総合運動場などの整備は、まさに目をみはらせるものがある。これらの恵まれた研究条件と教育環境から生まれた数々の人材と業績は、「地のきわみまでも」及んでいる。また10指に余る研究所はそれぞれ大きな成果を世に問い、地方・中央文化の向上のために顕著な指導性を発揮している。

1973（昭和48）年以来、国際化時代にふさわしい教育を目指して、海外研修・国際交流が大学・高校ともに行われている。たとえばアーサイナス大学への夏期留学、さらにのちには日本研究講座開設によるアメリカ人留学生の受け入れなどがそれである。また国内における青山学院大学と北海学園大学との共に30回を超える総合定期戦は、スポーツの交歓のみならず、両校との友情の発展に大きく寄与して来た。

このような発展時代の指導理念を担い、第5代理事長・第6代院長・初代学長として重責を果たして来た小田忠夫は、1982（昭和57）年3月逝去した。戦後長く中学校・高等学校長として、また第4代理事長として活躍した月浦利雄（1973年没）とともに、その功績は特記されるべきである。後事はすべて生前の小田を支えて来た2人の後継者に託された。かくて第6代理事長には児玉省三が、第7代院長・第2代学長には情野鉄雄が就任した。

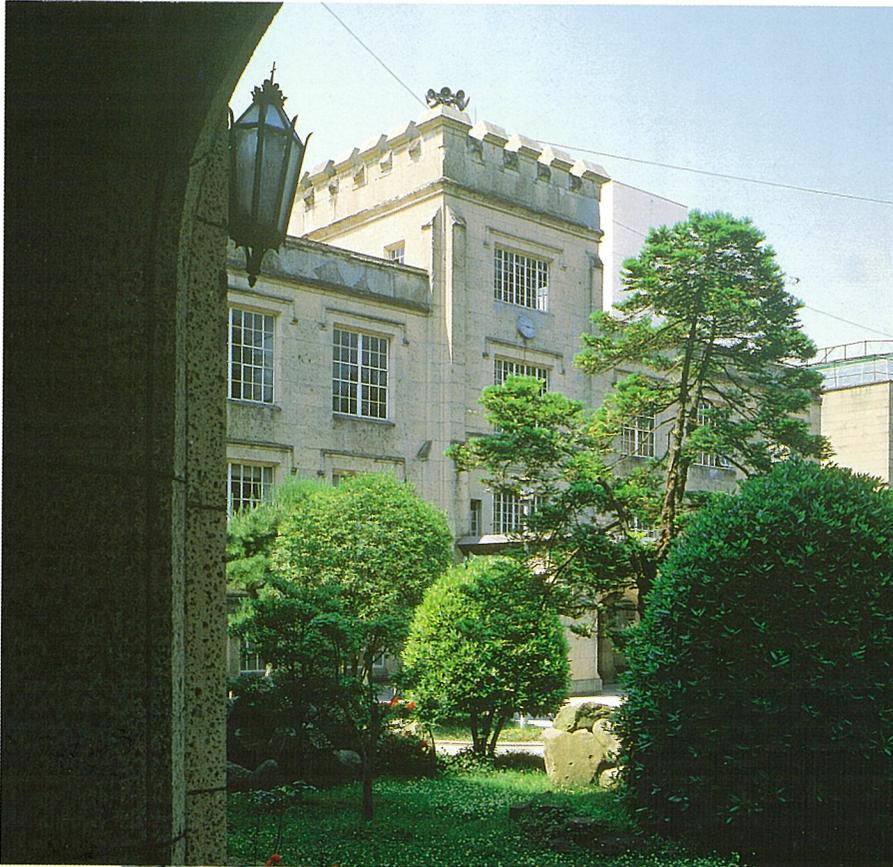
東北学院は、創立100周年を契機として建学の精神を継承し、キリスト教的人材の育成を堅く決意している。そのためにも大学は、教養部の泉移転と教養学部の新設を計画し、東北学院第2世紀への歴史を力強く踏み出そうとしている。



The New Chapel of the School of Engineering

工学部新礼拝堂

講義室、実験室に続き、残っていた体育館と図書館も完成し、最後に礼拝堂が1983年秋に竣工した。小高い丘の上に建つ白亜の礼拝堂は、多賀城キャンパスの象徴として遙か遠くからも望見できる。



Old Main



土樋キャンパス全景

戦後40年、1万坪の土樋校地には高層建築の校舎が建ち並び、かつての緑の芝生はほとんどコンクリートに変わってキャンパスの様相は一変した。しかも建学の精神の目に見える象徴である大学礼拝は多数の学生・教職員の出席を得て毎日定刻に守られている。1985年



Daily Chapel, President Seino as Leader

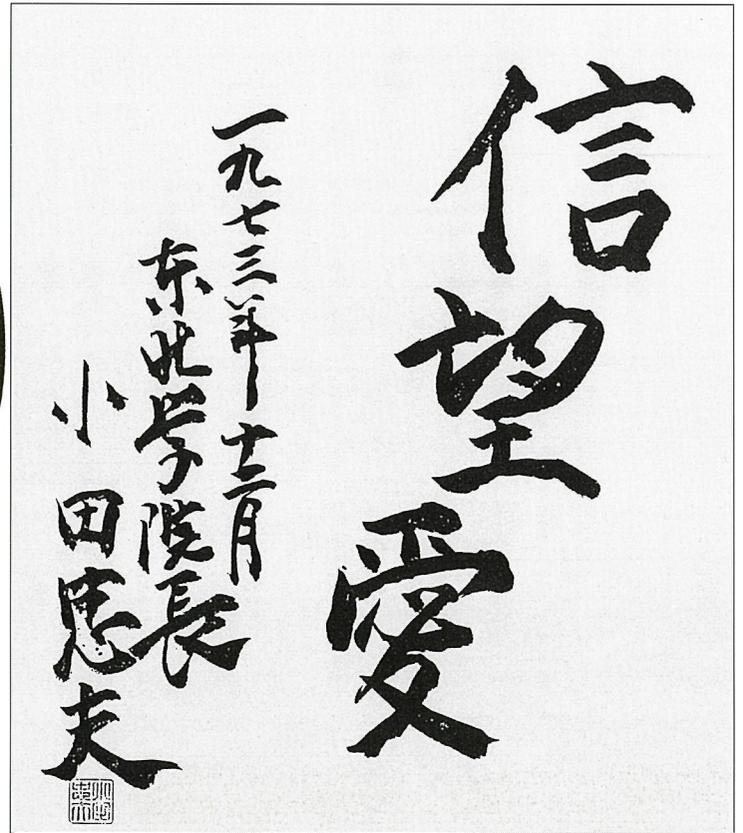


Tsuchitoi Campus

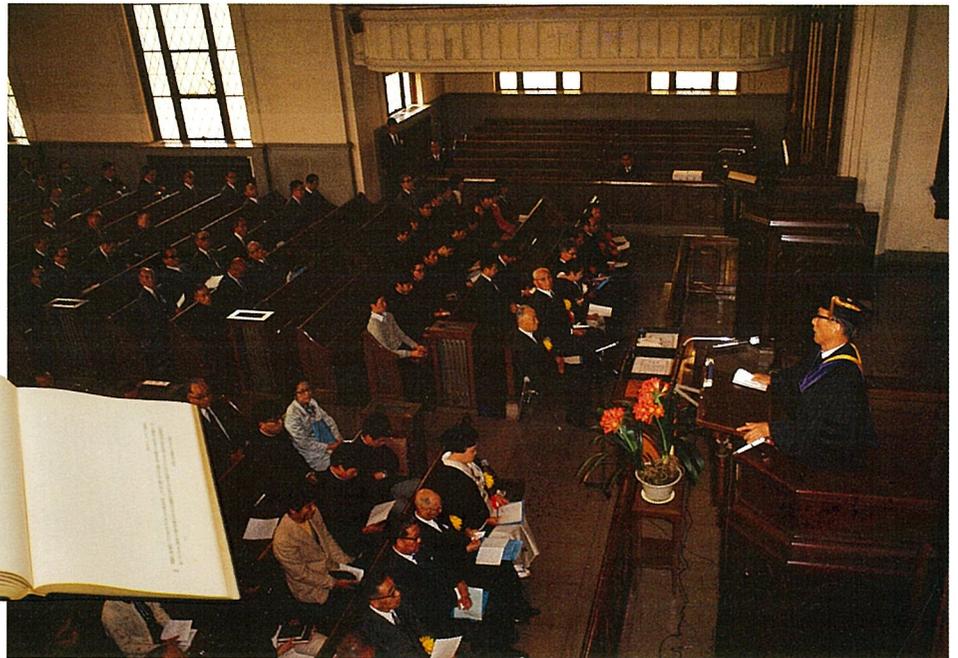
初夏には、東北一を誇る新図書館が落成した。写真は右から新図書館、90周年記念館、アセンブリ・ホール、81年館、67年館、64年館、大学院(旧図書館)、本館、78年館、66年館、研究棟など。中央下は仙台広瀬河畔教会(旧学院教会)のシュネーダー記念礼拝堂。



入学式に臨む小田学長



小田忠夫著作
Oda's Academic Works



創立85周年の式辞を述べる小田院長

85th Anniversary 1971

小田忠夫の院長在任時代

東北学院のこのような発展に指導的役割を果たしたのは、30年にわたって院長職にあった小田忠夫である。中学部の出身で、京城大学教授として財政学を専攻した学者であり、誠実なキリスト者だった小田院長は、建学の精神の堅持に尽力した。



Autographing Students' Certificates



学位記を授与する小田学長 Conferring M.A. Certificate



Memorial Service at the Christian Cemetery in Kitayama 1971

右上は卒業生に求められるままに証書にサインをする小田学長。下は創立85周年の北山墓前礼拝、小林淳男文学部長、佐藤昌彦法学部長、永井健三工学部長、中村重夫経済学部長らの姿も見える。右端はロスアンゼルスから駆けつけた86歳の同窓生田嶋堅固牧師。



U. S. Alumni Branch 1956



小田院長院葬 Oda's Funeral Service

小田院長は学外でも広く活躍した。特にキリスト教学校教育同盟の財務理事として長年貢献した。左上は同盟総会で報告をする小田理事。右上は同窓会北米支部にて。下は1962年ころの学校法人理事会。



President Seino's Installation 1982



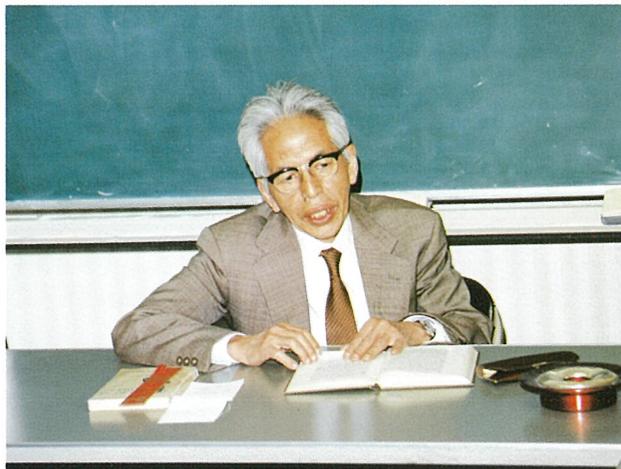
Board of Trustees 1985

情野院長の就任

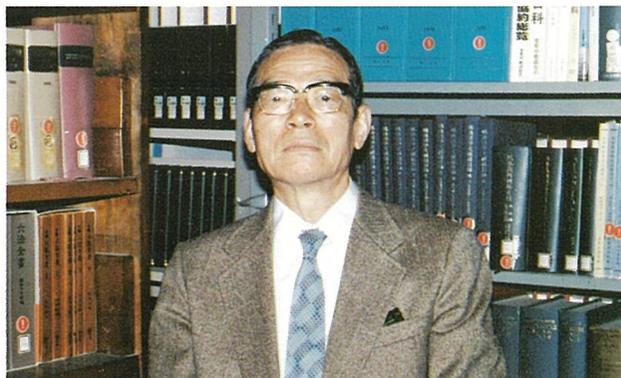
小田院長逝去の後、そのもとで共に副学長として学院運営に参画して来た情野鉄雄が院長・学長に、児玉省三が理事長に就任し、第2世紀への展望を担うことになった。上は1982年5月の院長就任式、下は現理事会（1985年6月撮影）。



Dean Sato, School of Economics

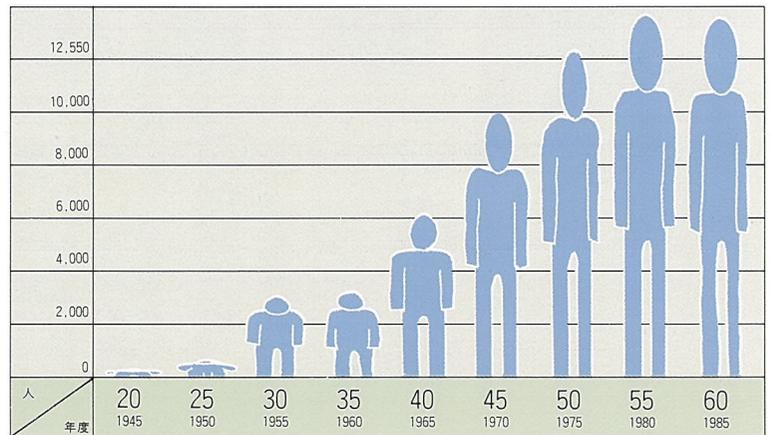


Dean Hasegawa, School of Arts and Literature



Dean Saito, School of Law

在学生数の推移

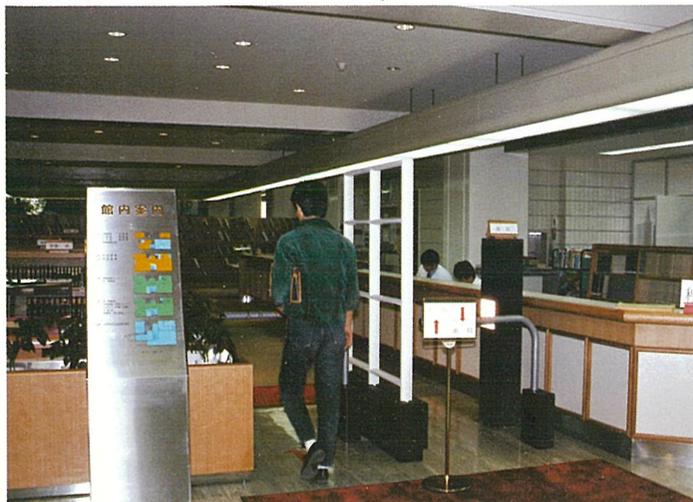


Student Enrollment

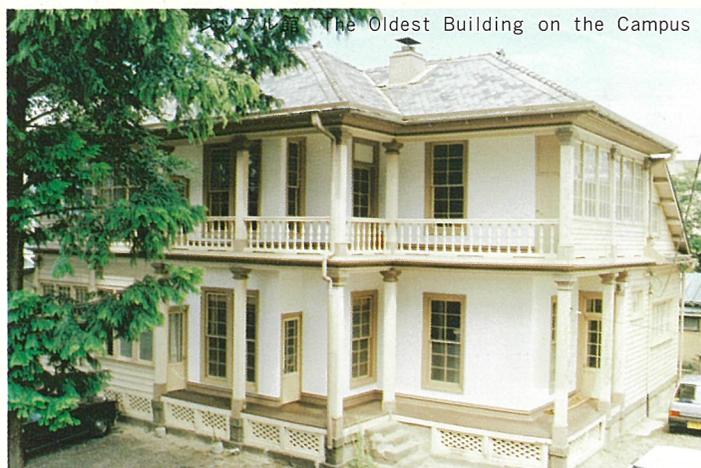
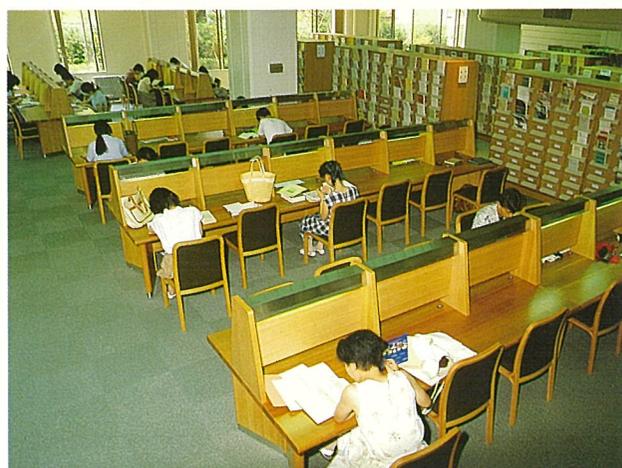
文・経・法学部の現況

東北学院は上の写真の示すように大きな組織であるが、かつてとは異なって今では数的に大学が中心となった。学科数は計12を数え、在学生総数は13,000名に達する。写真は長谷川松治文学部長、佐藤謙三経済学部長、齋藤秀夫法学部長。

新図書館内部 Inside the New Library



大学院(旧図書館) The Graduate School



夜学風景 The Night School



90周年記念館ラウンジ The Student Union Lounge

学内点描

現在、シップル館と呼ばれる洋式建築は、元来は組合教会のデフォレスト宣教師がほぼ100年近く前に建てたもので、多くの変遷を経ながら戦火をも免れ、戦後東北学院の所有に帰し、シップル宣教師が定年帰国まで居住した。建築史上でも貴重な現存建物とされる。

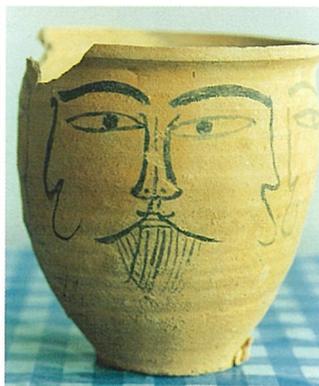
英語英文学研究所



東北文化研究所



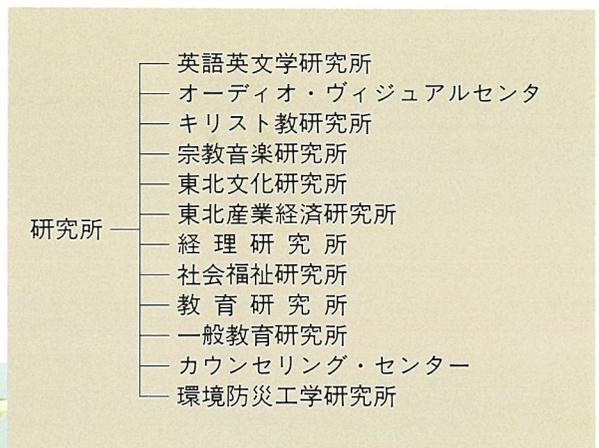
仙台藩境澤文書(江戸時代 Edo Period)



四面人面墨描土器 8th/9th Century



キリスト教研究所



研究所の活動

大学内には表示のようにいくつか研究所が置かれて、それぞれの研究とその成果の公表に当たっている。英研は内外の学術雑誌のコレクションで知られ、東北文化研は古文書や土器の収集に優れている。キリ研は宗教改革文獻と東北伝道史に力をいれ、宗教音楽研は全国

カウンセリングセンター

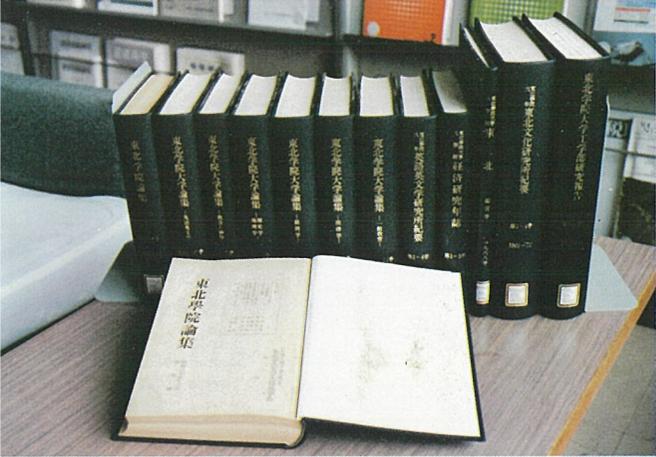


社会福祉研究所講演会



向老大学

文経法学会論集・研究所紀要



東北産業経済研究所



宗教音楽研究所

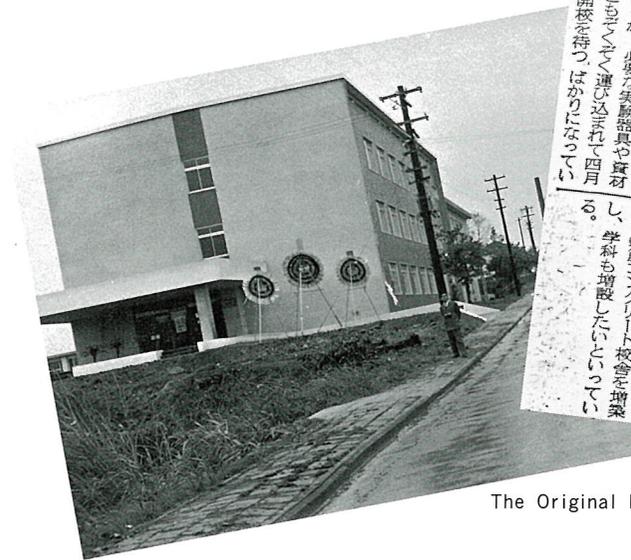
有数のパイプ・オルガンを生かして広く貢献している。「開かれた大学」を志向する本学は、公開講座の向老大学など(中央右)、多くの市民に学びの機会を提供している。キリスト教文化講座は故小田院長を記念する特別な基金によって運営される。



Laying the Corner Stone



河北新報社提供



The Original Buildings



工学部の新設と発展

1962年、当時の日本の急激な技術革新の波に乗って、新たに取得した3万坪の多賀城校地に工学部が開設され、永井学部長のもとにめざましい発展を見せた。左上は開学式に臨む鈴木理事長と小田学長、右上は建設予定地。アメリカ進駐軍の兵舎が散見され、ごく一部

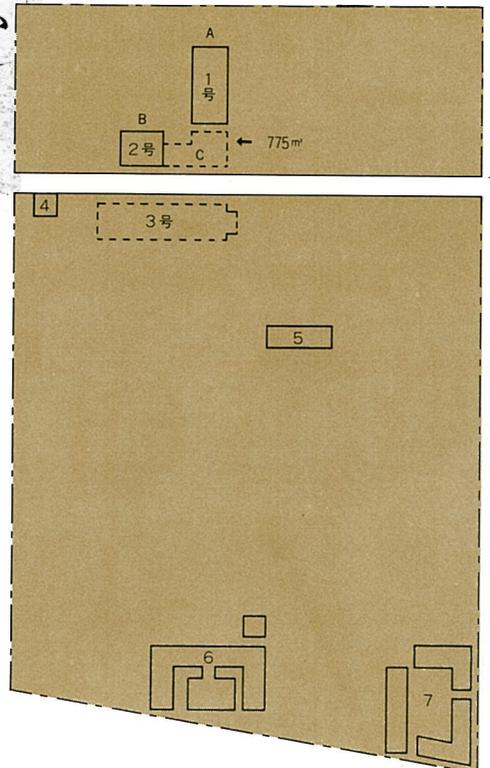
急ピッチに建築進む
東北学院大の新設工学部校舎

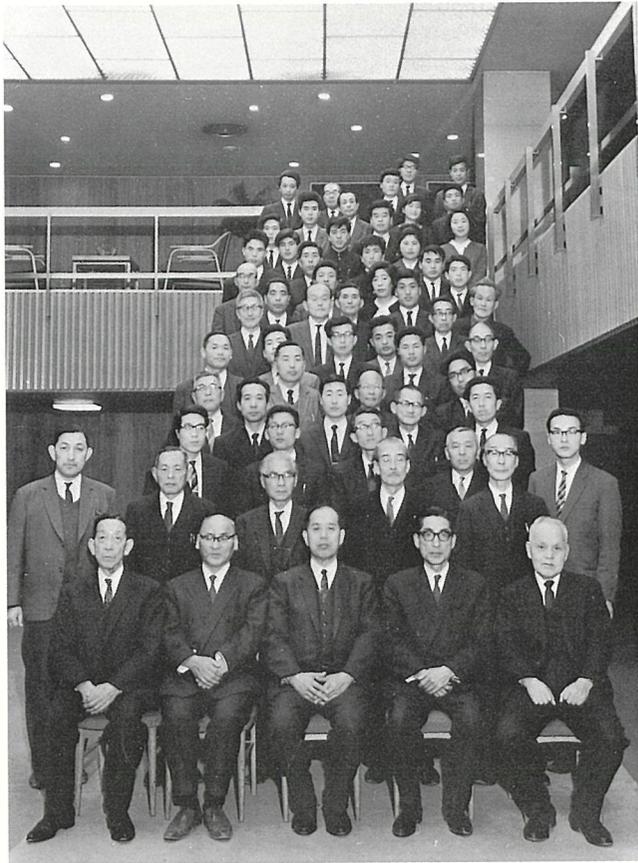
このほど工学部の増設を認可された東北学院大学では、いまだ跡十余万平方メートルに新校舎を建築中だが、すでに基礎工事を終り、八月末完成をめぐって急ピッチに進んでいる。

【写真】完成を急ぐ東北学院大工学部建設地

新校舎は地上三階、地下一階、延べ四千平方メートルの鉄筋コンクリート建て、完成後は一階が事務室、実験室、二階が教授研究室と教室、三階が教室と図書室にあつた。それまは、近隣の旧アメリカン・スクールを改修し、授業を行なうが、必要な実験器具や資料などもそろえて運び込まれて四月の開校を待つばかりになってい

工学部創設当時の平面図





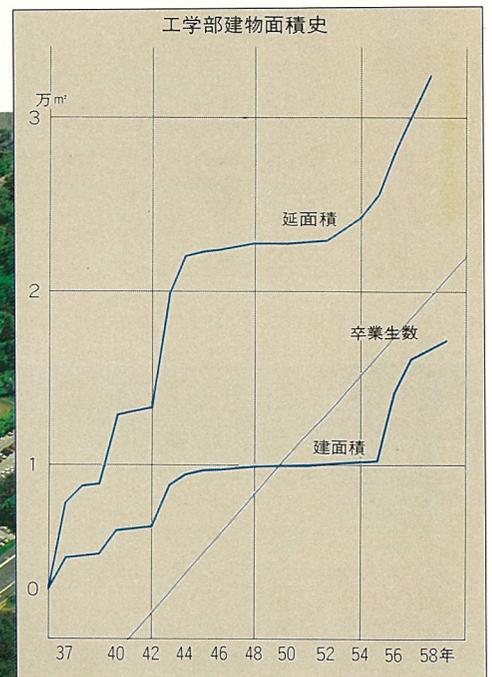
The Faculty and Staff 1962



"Be Creative and Original" by Dean Nagai



Tagajo Campus 1985



は現存する。左上は新設当時の教職員、右上は永井学部長による「創意工夫」の碑。左下は今日の多賀城キャンパス鳥観図。現在は6号館までの研究・講義棟と図書館、体育館、礼拝堂が完成し、2,500名の学生がここに学ぶ。

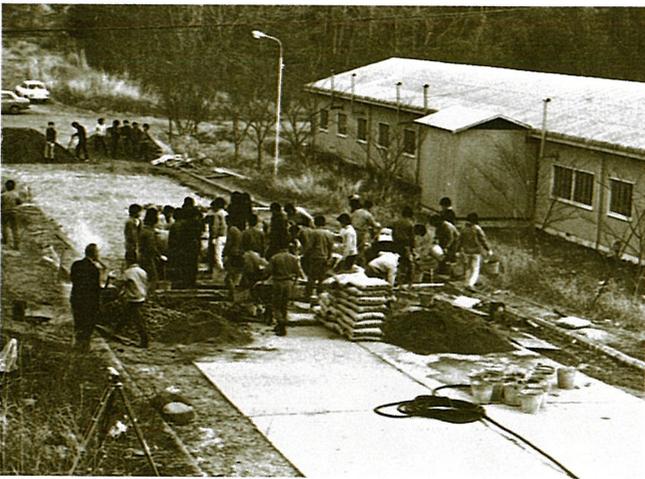
Former Dean Nagai



College Choir singing "The Messiah"



Dr. Fukui, Nobel Prize Winner as Lecturer



Civil Engineering Students in Practicum



新図書館

The New Library

右上は新築の礼拝堂でのクリスマスにおける「メサイア」合唱。左中はノーベル賞受賞の福井謙一博士の講演会。左下は土木工学科四年生が卒業記念事業として学内道路舗装にあたっている様子、学科創設以来の伝統である。左上は永井健三前学部長。

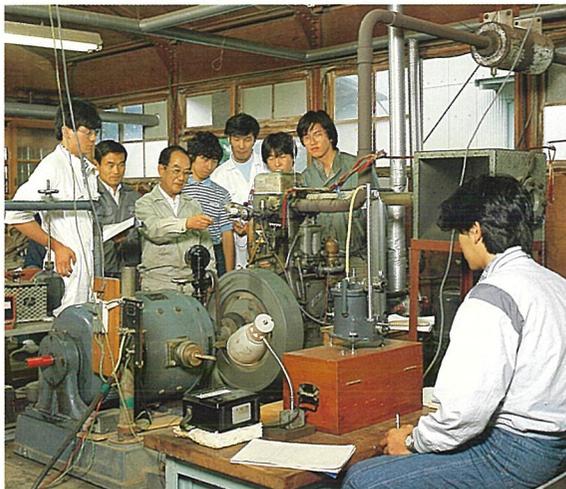
佐藤利三郎学部長 Dean Sato



電気工学科
Electrical Engineering



応用物理学科
Applied Physics



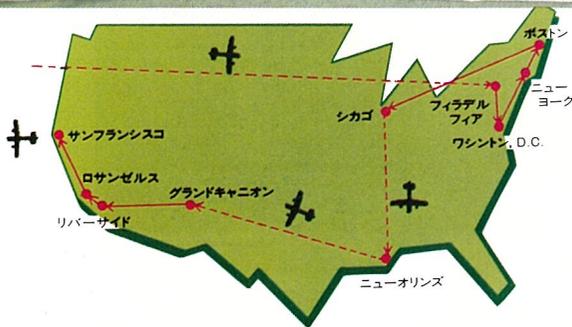
機械工学科
Mechanical Engineering



土木工学科
Civil Engineering



アーサイナス大学正門



Classroom 1984



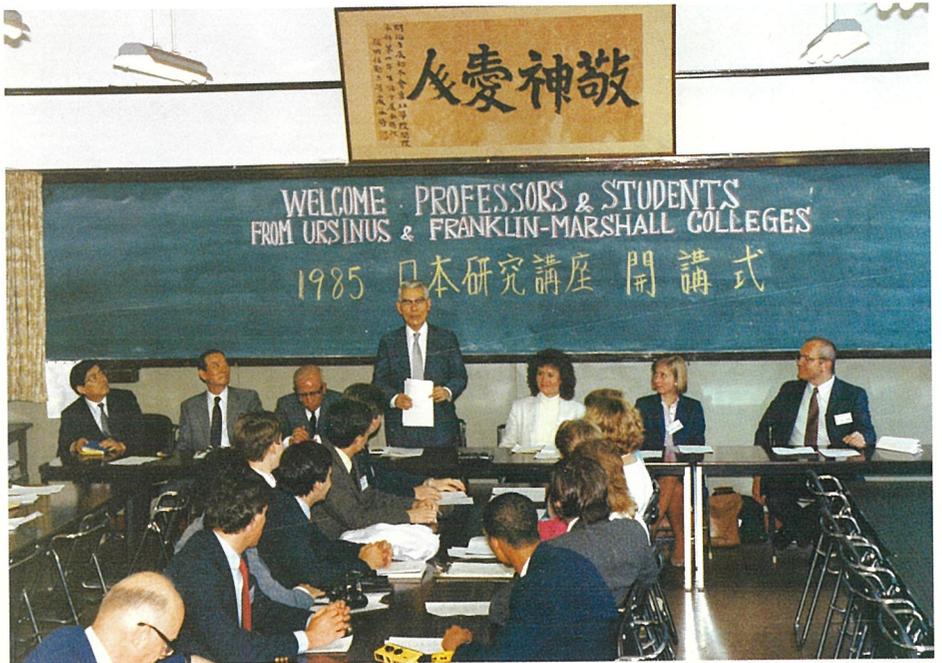
Awarding the Certificates

修了証授与式 1982

活発な国際交流

東北学院は創立以来すでに国際的に開かれた学校であったが、1973年からアーサイナス大学と提携して、毎年数十名の夏期留学生を送ることとなった。さらに、1982年からはアーサイナス大学およびフランクリン・アンド・マーシャル大学も東北学院の提供する日本研

Working with Clay 1982



1985



Signing the "Agreement" 1982



日本研究講座

1984



Home Stay in the U.S. 1982

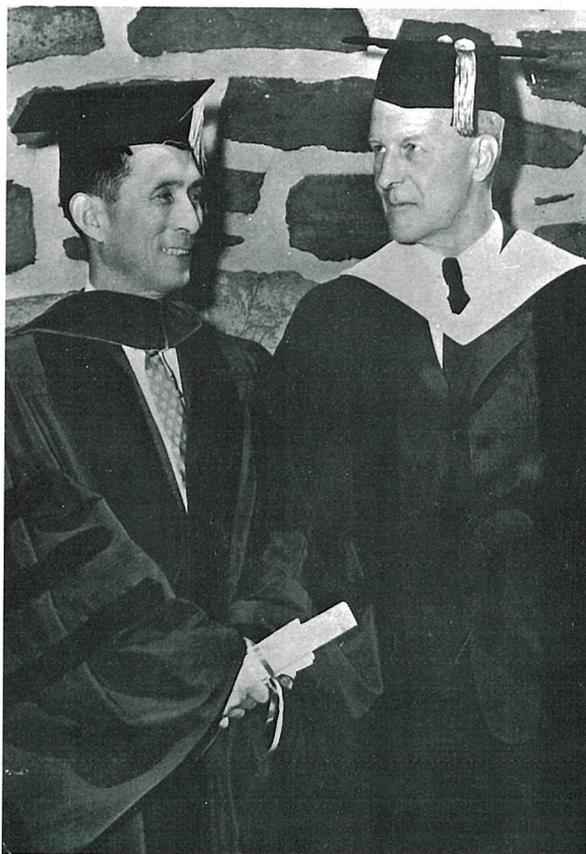


Home Stay in Japan 1981

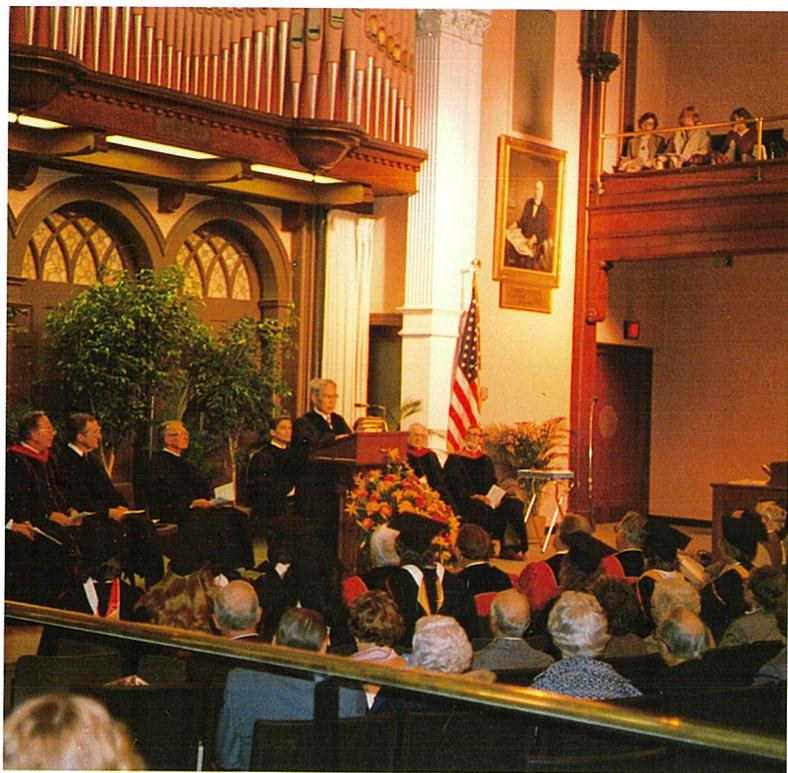
究講座に学生を派遣するようになり、ここに本格的な相互交流が実現した。留学生は家庭にホーム・ステイして、その国の生活と文化の理解を深めることになっている。中央は情野学長とアーサイナス大リクター学長による交流調印式。



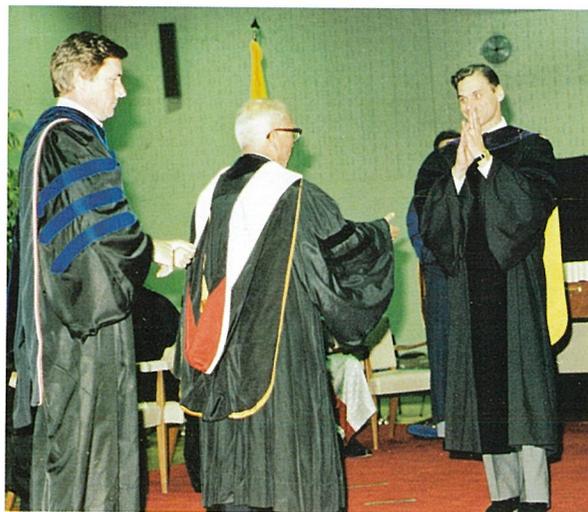
Board Chairman Sugiyama honored by the West Germany Government 1964



President Oda receiving Hood from Ursinus College 1956



President Seino addressing, Ursinus College 1983



Chairman Kodama congratulated 1985

人物往来

左上は西ドイツ政府より勲章を受ける杉山元治郎元理事長(神学部出身、農村伝道ののち、国会議員に選ばれ、衆議院副議長をつとめた)。右上はアーサイナス大学から名誉学位をうける小田学長。下は同大学よりの名誉学位授与式に臨む情野学長と児玉理事長。



Edmund Blunden



U. S. Ambassador Reishauer 1962



Dear Old Teacher invited 1961



H.H.Wilke 1985

R.H.Bainton 1981

た新
が学
じ会
主
に副
親
スな人
人務三
最五ス
ゴ

平素から国際色豊かな本学キャンパスは、去る5月21日からの数日間、こと異色の訪問者を迎え、忘れられない時となった。

アメリカ福音ルーテル教会の協賛のもとに来日中の、イェール大学名誉教授ロイランド・H・ペイトン博士と、同行のハーパー・プロウカリン牧師夫妻の来学、礼拝奨励、特別講義がそれである。

ペイトン教授は、手紙に日本語訳を含む数十冊の著書によって、広く知られるキリスト教史の専門家であるが、八十七歳の高

世界的教会史家 ペイトン博士来学



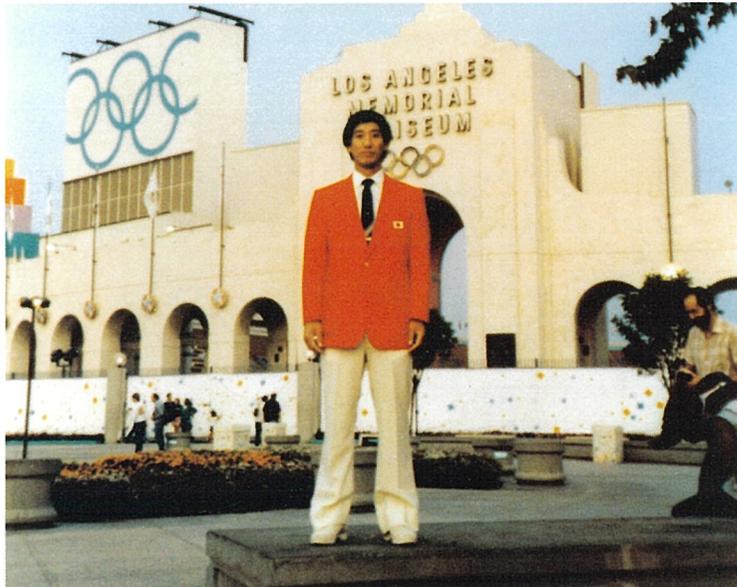
く全米を巡回して青年伝道や教育に従事している新しい型の牧師、ペイトン博士は22日の礼拝堂、翌日の工学部礼拝で奨励ホゲット・ナフを取り出しながら、「飛行機乗り込みの際の検査で、もしものナイフがもう一インチ長ければ、ハイジャックの危険ありとして取り上げられるところだ」と笑われたのち、現代の技術文明が内蔵する危険が、一本の紙切りナイフと比べるものにならないほど大きいことを述べ、今は平和をへの熱望と決り、必要な時はなさい、とキリスト教の歴史から実例を引きつつ、聴衆に強く訴えられた。生涯を絶対平和主義者として通し、一時は非米活動委員会からもマークされた博士ならではのスピーチであった。

一方、プロウカリン牧師は、七色の布地を掲げて見せ、ノアの箱舟の物語を引きながら、聖書の約束を信頼し、聖書を持って毎日を生きていくことの大切さを説かれた。巧みな話術とマツチシジ

左上は英国の詩人E.ブランデンの来学、右上はライシャワー米国大使の訪問、中は同窓生一同の募金による旧師ミス・ゲルハートの日本招待。左下は社会福祉の世界的指導者ウィルキー博士の来訪。右下はイェール大学ペイトン教授の講演。



Karate World Champion 1973



Handball in L.A.Olympic Games 1984



体育会各部の活躍

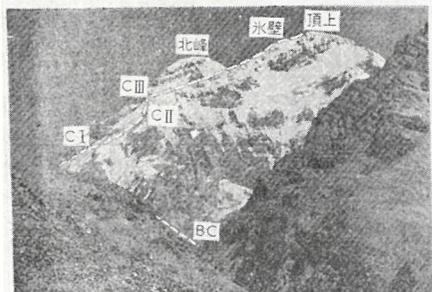
学窓を出てからも体育関係で目覚ましい活躍を続ける卒業生も少なくない。右上は1980年空手世界選手権大会で優勝の森俊博。左上は少林寺全国大会最優秀で日本武道賞獲得の二階堂哲・大槻善則組。左下はロス・オリンピックにハンドボール選手として出場の佐々木信男。

ここが頂上だ！コー・イ・バンダコール

山頂に立つ登山者
北峰の山頂に
旗を掲げ、
頂上を告げる



北峰の山頂に旗を掲げ、頂上を告げる。この旗は、登山者たちが頂上を到達したことを示す。旗には「北峰の山頂に旗を掲げ、頂上を告げる」という文字が記されている。



北峰の山頂に旗を掲げ、頂上を告げる。この旗は、登山者たちが頂上を到達したことを示す。旗には「北峰の山頂に旗を掲げ、頂上を告げる」という文字が記されている。

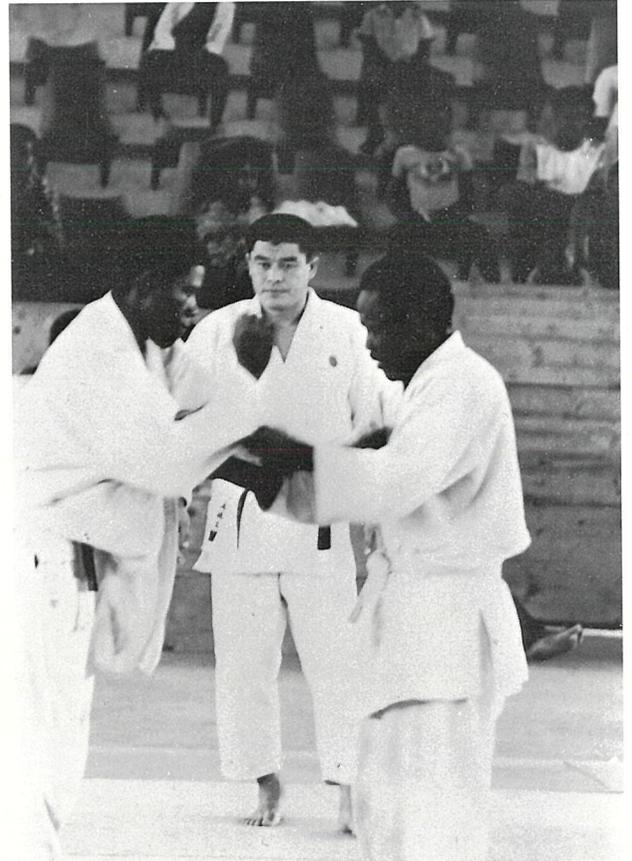
無線を通してバンザイ叫ぶ

無線を通してバンザイ叫ぶ。登山者たちは無線を使って、頂上を到達したことを告げる。無線は、登山者たちにとって重要な道具である。無線を通して、登山者たちは互いに励ましあうことができる。無線を通して、登山者たちは頂上を到達したことを告げる。無線を通して、登山者たちは頂上を到達したことを告げる。

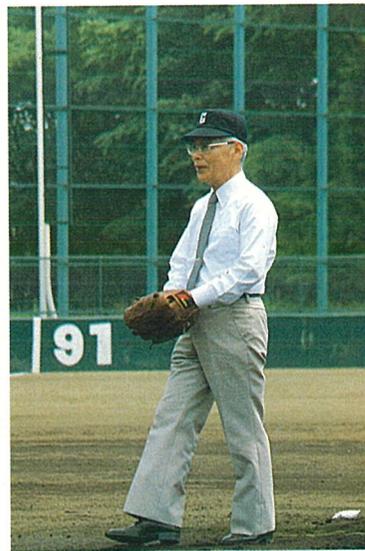
無線を通してバンザイ叫ぶ。登山者たちは無線を使って、頂上を到達したことを告げる。無線は、登山者たちにとって重要な道具である。無線を通して、登山者たちは互いに励ましあうことができる。無線を通して、登山者たちは頂上を到達したことを告げる。無線を通して、登山者たちは頂上を到達したことを告げる。

無線を通してバンザイ叫ぶ。登山者たちは無線を使って、頂上を到達したことを告げる。無線は、登山者たちにとって重要な道具である。無線を通して、登山者たちは互いに励ましあうことができる。無線を通して、登山者たちは頂上を到達したことを告げる。無線を通して、登山者たちは頂上を到達したことを告げる。

河北新報社提供



Judo Mission, Gabon 1980



右上は国際交流基金の派遣により、カボン共和国柔道チームを指導する高橋富士男。左上は創立80周年記念のヒマラヤ登山隊、日本パーティとして初登頂に成功した。左下は泉グランデにおける青山定期戦で始球式に臨む大木金次郎青山学院長と情野東北学院長。

昭和46年10月26日（火曜日）

青森 盛岡 秋田

14日

説明会、デモで中止

学院大の納付金値上げ 粉砕叫び場内騒然



納付金値上げ粉砕、を叫び三沢理事につめよる学生



告 示 昭和46年10月26日
東北学院大学 学長
二月十二日からの期末試験は一部学生が学内を不法占拠して、その試験場の都合がかなわぬので、雨石六六学長が実施する

東北学院大が、大規模な納付金値上げをめぐって、説明会がデモで中止された。学生は、説明会を粉砕するべく、場内を騒がせ、説明会を中止させた。学生は、説明会を粉砕するべく、場内を騒がせ、説明会を中止させた。学生は、説明会を粉砕するべく、場内を騒がせ、説明会を中止させた。



昭和46年10月23日（土曜日）

私立の大学・高校の入学料、授業料 続々値上げ計画

東北学院大は51-32%

私立の大学・高校の入学料、授業料が続々と値上げされる計画が、東北学院大でも明らかになった。東北学院大は、入学料が51%、授業料が32%値上げされる。これは、私立大学全体の平均値よりも高い水準である。東北学院大は、この値上げ計画をめぐって、学生と教職員の間で大きな対立が生じている。

東北学院時報 特集 学費値上げ反対運動について

特報 (その二) 押川会館封鎖解除のため 遂に警察力出動

東北学院時報 今こそ学院精神の発揮を 大学は不法の場ではない

不法学生

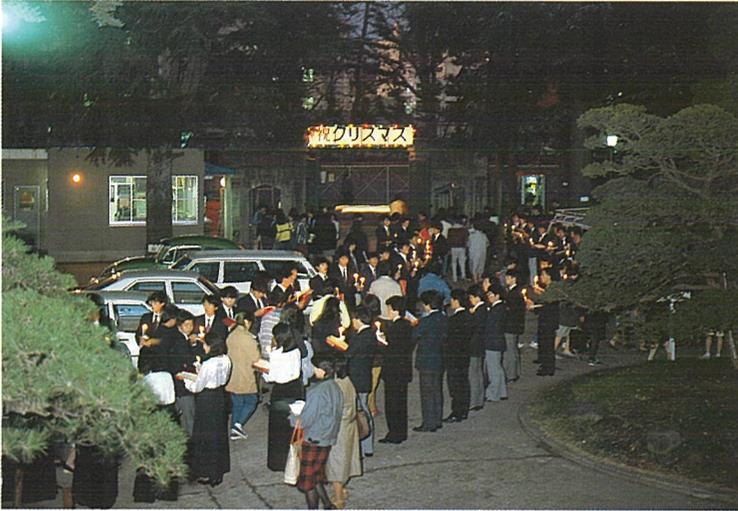
東北学院時報 号外 大学特集

学費値上げ反対運動について

学費値上げ反対運動について

学費改定問題紛争願末記

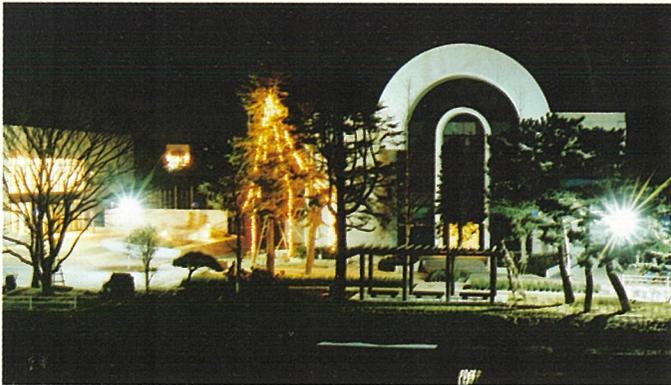
学費改定問題紛争願末記



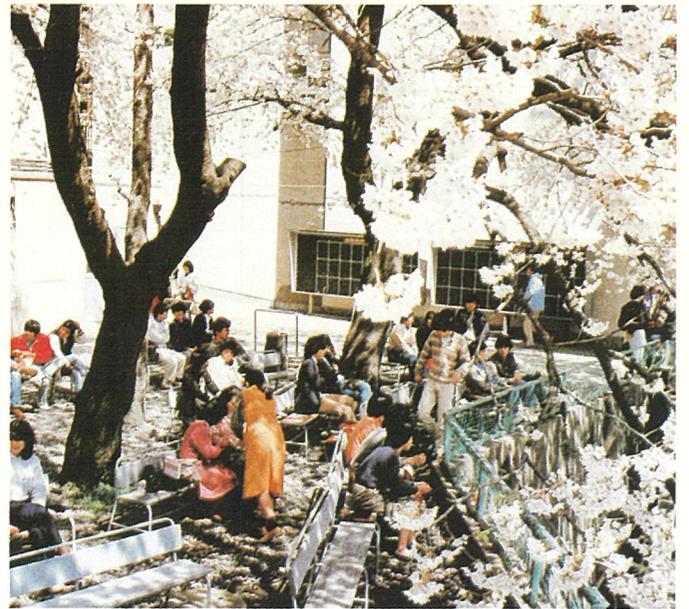
Christmas Caroling, Tsuchitoi



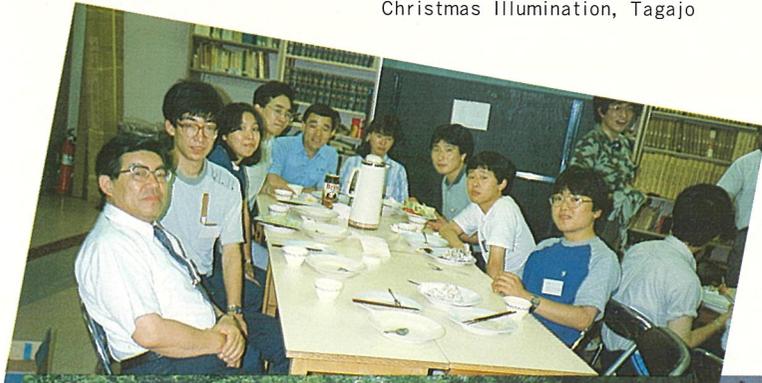
All Japan Inter-college Economics Seminar 1984



Christmas Illumination, Tagajo



桜の木の下で、土樋校地 Under the Cherry Trees



Summer School 1984



多賀城校地 Tagajo Campus

キャンパスライフ

未曾有の経済繁栄のもとに、学生生活も豊かな社会の恩恵にあずかり、狭い土樋校地には数千台のバイクが並ぶ。写真左上はクリスマス礼拝終了後の聖歌隊キャロリング、イルミネーションを施した多賀城礼拝堂。左下は青根セミナー・ハウスで毎年開かれる聖書セミナー、祈禱会は小田前院長の墓前。



中・高礼拝堂
High School Chapel

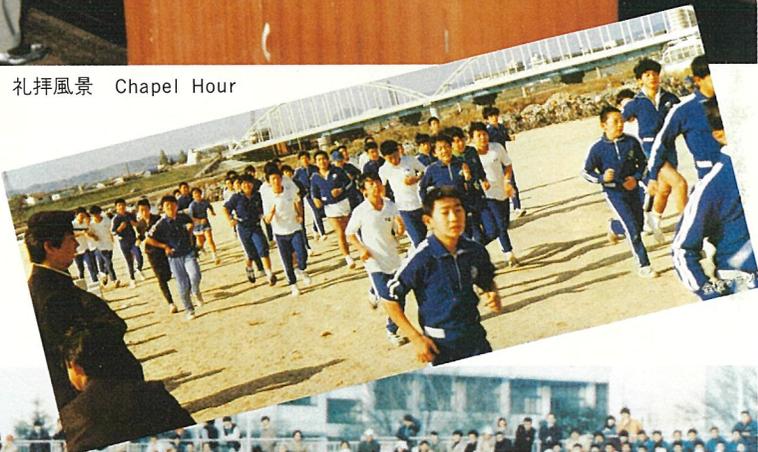


「若き日に造り主を覚えよ」

東北学院は中・高・大の一貫教育を目指して来たが、志願者数の増加に応じて高校への編入学も認めるようになった。思い出の多い赤煉瓦の古い校舎は姿を消し、礼拝堂を中心とする最新式の教室が次々と完成した。左下には偶々三代の校長（月浦利雄、二関敬、田口



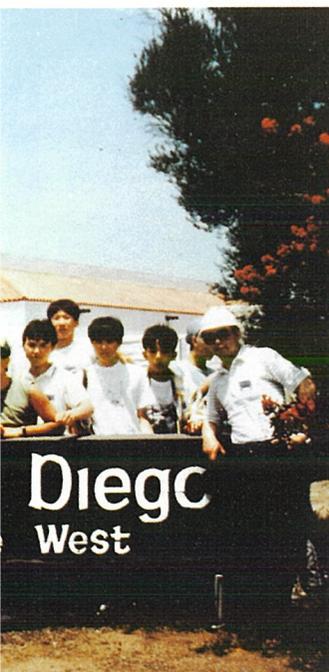
礼拝風景 Chapel Hour



高校二部閉校記念 1983

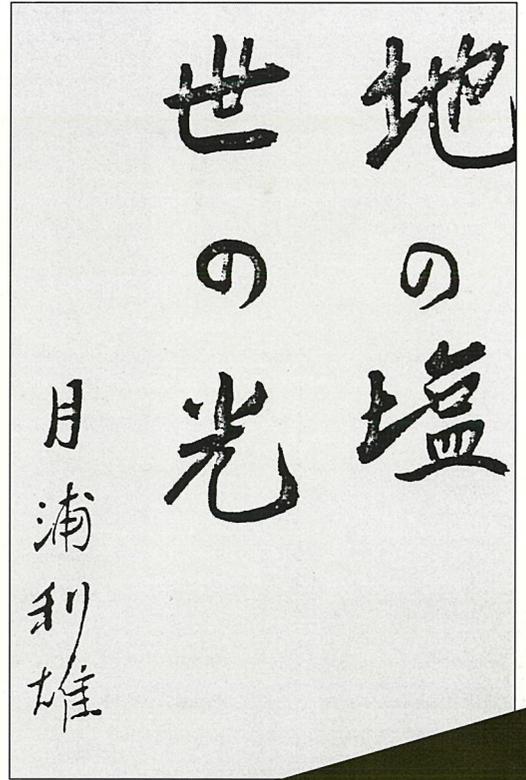


Inter-High School Soccer Game 1983

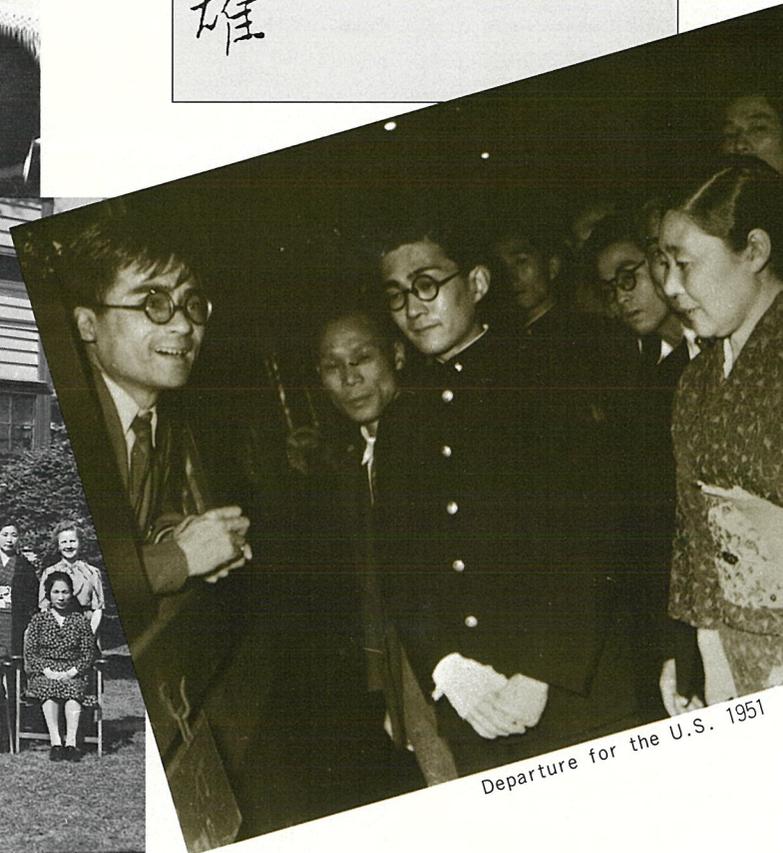


誠一)が見える。1965年に完成した礼拝堂では毎朝中・高全体の礼拝が守られている。中・高は体育にも力を注ぎ、長年全校マラソンなどを実施してきた。右下は1985年正月、全国選手権大会に出場のサッカー部。中央は夏に行なわれる海外研修の一コマ。

Principal Tsukiura conferring Certificate



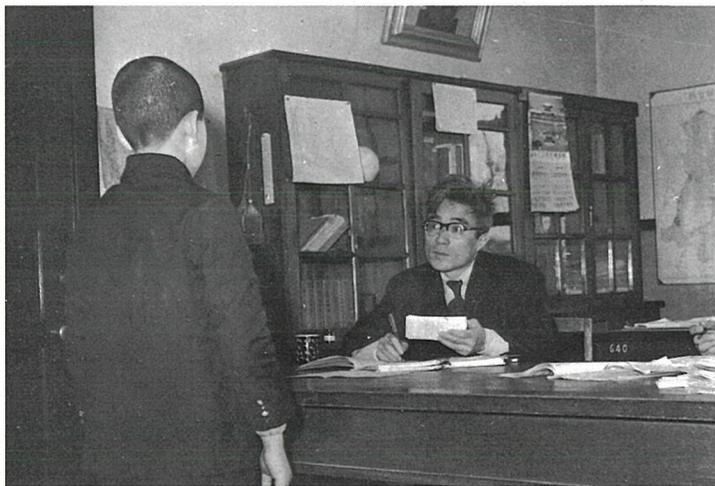
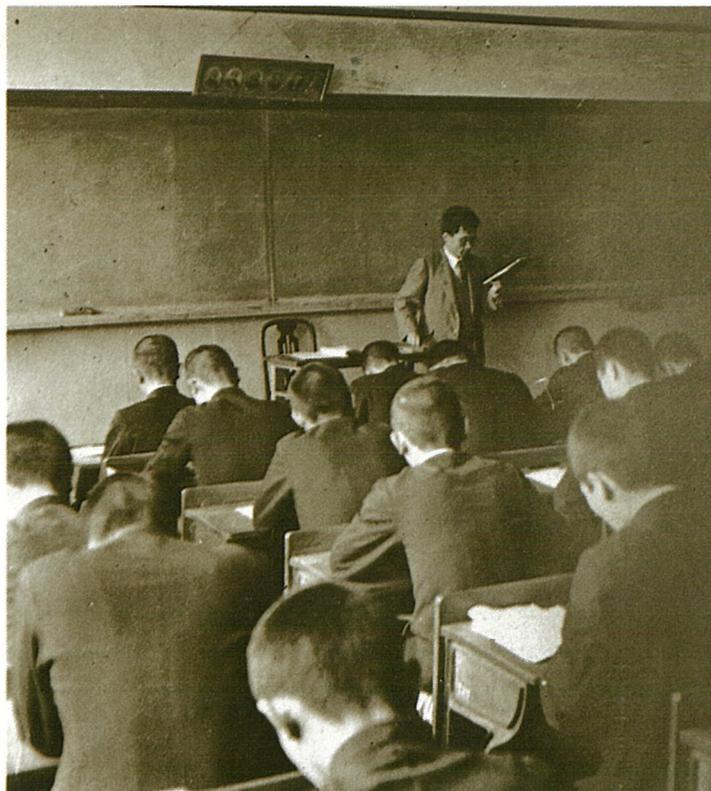
With Mrs. Paul L. Gerhard



Departure for the U.S. 1951

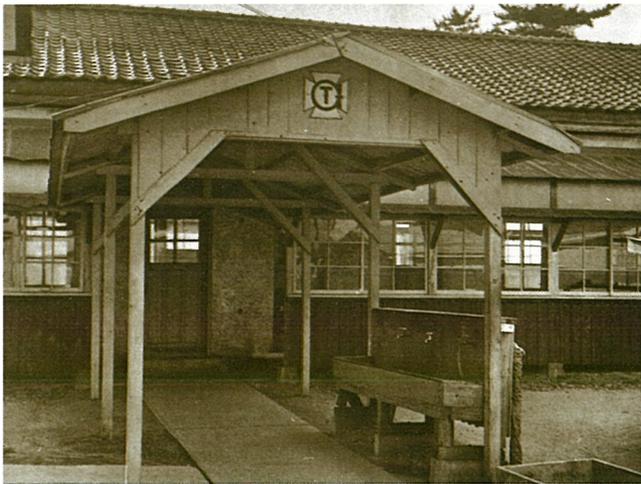
月浦利雄の校長在任時代

月浦利雄は旧制度時代には専門部教授として、新制度下には中・高校長として、高い識見と情愛に満ちた人格の故に大きな影響を及ぼした。左下はミセス・ポール・ゲルハードを迎えて。右下は1951年、海外視察に出発する若き月浦校長。

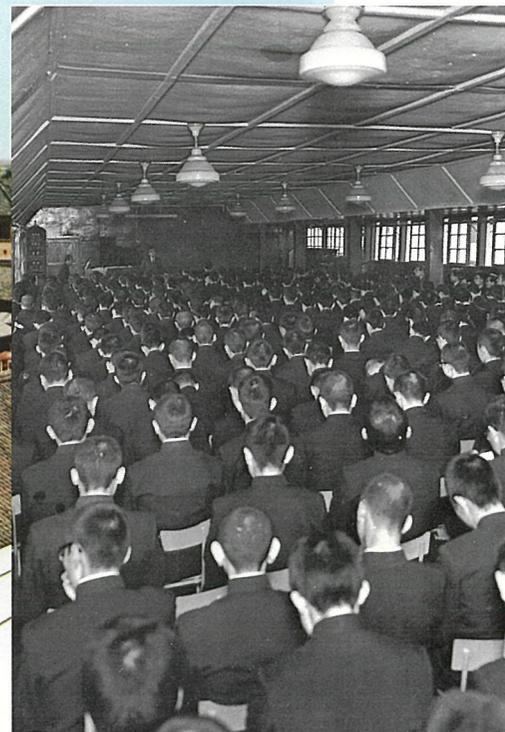


Presiding at the Chapel Service

左上は月浦英語をもって知られた独自の授業風景。下は榴ヶ岡校舎礼拝堂で司会をする校長。1971年泉校地に新築・移転して独立するまでは校長を兼務した。月浦校長の発案で始まったTG15日会（毎月15日の同窓生の自由な集会）は今なお続いている。



旧第四聯隊兵舎 Old Military Barracks as School Building

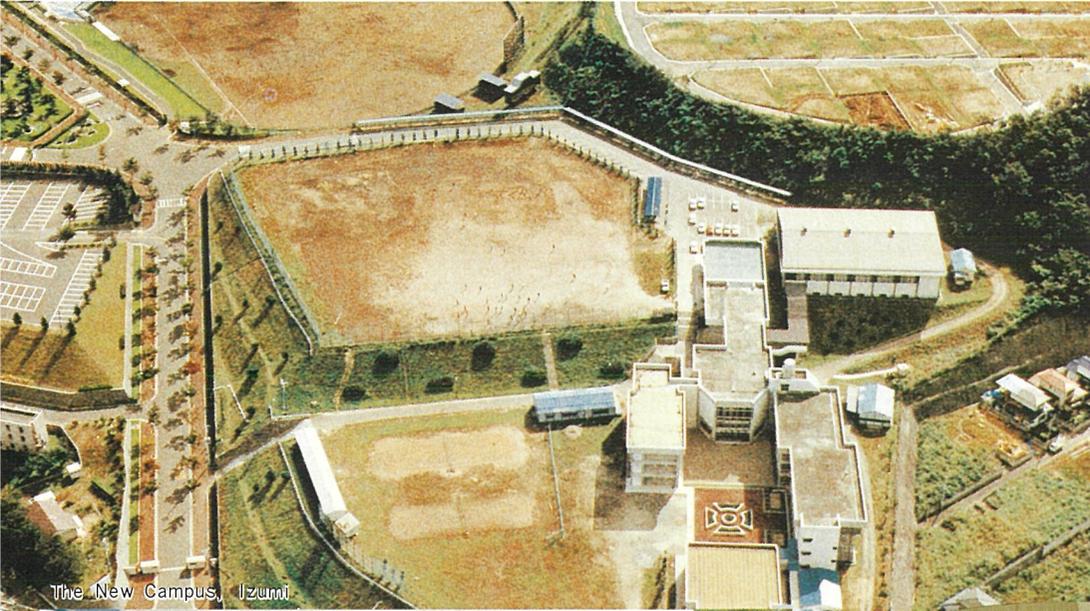


最初の教職員 The Faculty and Staff 1959



榴ヶ岡高校の発展

1959年4月、急増する高校進学希望者に対処するため、仙台市東部の旧陸軍兵舎を用いて分校を開設、地名にちなんで榴ヶ岡校舎と呼ばれた。当初、施設面などの悪条件にもかかわらず、少人数による人格教育の徹底を期する方針は現在までも守られている。1971年、



The New Campus, Izumi.

Principal Shimizu
conferring Certificate



Principal Igarashi cited for long Service



泉校地に校舎を新設して移転、五十嵐正躬校長(写真中央下、山根篤理事長から永年勤続表彰を受ける)のもとに独立校となった。生徒の自主性を尊重する校風は清水浩三現校長にまでも一貫している。また、積極的に国際交流を押し進め、教育の実を挙げている。



保育風景



最初の職員 The First Staff



旧園舎 The Old Building



園外保育 Camp Life



新園舎 The New Building

「幼な子を我に来らせよ」

1962年4月、工学部の新設と同時に、多賀城校地の一部を用いて幼稚園が開設され、キリスト教主義による幼児教育の一端を担うことになり、地域社会への奉仕のわざともなった。1985年12月、園舎を移転・新築、面目を一新して次の時代に備えることになった。



第2世紀への飛躍

1916年に取得した土樋校地は、大学の急成長につれて過密化し、移転が急務となった。上は移転予定の泉校地。工学部と二部を除く1、2年次学生約5,000名はここで学ぶことになる。新学部の開設と共に、創立100年を期しての世紀の大事業となる。



昭和59年度 東北学院大学

校歌

一、若人われらの理想の国は
青葉の都よ

ああ 東北学院

(おrikaeishi)

世の光 わがほこり

いざほめよや 方よ

もろこえ あわせて

われらの学院

二、大路ひとすじに

たどり行けば

ちえの衆わく

ああ 東北学院

三、いよ培いし大和心

神の愛に咲く

ああ 東北学院

四、命をささげし真の人

うたわるるいずこ

ああ 東北学院

五、教えの母よ

汝かゝころは

地のきわみまでも

ああ 東北学院

卒業式





東北学院100年の歩み

英文略史・年表

BRIEF HISTORY OF TOHOKU GAKUIN

I. THE DAWN OF THE SOUL

The origin of Tohoku Gakuin can be traced back to the sixteenth century Reformation in Europe, when Luther, Zwingli or Calvin began to revitalize the Christian world in the West. In Germany, the famous Heidelberg Catechism, composed by Ursinus and Olevianus in 1563, was widely accepted as the standard of faith and life among the Reformed family in the Rhineland and the Netherlands. A great number of immigrants found their way to freedom of conscience in the New World during the turmoils of the seventeenth and eighteenth centuries. Many settled in Pennsylvania on the East Coast of Colonial America. A theological seminary was established in Lancaster, Pennsylvania (1825) to train a native ministry to contribute to the education and evangelism of the German Reformed Church in the U. S., along with other church-related institutions, such as Franklin and Marshall College and Ursinus College. Out of Franklin and Marshall alone no less than seventeen graduates have dedicated themselves as missionaries to Japan in the past one hundred years. The relationship between Tohoku Gakuin and these schools is long and intimate, therefore.

The nineteenth century is sometimes called "The Great Century" of foreign mission, since missionaries were sent out by the thousands from the American and European churches to the farthest corners of the non-Christian world. It was only in 1878, however, that the German Reformed Church had decided to start mission work in Japan. The following year saw the Grings quite active in Tokyo and its environs as the first missionary couple of the denomination. Four years later, the Moores joined them. Soon, a few congregations came into being through their work. When William E. Hoy landed in Yokohama as the third missionary on December 1, 1885, however, he had no idea where he would be stationed.

By this time, the Christian religion had already taken firm root in Japan. Since the Protestant faith was first introduced to the country in 1859, influential bases had been formed in such places as Yokohama, Sapporo and Kumamoto; a competent native leadership was steadfastly growing along with the external aid in finance and personnel. Among the earliest nine converts was Masayoshi Oshikawa of a samurai family in Matsuyama, Shikoku. While he was studying the newly introduced Western knowledge in Yokohama, he was baptized by James Ballagh, a veteran Dutch Reformed missionary. Although the ban against Christianity had not yet been lifted, a small Protestant congregation was secretly organized there. It was surely the "Dawn of the Soul," which Oshikawa himself had long been anxious to see, as is illustrated by the title of one of his earliest literary products.

Late in 1876, Oshikawa was commissioned to Niigata, the only open port on the Sea of Japan, to assist Theodor Palm, a Scottish medical missionary stationed there. After a few years of toil and labor, Oshikawa and his co-worker, Kametaro Yoshida, turned to the Tohoku area and began evangelistic activities with the city of Sendai as the center. Within several years, a synod was formed with four constituting churches in loose connection with the Union Church of Christ in Japan. It was exactly at this time that a dramatic encounter took place: the newly arrived young Hoy was met by Oshikawa, who had been longing for a missionary collaborator to come to Sendai and help him found Christian schools there. With Hoy's immediate acceptance of this plea by Oshikawa, the German Reformed Church came into a co-operative relationship with the Union Church in Japan.

II. LET THE TOHOKU BE THE SCOTLAND OF JAPAN

Both Oshikawa and Hoy had the firm conviction that Christian evangelism in Japan could best be carried out by well-trained native pastors. For this purpose, it was felt that the founding of a theological training school was indispensable. From the early summer of 1886, sometime in May, Oshikawa and Hoy began to offer some basic instructions in theology to six young men who had committed themselves to the Christian ministry. In a small rented house near the edge of the city, the first six students lived and studied. It was called "The Sendai Theological Training

School," and then changed to Tohoku Gakuin (North Japan College) five years later. Among the first six students was H. Shimanuki, who was to become the pastor of Kanda Church in Tokyo and founder of the Rikko Kai, an organization to help Japanese immigrants settle down on the American continents. Most of the expenses of the school were paid by Hoy himself.

In July of the same year, Lizzie Poorbaugh and Mary Ault arrived in Sendai to start a girls' school with the help of Oshikawa and Hoy. The school was given government approval in September and was called Miyagi Joggako, the first educational institution for girls in Sendai. In the following year, David Schneder arrived in Japan with his newly-married wife, Anna, to begin their fifty-year dedication both to education and evangelism in the entire Tohoku area.

With the renaming of the school, Tohoku Gakuin started to offer courses for those who were not committed exclusively to Christian ministry. Thus, system of middle school and college departments with the seminary to crown it came into existence. About this time, a magnificent school building was completed in the center of the city to house the students. A fine library was included in honor of Rudolf Kelker, a great champion of the cause of foreign mission and the treasurer of the Mission Board at home. The rising poet, Toson Shimazaki, happened to be on the faculty for a brief period.

The fame of Oshikawa was rapidly rising all over the country and a number of young men from all parts of Japan were eager to study with him. For those who were financially distressed, an "Industrial Home" was founded by Oshikawa in order to help the students support themselves by part-time work, such as laundry, farm, dairy, newspaper delivery and the like. A printing house in memory of Kinzo Kaneko, who died in Lancaster shortly before his return to Japan after ten years of study there, made great contributions by publishing religious tracts and books. The Industrial Home was lauded as the source of inspiration for the entire Tohoku Gakuin and produced a great number of distinguished graduates over the decades. A solid foundation for the future had thus been laid down by this time.

Literary and cultural activities among the students were also flourishing. In 1893, the first issue of *Tohoku Bungaku* (Literary Magazine) was published to be followed by *Fuyoho*, a periodical of the Industrial Home, three years later. In 1893, Hoy began to publish his own unique English journal, *The Japan Evangelist*, which enjoyed wide circulation both in Japan and in the U. S. and lasted for another thirty years.

The ambitious Oshikawa, however, could not restrict his vista only to Sendai and Tohoku. He was equally active in Hokkaido, founding a pioneer project in the northernmost part of the island. He was also interested in establishing a Christian school in Seoul, Korea. His prospects reached even as far as Beijing, China. These outside activities eventually led Oshikawa to resign from the presidency of Tohoku Gakuin to give his full time to participation in the business and political fields. Hoy, on the other hand, turned his attention to China in the dying agony of the Ching Dynasty. Partly because of his severe attacks of asthma, Hoy too resigned from the school in 1900 and transferred to the entirely new field of Yochow in the Province of Hunan, where he and his family continued to serve in evangelistic, educational and medical work until his death on the Pacific in 1927. Throughout the tragic years of the World war II, Mary Hoy and the daughter Gertrude remained in the inland China notwithstanding the most depressing predicaments. Hoy rightly prided himself on being citizen of four countries—the U. S., Japan, China and above all the Kingdom of Heaven.

Under these circumstances, the future development of Tohoku Gakuin was entrusted to David B. Schneder.

III. LIFE LIGHT LOVE

When Schneder was appointed the second president of Tohoku Gakuin, his main efforts had to be for the consolidation of the school as an educational system. In 1902, the students of the Middle School department had acquired the privilege of exemption from military service as well as that of admission to government colleges and universities. Two years later, the College

department had obtained the full recognition of the Ministry of Education. In this way, Tohoku Gakuin was successful in establishing itself as a solid and legally approved part of Japan's educational system. In 1905, an impressive building was completed for the Middle School and was greatly admired by the citizens of Sendai. A few years previously, a beautiful sanctuary was also dedicated for the Sendai Church adjacent to the Seminary building. Without the incessant and self-sacrificing endeavors of the Schneders, these splendid edifices would not have been constructed. Until the very end of their long careers, the Schneders were literally the school and the church.

In 1911, the twenty-fifth anniversary of the founding of the school was festively celebrated with the former president Oshikawa as guest speaker. Literary and athletic activities were flourishing among the students. About this time, the first school anthem was composed and sung. The College department, which had consisted of the departments of theology and literature, now added new departments of teachers' training and commerce. A sizable lot was purchased for the College at Minami Rokkencho (the present university campus).

Just at this time, a great calamity struck Tohoku Gakuin when the prized Middle School building was completely destroyed by the great fire which swept the center of the city on the night of March 1, 1919. Confronted by this disheartening trial, the dauntless Schneders did not succumb. David, already over sixty, took the courageous lead for the reconstruction of the building, rejoicing over the many positive responses both in Japan and in the U. S. The Mission Board was again quick to extend its helping hand with generous donations for the new building, which was completed three years after the disaster. Over the main entrance, there was a plaque with the inscription: LIFE LIGHT LOVE, as the symbolic motto of the founding spirit of the school.

During their fifty years in Japan, the Schneders made seven trips back to the U. S. They did their best to promote international friendship between Japan and the U. S., as well as to raise the much needed fund for the expansion of the schools and the churches in the area. When they returned from their furlough in 1924, they had solicited enough money for the building of the College. The fortieth anniversary was also the occasion for celebrating the completion of the new campus. A few years later, the Housekeeper Memorial Hall was dedicated through the efforts of Mrs. Schneder, who was long anxious to have a center for evangelistic and social activities on the campus. In 1932, a grand and extremely impressive chapel was completed and named after its generous donator, Miss Rauhauser of Pittsburg, Pennsylvania.

By the middle of the 1920's, the number of the alumni was well over one thousand, among whom were a goodly number of outstanding graduates, such as Prof. Yamakawa, a well-known Dante scholar, Dr. Hatai, a celebrated biologist, Prof. Kajiwara, a much beloved teacher and evangelist, Prof. Abe, composer of the present school anthem, not to mention the two Demuras who later became presidents of the school in succession. The Mission Board was faithful in supporting the school by way of financial subsidy as well as through the sending of a number of capable missionary professors like Dr. Noss, the Gerhards, Dr. Zaugg, to mention only a few. They all contributed immensely to the education and evangelism in the entire district of Tohoku.

The Schneders were keenly aware of the need of a college church in order to substantialize the founding spirit. The generous gift of fifty thousand dollars by Miss Rauhauser had enabled Tohoku Gakuin to construct an exquisite chapel, which the newly organized congregation made the best use of. In 1931, the Manchurian Incident took place. Stormy years were soon to come and hit the aged Schneders, however.

IV. I AM NOT ASHAMED OF THE GOSPEL

The worldwide depression in the early 1930's did not fail to devastate the always frail finances of the German Reformed Church. Soon the situation fell into extreme difficulty. The Mission Board had no other alternative but to cut its annual subsidy for Tohoku Gakuin, Miyagi

Jogakko and the churches in Tohoku. The financial aid for Tohoku Gakuin, which once amounted to well over \$50,000 a year until the late 1920's, had to be cut by 40 percent. Tohoku Gakuin thus faced an unprecedented crisis. In the search for a way to self-support, the school tried to reduce its regular expenditures on the one hand and to raise sufficient funds, on the other, under the capable leadership of Schneder, who energetically solicited donations from his influential friends in the political and business circles of Japan. It was by no means easy, however, to attain the intended goal of one million yen.

The difficulty was not limited to the financial dimension alone. Japan's explicitly aggressive foreign policy toward the acquisition of colonial territories and overseas markets was rapidly producing a critical tension with the Western powers in Asia. The much famed Taisho Democracy was being overshadowed by the rising militarism. The increasingly loud cry of national emergency put the end to the prevailing liberalism among the better educated. Military coup d'etat followed one after another. In all educational institutions beyond the level of middle school, military training with the uniformed officers on the campuses became mandatory. No Christian schools could be exempted from this demand by the government. Tohoku Gakuin had to comply with this obligation, too.

The armed conflicts in Manchuria quickly expanded into a large-scale war between Japan and China, eventually culminating in World War II in the entire area of the Pacific. The ultra-nationalistic military government, anxious to enforce an ideological uniformity within the country, tried to tighten its control over the people and their lives. Red purges mercilessly engulfed many campuses including Tohoku Gakuin. The very founding spirit itself was at stake.

On the occasion of the fiftieth anniversary in 1936, the aged President Schneder, then 80 years old, made a long remembered sermon which was broadcasted by the NHK under the title "I am not ashamed of the Gospel" (Romans 1: 16). This gave profound impression to his audience throughout the country. In it was embodied his ardent and sincere prayer and a firm determination to maintain the founding spirit of LIFE LIGHT LOVE even in such an age as that, no matter how much sacrifice it might cost.

Schneder was succeeded by Teizaburo Demura, his former student and long associate, who had to cope with the growingly difficult situation both within and without. The Schneders again crossed the Pacific in the search of a breakthrough in the U. S.-Japan relation in order to avoid the catastrophe. Even a personal interview with President Roosevelt, however, could in no way change the general course of affairs. The only consolation for the people around them was that the Schneders had passed away before the actual outbreak of the war between what they loved to call "our two native countries." The discontinuation of the Seminary department in the form of a merger with the Tokyo Union Seminary (1937) was quite symbolic of the difficulties Tohoku Gakuin was then facing. The Seminary had been sending out faithful and influential ministers of the Gospel for the churches mainly in the Tohoku area over the duration of fifty years since its foundation.

When the World War II finally broke out and the flames of disaster spread all over the country, students and faculty were either enlisted in the armed forces or mobilized as labor power in the military factories. The school buildings and even the chapel were requisitioned for military purposes. Thus, the existence of the school itself was tragically threatened. The worst crisis of the total dissolution of the school was barely evaded by the addition of a new department of aeronautic engineering toward the end of the war.

The material and spiritual afflictions culminated in the air raid by American bombers the night of July 9, 1945, a month before Japan's unconditional surrender to the Allied Forces. Almost all buildings, both of College and Middle School departments, were burned down or hopelessly destroyed. The downfall of militaristic ultra-nationalism in Japan, however, had removed the unbearable pressure long torturing Tohoku Gakuin as a Christian institution. Japan's defeat was literally a liberation. The way toward reconstruction, nonetheless, seemed to be far and hard in the midst of the post-war destitution and confusion.

V. THE FEAR OF THE LORD IS THE BEGINNING OF KNOWLEDGE

Tohoku Gakuin rose again out of the ashes and ruins of the lost war. The American occupation provided a favorable mental atmosphere for the schools with the Christian heritage. The German Reformed (Evangelical and Reformed since 1938) Church was not tardy in sending help both in finance and personnel. In addition to the pre-war returnees, a large number of young and competent missionaries now joined the field. The Schneder Memorial Library, completed in 1953, was a visible sign of this renewed co-operation, as the building fund had been securely and faithfully kept in the U. S. even through the war years in the name of the Schneders. Soon after the war was over, it was promptly forwarded to Sendai. A plaque was put in the front hall of the new library with a Biblical passage inscribed upon it: The fear of the Lord is the beginning of knowledge. It was a resolute reconfirmation of the founding spirit in the new situation.

In accordance with the newly proclaimed philosophy of education in post-war Japan with its orientation to peace and democracy, Tohoku Gakuin was quick in reorganization. The junior and senior highschool under Principal Toshio Tsukiura and the four-year college under President Tadao Oda acquired government approval. Yoshio Suzuki, a noted law professor and a member of the Diet, was appointed as the Board of Trustees Chairman according to the newly regulated school ordinances. In November, 1946, Ko Demura was promoted to the chancellorship of the whole institution. He embraced a grand vision of constructing a greater Tohoku Gakuin which would include everything from a primary school through a university. His premature death in September, 1949, however, obstructed the scheme and the death of his successor, Alfred Ankeney, Schneder's son-in-law, soon followed. It was therefore Tadao Oda, installed as chancellor in May, 1951, who became responsible for the further growth and development of Tohoku Gakuin over the period of more than thirty years until his death in March, 1982.

The needs were vast and multiple. The reorganization of the school system, the acquisition of a capable and committed staff went along with the repair of badly damaged buildings and facilities and the expansion through new construction. Religious activities, such as daily chapels, faculty retreats, student movements or Christmas, greatly accelerated the new awareness of the school's Christian heritage and its founding spirit. Both Christian schools and local churches made the best use of this great opportunity provided by the changed atmosphere toward Christian religion. People literally thronged the churches and chapels in the search of peace of mind and for something solid and enduring. On the college campus, the newly awakened academic interest brought forth the publication of annual bulletins from the year 1949 until the present time.

The seventieth anniversary celebrated in 1955 also marked the tenth year of the post-war reconstruction. A school history, well over 1,000 printed pages, was published for the first time and well received. Extra-curricular activities also flourished on all campuses in the spheres of students' self-government, cultural and athletic actions. Thus Tohoku Gakuin came to acquire a nation-wide fame. The entire enrollment in the year 1955 rose to over 5,500 including the evening schools both in college and highschool. The number of alumni was more than 14,000 by this time. Some thirty regional branches and more than a dozen occupational T. G. groups were extremely active in the support of the *alma mater* both by way of generous contributions and daily prayers. The alumni bulletin, which was forced to discontinue during the war years, resumed publication as a tie between the school and its alumni/ae. Women students were admitted for the first time when the war was over. The College has become co-educational. In this way, Tohoku Gakuin was steadfastly finding its way toward further growth and development.

VI. UNTO THE FARTHEST CORNERS OF THE WORLD

The period of industrious reconstruction was followed by the period of remarkable development. In 1962, a new School of Engineering was founded in order to train a new generation of technical engineers in a Christian context on an entirely new campus in the adjacent city of

Tagajo, some ten miles east of the old campus in Sendai. In 1964, the university was totally re-organized into three departments, Art and Literature, Economics and Commerce, and Law. About this time, graduate programs with excellent faculty were added to the undergraduate departments, and since then have produced a large number of young and competent scholars and researchers. Furthermore, a new high school was established in response to popular demand, first in an old rented military barracks in an area called Tsutsujiga-oka, then later, at the completely new site in the northern outskirts of Sendai. A kindergarten was also started in 1962 in Tagajo. Thus, Tohoku Gakuin has become the largest private educational institution north of Tokyo.

The incomparable growth of this institution, especially in its undergraduate section, however, was not without peculiar conflicts and difficulties. Tohoku Gakuin could not escape the worldwide phenomenon of the so-called "student riots" in the late 1960's and the early 1970's. Only the firm and unanimous determination of the administration with the co-operation of the faculty and staff to maintain its Christian heritage over against the distinctly ideological upheaval could successfully cope with the perilous situation. Nonetheless, Tohoku Gakuin has never failed to try to respond to the radical and drastic questions raised by the newly-awaken student generation, always endeavoring to renovate itself in various ways.

This latter period can be characterized by enormous efforts to improve and expand the educational facilities, such as classrooms, faculty offices, chapels, gymnasiums, libraries, student unions and dormitories. The completion of an athletic field, well over 45 acres in total, is exceedingly symbolic of the development of the entire institution. Tens of thousand of highly qualified graduates have been sent out "unto the farthest corners of the world," as proclaimed in the school anthem. In addition, over a dozen institutes and laboratories attached to the university are immensely contributing to the promotion of culture and technology throughout the entire nation.

Since 1973, a variety of projects have been carried out as an embodiment of increasingly vigorous interest in international exchange suitable to this new era of global community. The Summer Studies Program at Ursinus College in Pennsylvania is one of them. The participation of American students in Tohoku Gakuin's intensive Japanese Studies Program in Sendai since 1982 is another example. The two high schools also have been equally active in carrying out their own overseas programs. The long and historic tie between Tohoku Gakuin and its sister institutions in the U. S. are thus revitalized and strengthened. In addition, missionaries continue to serve on the faculty, and since 1972 the school has paid a large share of their salaries. Within the country, the annual sports contests between Tohoku Gakuin and Aoyama Gakuin University in Tokyo and Hokkai Gakuen University in Sapporo have promoted intercollegiate fellowship for the past thirty years.

In March, 1981, Tadao Oda passed away in his thirtieth year as the top ranking officer of the school. It was he who had exercised indefatigable leadership throughout these years of growth and development both as university president and chancellor of the entire institution, and eventually as chairman of the Board of Trustees until his final year. He deserves to be remembered along with Mr. Toshio Tsukiura, who was principal of the high school through the critical years after the war and then chairman of the Board of Trustees after his retirement. These two men were equally outstanding in their eminently Christian commitment as well as in their vigorous initiative in preserving and freshly re-interpreting the founding spirit of the school. Their achievements have been entrusted to their successors, Tetsuo Seino as President and Chancellor, and Shozo Kodama as Chairman of the Board of Trustees. Under their joint leadership, Tohoku Gakuin is envisioning its broad future in the impending twenty-first century. The university is now planning to move half of its student body to a new campus, some ten miles northwest of downtown Sendai, where the new high school and a spacious athletic field have already been located. The entire institution continues to maintain a strong Christian program, with daily chapel services and courses in Christianity required of all students. Our closing prayer should, therefore, be that the very existence and future course of Tohoku Gakuin be for the greater Glory of Him Who commanded us to bring His Good News to the end of the earth and promised to be with His disciples, world without end.

東北学院年表

年 代	東 北 学 院 関 係 事 項	一 般 事 項
1849 (嘉永 2) 年	押川方義出生(12月)、伊予松山藩士橋本宅次の三男。〔嘉永 4 年12月とも伝えられる。〕	
1857 (安政 4) 年	方義、押川家の養嗣子となる。	
1859 (安政 6) 年		S. R. ブラウン、J. C. ヘボン、G. F. フルベッキら最初のプロテスタント宣教師来日。
1861 (文久元) 年		J. H. バラ来日。
1868 (明治元) 年	方義、押川常子と結婚、松山藩立英学校に入る。	
1869 (明治 2) 年	押川、藩命により上京。	
1870 (明治 3) 年	押川、開成校入学。	
1871 (明治 4) 年	押川、横浜修文館に入り、バラやブラウンより英語を学ぶ。	
1872 (明治 5) 年	押川ら 9 名バラより受洗(旧暦 2 月 2 日)、日本基督公会(日本最初のプロテスタント教会)を設立。	東京横浜間鉄道開通。学制公布。太陽暦採用。徴兵令公布。
1873 (明治 6) 年	ブラウン塾開設、押川ら入塾。	切支丹禁制高札撤廃。
1874 (明治 7) 年		T. A. パーム来日。
1875 (明治 8) 年	押川、『心の夜あけ』を出版。パームの招請に応じ、押川、新潟伝道に赴く(12月)、翌年 1 月新潟着。	
1876 (明治 9) 年		熊本バンド、花岡山の誓い。クラーク札幌農学校来任、札幌バンドの始め。
1877 (明治10) 年	日本基督一致教会創立(10月)。	西南の役。
1879 (明治12) 年	A. D. グリング夫妻、合衆国(ドイツ)改革派教会最初の宣教師として来日(6月)。	
1880 (明治13) 年	押川、基督教教師の職につく。新潟大火、ほとんど全市を焼く(8月)。押川、吉田亀太郎を伴い仙台に移り伝道開始(9月)。	新約聖書と訳完成。
1881 (明治14) 年	仙台教会創立(5月)。	
1883 (明治16) 年	J. P. モール夫妻来日(9月)。	
1884 (明治17) 年	グリング、『海徳山問答』を出版。	
1885 (明治18) 年	仙台、古川、石巻、岩沼の 4 教会は日本基督一致教会に加入、宮城中会を組織(11月)。W. E. ホーイ来日、押川の招請に応じ仙台赴任を決意し、視察のため来仙(12月)。	
1886 (明治19) 年	ホーイ仙台着任(1月)。仙台神学校創立(5月)。E. R. ブルボー、M. B. オールト来日(7月)。宮城女学校創立(9月)。	学校令発布、尋常小学校4ヶ年を義務教育とする。東華学校創立(明治25年廃校)。
1887 (明治20) 年	東二番丁の本願寺別院跡を取得、仙台教会および仙台神学校をここに移す(5月)。D. B. シュネーダー夫妻来日(12月)。	山形英学校創立、押川、校長を兼務(明治24年廃校)。上野一仙台間鉄道開通。仙台第二高等中学校創立。
1888 (明治21) 年	シュネーダー着任(1月)。オールト記念館落成(11月)。	
1889 (明治22) 年	押川、欧米視察(3月より翌年 5 月)。	憲法発布。東海道線全通する。
1890 (明治23) 年	仙台神学校校舎建築に着工、翌年 8 月完成。	府県制公布。教育勅語発布。第 1 回帝国議会開かれる。

年 代	東 北 学 院 関 係 事 項	一 般 事 項
1891 (明治24) 年	東北学院と改称。予科3年、本科4年、神学部3年とする。	
1892 (明治25) 年	労働会の創設(3月)。東北学院理事局を組織、押川方義院長、ホーイ理事局長および副院長に就任(8月)。東北学院開院式(11月)。	
1893 (明治26) 年	高橋伝五郎、千島開拓伝道に赴く。『東北文学』創刊。(10月)。	井上哲次郎『宗教と教育の衝突』刊行。
1894 (明治27) 年	南六軒丁に労働会塾舎を建築、川合信水塾長となる。押川、大日本海外教育会を創設。	日清戦争勅諭(翌年講和)。
1895 (明治28) 年	予科、本科を改組し、普通科5年、その上に専修部2年(文科・理科)とする。学年開始を4月に改める。	
1896 (明治29) 年	押川、北海道同志教育会を創設。労働会、滝前丁と東八番丁に用地取得。押川、京城学堂を創立(4月)。島崎春樹、作文教師に就任(9月から翌年6月)。	三陸大津波。
1897 (明治30) 年	労働会の管理を押川より理事局に移す。東八番丁に労働会塾舎落成。労働会、東九番丁に用地取得。	河北新報創刊。
1898 (明治31) 年	理科専修部を廃止。	
1899 (明治32) 年		文部省訓令第12号公布。
1900 (明治33) 年	ホーイ、東北学院を辞任、中国湖南省岳州で伝道開始(のち、湖濱学校に発展)。	
1901 (明治34) 年	押川、東北学院を辞任。シュネーダー、第2代院長に就任。笹尾桑太郎、普通科長に就任。田中四郎、労働会長および塾長に就任。普通科に制帽を制定。徽章TG章制定。仙台教会、献堂式を挙行。	
1902 (明治35) 年	普通科、徴兵猶予および高等学校進学資格を得る。東北学院同窓会結成。	宮城女学校校舎全焼。
1903 (明治36) 年	普通科、専門学校入学資格を得る。同窓会第1回総会を開く。労働会営業部を南町通に開く。	文部省専門学校令公布。
1904 (明治37) 年	全校を2部に改組し、普通科(5年)と専門学校令による専門科(3年)とに分け、専門科に文学部と神学部とを置く。出村悌三郎、専門科長に就任。専門科、徴兵猶予の認可を得る。	日露戦争勅諭(翌年講和)。
1905 (明治38) 年	専門科を専門部とし、文学部を文科、神学部を神学科と改称。田中四郎、普通科長に就任。普通科、土曜日休日を廃止。東二番丁に普通科校舎完成。専門部、角帽を制定。徽章は全校TG章を用いる。	
1906 (明治39) 年	普通科寄宿舎完成。	
1907 (明治40) 年		第7回万国基督教青年大会、東京にて開催。救世軍ブース大将来日。小学校義務教育6ヶ年に延長。東北帝国大学創設。
1908 (明治41) 年	「社団法人東北学院」を設置。創立記念日を5月15日と定める。同窓会会報第1号発行。シュネーダー同窓会長となる。	
1910 (明治43) 年	ドイツ改革派教会外国伝道局幹事A.R.パーソロミュー来仙。校旗を制定。	韓国併合、日韓条約に調印。
1911 (明治44) 年	創立25周年記念式典挙行。	東北帝国大学理学部設置。辛亥革命(孫文)勅諭(翌年、中華民国成立)。
1912 (大正元) 年	普通科入学試験場を東北各地に設ける。労働会農業部を廃止。	明治天皇崩御。

年 代	東 北 学 院 関 係 事 項	一 般 事 項
1914 (大正 3) 年	香味ちか死去。	第一次世界大戦勃発。対独宣戦布告。
1915 (大正 4) 年	普通科を中学部と改称 (生徒数357名)。	
1916 (大正 5) 年	『東北学院時報』創刊(1月)。シュネーダー、勲四等旭日小綬章を受ける。南六軒丁に専門部校地を取得。	
1918 (大正 7) 年	専門部を改組、神学科、文科、師範科、商科とする。	第一次世界大戦終結。全国各地で米騒動。
1919 (大正 8) 年	仙台大火のため中学部校舎・寄宿舎全焼(3月)。仮校舎建築(9月)。	ベルサイユ条約調印。
1920 (大正 9) 年	専門部師範科卒業者に、中等教員英語科無試験検定の資格を得る。五十嵐正、中学部長に就任。労働会牛乳部、活版部を廃止。	
1921 (大正10) 年	労働会を廃止、塾舎を東北学院労働会寄宿舎に変更。創立35周年記念式典挙行。	
1922 (大正11) 年	中学部校舎再建(6月)。中学部寄宿舎再建。	
1923 (大正12) 年	E. H. ソーグ神学科長、郡山源四郎文科・師範科長、内藤隆行商科長に就任。東北学院教会設立(5月)。	関東大震災起こる。ソビエト社会主義共和国連邦成立。
1924 (大正13) 年	シュネーダー、勲三等瑞宝章を受ける。ホーイ夫妻、帰米の途次来仙。	米国排日移民法実施。
1925 (大正14) 年	神学科を専門部より分離して神学部とし、専門部は文科、師範科、商科となる。軍事教練を課す。商科事件起こる(4月)。	治安維持法公布。普通選挙法公布。
1926 (大正15) 年	専門部商科卒業者に、実業学校教員無試験検定の資格を得る。南六軒丁に専門部校舎完成、9月より使用。創立40周年記念式ならびに専門部校舎落成式を挙行(10月)。(この年より創立記念日は10月。) 東北学院日本基督教会、建設式を挙行(2月)。	
1927 (昭和 2) 年	ホーイ前副院長、中国より帰米の途上、死去(3月)。	
1928 (昭和 3) 年	押川方義前院長死去(1月)。専門部3科とも予科を廃し、4年制とする。ハウスキーパー記念社交館完成(3月)。	第1回普通選挙実施。仙台NHK、ラジオ放送開始。
1929 (昭和 4) 年	専門部を高等学部と改称。神学部第2科廃止、第1科を神学部本科と改称し3年の予科を置く。「財団法人東北学院」を設置(8月)。	世界恐慌起こる。
1930 (昭和 5) 年	高等学部師範科に専攻科1年を置く。	日本神学校創立。ロンドン海軍軍縮条約成立。
1931 (昭和 6) 年	シュネーダー院長の停年制延長請願起こる。高等学部事件起こる(7-10月)。	満州事変勃発。東北地方大飢饉。
1932 (昭和 7) 年	高等学部は3学期制を2学期制に改める。ラーハウザー記念礼拝堂完成(3月)。労働会寄宿舎を廃止。中学部寄宿舎を廃止し、神学部寄宿舎をその跡に移す。山川丙三郎、師範科長に就任。	5・15事件起こる。満州国独立。
1933 (昭和 8) 年	高等学部制帽を角帽より丸帽に改める。高等学部文科卒業者に、中等教員歴史科無試験検定の資格を得る。中学部シュネーダー叙勲記念奨学会(父兄会)復興。(この年より創立記念日は再び5月。)	国際連盟脱退。米国経済恐慌。三陸大津波。ヒットラー、ドイツ国首相に就任。
1934 (昭和 9) 年	外国伝道局、補助金4割減を通告、教職員1月より減俸。神学部、南六軒丁ブラッドショウ館に移る。シュネーダー、院長辞任を表明、理事会は昭和11年創立50周年を期して受理に決す。創立50周年記念事業として基本金100万円募集の計画を起こす。高等学部後援会(父兄会)を設置。	ドイツ改革派、エヴァンジェリカル教会と合同。ワシントン軍縮条約破棄通告。
1935 (昭和10) 年	出村悌三郎院長代理、津久井善四郎高等学部長代理、高里良恭文科長、山川丙三郎師範科長に就任。御真影奉戴式を行う。	

年 代	東 北 学 院 関 係 事 項	一 般 事 項
1936 (昭和11) 年	高等学部文科を文科第1部、師範科を文科第2部と改称。創立50周年記念式典挙行。シュネーダー院長辞任、出村悌三郎院長就任式(5月)。野間記念道場完成。旧労働会建物および敷地を売却。	ロンドン海軍軍縮会議脱退。2・26事件起こる。日独防共協定成立。
1937 (昭和12) 年	神学部廃止(3月)、日本神学校と合同。高等学部、3年制となる。ゾーグ、高等学部長に就任。	日中戦争勃発。
1938 (昭和13) 年	田口泰輔、中学部長に就任。シュネーダー名誉院長死去(10月)。本院出身戦死者合同追悼会を行う(11月)。	国家総動員法公布。
1939 (昭和14) 年	田口泰輔死去、出村剛中学部長に就任(5月)。毎朝礼拝前に皇居遙拝を行う。	宗教団体会法成立。ノモンハン事件起こる。第二次世界大戦始まる。
1940 (昭和15) 年	南町通旧神学部校舎および敷地を売却。東北学院維持会を組織。花淵浜高山に修養道場建築用地を取得。	日独伊三国軍事同盟調印。大政翼賛会発足。
1941 (昭和16) 年	出村剛高等学部長、小泉要太郎中学部長に就任。ミセス・シュネーダー死去(6月)。高等学部文科生徒募集停止(翌年廃止)。奉安殿落成。	日本基督教団成立。真珠湾攻撃、日米開戦。
1942 (昭和17) 年	高等学部商科第2部および中学部第2部設置。	シンガポール占領。ミッドウェー沖海戦。
1943 (昭和18) 年	高等学部商科を高等商業部と改称。中学部を中学校と改称。出村悌三郎、中学校長を兼任。	学徒戦時動員体制確立。ガダルカナル島敗退。
1944 (昭和19) 年	航空工業専門学校設置、宮城音五郎校長に就任。	緊急学徒勤労動員方策要項決定。日本本土空襲始まる。
1945 (昭和20) 年	出村悌三郎、院長および中学校長を辞任。出村剛、中学校長に就任。高等商業部および同第2部を廃止。仙台空襲により被害甚大(7月)。航空工業専門学校を工業専門学校と改称(12月)。	米軍沖縄本島上陸。広島・長崎に原爆投下。日本、連合国に無条件降伏。
1946 (昭和21) 年	専門学校および同第2部を設置、出村剛専門学校長に就任。月浦利雄、中学校長に就任。出村剛、院長に就任(11月)。米国諸教会、援助再開を約束。	日本国憲法公布(翌年5月施行)。
1947 (昭和22) 年	工業専門学校廃止。(新制)中学校設置。専門学校校舎木造2階建4教室増築完成。	教育基本法・学校教育法公布。
1948 (昭和23) 年	〔新制〕高等学校、同第2部を設置、月浦利雄高等学校長に就任、中学校長を兼任。小田忠夫、専門学校長に就任。	教育勅語廃止。
1949 (昭和24) 年	〔新制〕大学文経学部を設置、小田忠夫大学長に就任、専門学校長を兼任。出村剛院長死去(9月)。出村悌三郎前院長死去(12月)。中学校木造校舎6教室完成。東九番丁寄宿舎完成。	私立学校法公布。
1950 (昭和25) 年	A・アンケニー、院長に就任(3月)。大学短期大学部を設置、小田忠夫学部長を兼任。大学総合講義室、教授研究室、夏期修養所高山荘完成。	朝鮮戦争起こる。
1951 (昭和26) 年	アンケニー院長死去(2月)。「学校法人東北学院」を設置、鈴木義男理事長に就任(2月)。小田忠夫、院長に就任、大学長を兼任。専門学校を廃止。短大別科を設置。中・高理科教室鉄筋コンクリート3階建完成。	サンフランシスコ対日平和条約調印。日米安全保障条約調印。
1952 (昭和27) 年	短大に法科を設置。阿部欣二、大学学監に就任。	東北放送、ラジオ放送開始。
1953 (昭和28) 年	五十嵐正躬、中学校長に就任。総合運動場を多賀城に開設。シュネーダー記念図書館完成(10月)。	NHKテレビ本放送開始。
1954 (昭和29) 年	中学校校舎鉄筋コンクリート3階建6教室増築完成。多賀城第2寄宿舎完成。	自衛隊発足。
1955 (昭和30) 年	中学校校舎鉄筋コンクリート3階建9教室完成。創立70周年記念式典挙行。同窓会、『東北学院創立七十年写真誌』および『会員名簿』を刊行(5月)。蔵王にTGHユツテ「栄光」完成(10月)。在米同窓生、創立70周年記念として鐘を寄贈(12月)。	仙台NHK、テレビ放送開始。

年 代	東 北 学 院 関 係 事 項	一 般 事 項
1956 (昭和31) 年	中・高体育館完成(3月)。W・E・ホーイ碑、出村悌三郎墓、北山に建てられる(4月)。小田院長訪米、アーサイナス大学より名誉博士号を受ける(6月)。大学音楽館完成(10月)。	日ソ国交回復。国際連合加盟。
1958 (昭和33) 年	五十嵐正躬、中学校長を辞任、法人会計理事に就任。月浦利雄、中学校長を兼任。中学校赤レンガ校舎は都市計画により9教室を失う(4月)。中・高校舎鉄筋コンクリート造4階建8教室完成(4月)。大学体育館「アセンブリー・ホール」完成(9月)。	
1959 (昭和34) 年	短大学生募集を停止。文経学部2部を設置。高等学校榴ヶ岡校舎を開設。同窓会、『東北学院七十年史』を刊行(7月)。伊勢湾台風のため中・高校庭のサイカチの樹(樹齢150年)が倒れる(9月)。大学研究棟鉄筋コンクリート造4階建完成(9月)。自然科学研究室青根分室を開設(10月)。	
1960 (昭和35) 年	短大を廃止(3月)。	日米新安保条約調印。チリ地震津波。国民所得倍増計画発表。
1961 (昭和36) 年	文経学部英文学科に専攻科を設置。創立75周年記念事業計画を発表(大学8億円、中高2億円)。75周年記念行事の一環としてミス・ゲルハートを招待(4・5月)。	
1962 (昭和37) 年	多賀城市に工学部を開設。同校地に幼稚園を開設。ライシャワー駐日米国大使夫妻来校(5月)。創立75周年記念事業募金局を設置(10月)。	
1963 (昭和38) 年	鈴木義男理事長死去(8月)。杉山元治郎、理事長に就任(9月)。押川記念館完成。工学部寄宿舎開設。大学オーディオ・ヴィジュアル・センター完成。野間記念剣道場完成。	
1964 (昭和39) 年	杉山理事長、西ドイツから大功労十字星章を受ける(1月)。文経学部を文学部と経済学部、文経学部2部を文学部2部と経済学部2部に分離、小林淳男文学部長、中村重夫経済学部長に就任。永井健三、工学部長に就任。大学院文学研究科(修士課程)を設置、小林淳男研究科長を兼任。杉山元治郎理事長死去(10月)。山根篤、理事長に就任(11月)。大学64年館完成(10月)。	東海道新幹線開通。東京オリンピック開催。
1965 (昭和40) 年	大学法学部を設置、津曲藏之丞法学部長に就任。大学院経済学研究科(修士課程)を設置、中村重夫研究科長を兼任。泉市に10万坪の校地を取得(5月)。同窓会にTG15日会誕生(5月15日)。工学部4号館完成(10月)。中学校新校舎、中高礼拝堂完成(11月)。大学土樋寄宿舎開設。	
1966 (昭和41) 年	大学院文学研究科(博士課程)を設置。大学院工学研究科(修士課程・応用物理学専攻)を設置、永井健三研究科長を兼任。創立80周年記念式典挙行。大学66年館完成(6月)。大学泉寄宿舎完成。青根セミナーハウス完成。TG山岳会、ヒマラヤ・ヒンズークシのコー・イ・バンダコール(6,843メートル)登頂に成功(7月・80周年記念行事の一環)。	中国文化大革命始まる。
1967 (昭和42) 年	工学部に土木工学科を増設。大学67年館完成(5月)。中高向山寄宿舎開設。	
1968 (昭和43) 年	大学紛争、本学にも波及、一部学生のハンスト強行、バリケード構築等により学内騒然となる(1・2月)。大学院経済学研究科(博士課程)、工学研究科(博士課程・応用物理学専攻)を設置。故シュネーダー院長、明治百年記念にあたり宮城県知事より顕彰(10月)。工学部5号・6号館完成(3月)。大学新研究棟完成(8月)。二関敬、大学学監に就任(11月)。	
1969 (昭和44) 年	山根篤理事長辞任(3月)、月浦利雄理事長就任(4月)。大学紛争再燃、学監・学生部長の監禁・押川記念館の占拠などにより、機動隊導入(6・7月)。佐藤昌彦、法学部長に就任。工学部旭ヶ岡寄宿舎完成。	大学運営臨時措置法公布。アポロ11号、月面着陸。
1970 (昭和45) 年	区画整理により住居表示変更(大学・土樋一丁目3番1号、中高・一番町一丁目9番1号)。	日本万国博覧会(大阪)開催。
1971 (昭和46) 年	大学経済学部および工学部にコンピューター導入(2月)。米国諸教会よりの援助金停止。大学院工学研究科修士課程に、機械工学専攻および電気工学専攻を増設。創立85周年記念式典挙行。月浦利雄、中学校・高等学校長を辞任(8月)、二関敬、中学校・高等学校長に就任(9月)。榴ヶ岡高校分離独立、五十嵐正躬校長に就任(9月)。情野鉄雄、大学学監に就任(9月)。	沖縄返還協定調印。

年 代	東 北 学 院 関 係 事 項	一 般 事 項
1972 (昭和47) 年	一部学生、学費値上げ問題を機に大学校舎を不法占拠、機動隊を導入(2月)。高山セミナーハウス完成(7月)。榴ヶ岡高校校舎完成(12月)。	日中国交正常化。
1973 (昭和48) 年	同窓会館完成(4月)。斎藤秀夫、法学部長に就任。米国アーサイナス大学に第1回夏期留学生を派遣(7・8月)。月浦利雄理事長死去(7月)。渡辺平八郎、幼稚園長に就任(7月)。	オイル・ショック。
1974 (昭和49) 年	小田忠夫、理事長を兼任(3月)。大学院工学研究科博士課程に、機械工学専攻および電気工学専攻を増設。月浦育英奨学金設定。	
1975 (昭和50) 年	大学院法学研究科(修士課程)を設置、斎藤秀夫研究科長を兼任。大学67年館増築完成(6月)。	ベトナム戦争終結。
1976 (昭和51) 年	創立90周年記念式典挙行。	ロッキード事件。
1977 (昭和52) 年	二関敬中学校・高等学校長辞任、田口誠一校長に就任。五十嵐正躬榴ヶ岡高校長辞任、小田忠夫校長を兼任。中村重夫副学長(学務担当)、情野鉄雄副学長(総務担当)に就任(11月)。	
1978 (昭和53) 年	大学90周年記念館完成(2月)。長谷川松治、文学部長に就任(6月)。TGヒュッテ全焼(8月)。大学礼拝堂新パイプオルガン完成(11月)。	宮城県沖地震。
1979 (昭和54) 年	工学部計算センター棟完成(3月)。中高赤レンガ校舎見送り式(3月)。大学78年館および部室棟完成(9月)。TGヒュッテ再建(10月)。東北学院展開催(十字屋仙台店、10月)。	
1980 (昭和55) 年	中高シュネーダー記念館完成(3月)。工学部機械工場および機械実験棟完成(3月)。児玉省三、副学長(財務担当)に就任(6月)。泉校地総合運動場および管理センター完成(9月)。榴ヶ岡高校、礼拝堂・社会科教室等完成(9月)。	
1981 (昭和56) 年	大学81年館完成(3月)。『東北学院報』発刊開始(4月)。情報処理センター設置。小田宣教基金設定。佐藤謙三、経済学部長に就任。総合運動場プール完成(5月)。創立100周年記念行事準備事務室設置(6月)。二関敬前中高長死去(8月)。榴ヶ岡高校第1回海外研修(8月)。工学部体育館完成(10月)。斎藤秀夫、副学長(学務担当)に就任(11月)。	
1982 (昭和57) 年	山根篤元理事長死去(1月)。小田忠夫院長・学長・理事長死去(3月)。情野鉄雄、院長・学長に就任。児玉省三、理事長に就任。大学第1回日本研究講座開講(5月)。米国アーサイナス大学R.P.リクター学長夫妻来校、国際教育交流協定を締結(6月)。図書館工学部分館完成(11月)。	
1983 (昭和58) 年	高校2部閉校(3月)。工学部礼拝堂完成(10月)。情野院長訪米、アーサイナス大学より名誉博士号を受ける(11月)。	
1984 (昭和59) 年	佐藤利三郎、工学部長に就任。中高第1回海外研修(7・8月)。五十嵐正躬元榴ヶ岡高校長死去(9月)。シュネーダー記念新図書館完成(11月)。	
1985 (昭和60) 年	大学整備計画案(教養部泉校地移転など)公表される(1月)。児玉理事長訪米、アーサイナス大学より名誉博士号を受ける(5月)。シュネーダー記念旧図書館、大学院校舎に改装(11月)。幼稚園新園舎完成(12月)。	
1986 (昭和61) 年	創立100周年記念式典挙行。	

発 刊 の 辞

東北学院長 情 野 鉄 雄

1986(昭和61)年、東北学院創立100周年を迎えるにあたり、記念事業の一つとして「百年史」の刊行を企画し、早くより資料の収集、整理等を行なって執筆の準備が進められておりますが、名著の評判の高かった『東北学院七十年史』も、3年おくれて1959(昭和34)年に刊行されましたように、今後なおしばらくの日時を要すると思われます。しかし100周年を機に、過ぎし道を振り返り、次の100年へのヴィジョンを立てるよすがともしていただくために、「目で見える百年史」とも申すべき写真誌を編集、出版することにいたしました。

写真誌の前例としては、『創立七十年写真誌』がありますが、今より30年前と較べますと、集まった資料の数はもとより、質的にも大きな変化がありますので、今回は版を大きくしたのみでなく、カラー印刷等も取り入れて、そのような面からも見栄えのするものにいたしました。

『創立七十年写真誌』は花輪庄三郎先生がほとんどお一人で心血を注がれたのですが、今回は百年史編集委員会が、本務のかたわらとはいえ、全力を挙げて従事して下さった賜物であります。

また資料収集については、国内外から多くの人々のご好意にあずかりました。東北学院で奉仕された多くの宣教師の先生方が卒業されたペンシルヴェニア州のランキャスター神学校にも大変お世話になりましたが、そこにはアーカイヴズ(文書保存庫)があって、明治以来の日本からの報告書や写真等がおびただしく保存されております。そうしたものを自由に駆使してでき上がったのがこの写真誌であります。直接編集にあられた委員諸氏に感謝申し上げるとともに、陰の力となってこれを可能にして下さった方々にも深く謝意を表したいのであります。

これを機会に、東北学院のアーカイヴズも今後益々充実するよう力を尽くして参りたいものであります。

TO THE READERS

Shozo Kodama
Chairman of the Board of Trustees

As Chairman of the Board of Trustees of Tohoku Gakuin, I feel it to be a great honor and high privilege to say a few words at the completion of this pictorial history of our alma mater, Tohoku Gakuin, on the occasion of its centennial celebration. My sincere hope is that this volume will help us understand the founding spirit of the school with greater clarity and deeper sympathy and shed light on our search for a course into the second century.

As described in this book, Tohoku Gakuin was originally founded in 1886. As might be expected, the history of the school since then has been full of twists and turns in correspondence to the total framework of Japan's national destiny and its educational vicissitudes. No words can properly express our feeling of gratitude for this centennial celebration, so long and so carefully prepared for and so ardently anticipated by us all.

In the past one hundred years, Tohoku Gakuin has grown up to be a large educational institution, with an enrollment of some fifteen thousand at university, junior and senior highschool levels. Full-time faculty and staff now number nearly seven hundred in all. More than eighty thousand alumni/ae are active in all spheres of society, both in Japan and overseas. For all these remarkable developments, our prayer of thanksgiving is entirely due to The One Who is the true Founder of the school and its continuous guiding Light throughout the past.

We wanted to publish a full-volume school history. The editorial committee, with Prof. Masatoshi Ogasawara as Chairman and Prof. Akira Demura as General Editor, has been energetically collecting a substantial amount of source materials, both in Japan and in the United States, toward the fulfillment of the assignment. It has become obvious, however, that it will take still more time to go through all these primary sources and publish a full-scale history, equal to that which was published at the time of the seventieth anniversary. It was decided, therefore, to bring forth a pictorial history, with the promise of a companion volume. I am exceedingly happy to find that it is so well edited, with some six hundred photographs and other highly interesting materials.

You will notice that the past one hundred years are divided into six periods, each of which is impressively traced and described, visually and concretely. I am convinced that this volume will enable us to revisualize our past and envision our future. I would very much like to invite the readers to join us in offering the most heart-felt thanks and praise to our Gracious God and the Providence that has led the entire course of our historical past since the foundation of the school.

I would also like to express my personal thankfulness to those who assisted us so greatly and effectively by donating and/or lending us a large number of priceless materials, without which this book would have been much less vivid in its presentation. The efficient and conscientious accomplishment of the editorial committee deserves our special commendation. By way of their continued efforts, we do look forward to the publication of the history book in the near future.

あ と が き

百年史編集委員会が第1回の会合を開いたのは、1981年10月のことであった。そのとき、委員会の目標として(1)資料篇(2)通史篇(3)写真集(創立100周年記念式において配布)の刊行計画案が討議された。そして当分の間資料収集に集中することにし、学内外に広く資料の提供を訴え、その結果約3,500枚の写真、絵、スケッチなどを得た。こうしてようやく2年後の夏、写真誌編集の打ち合わせを行ない、時代区分や各時代ごとの編集担当者を定め、とりあえず3,500枚の中から1,000枚を選定することとした。

編集委員会は毎月のように討論を重ね、1984年に印刷業者が決定すると、再び夏の集中作業を行なった。写真誌は大版で全頁カラー、時間的空間的拡がりや厚みを表現することを編集の基本方針とし、個々の写真にストーリーとしての連続性を与え、全体として一貫したヒストリーを描き出すことを目指すことにした。写真の他に公的・私的文書、統計グラフ、スケッチ、イラスト、地図なども加え、また各章にそれぞれふさわしい表題を付けることなどを決めた。なお海外の教友を想定して写真の説明文は和英併用とし、年表、略史(和英)を加えて読者の便を計ることにした。こうして『東北学院創立70年写真誌』をはじめ他の学校の写真集も絶えず参照しながら、本学院として特色あるものにしたと念じつつ編集作業を続けた。1985年の夏は、実務スタッフを中心に精力的に作業を押し進め、ほぼ11月末までに原稿が完成し、創立100周年記念式に間に合うに至ったのである。

この間、教職員をはじめ、国内外の同窓生、河北新報社など新聞各社、諸団体に多大のご支援、ご協力をいただいた。そのことを思い深甚の謝意を表したい。また編集委員会の意図をよく理解し、努力を惜しまなかったプレスアートならびに今野平版の担当者各位にも感謝したい。そして東北学院を今日あらしめた先人たちとその労苦に、改めて敬意と感謝の思いを強くする。

編集委員会は、「建学の原点に立ち帰り、新しい100年への展望を得る」という百年史編集の目標が、ここに実現されていることを願う。読者が本書によって始めて目にする珍しい写真も多いはずである。このいわば「目で見る東北学院」を通して、「目で見えない東北学院」に目を注いでいただきたいと心から希望する。

百年史編集委員会委員(ABC順)

出村 彰 (主任)	大江 善 男
遠藤 義 夫	小笠原 政 敏 (長)
日野 哲	大河内 雅 夫
樋渡 順 一	櫻 井 傳
五十嵐 之 雄	高 橋 英 吾
稲垣 弘 輔	竹 井 一 夫
松浦 平 蔵	土 戸 清
西山 良 雄	四 津 隆 一

東北学院の100年

1986年5月15日 発行

編 集	東北学院創立100周年記念 百年史編集委員会
発行者	学校法人 東北学院 仙台市土樋一丁目3番1号
制 作	株式会社 プレスアート 仙台市中央三丁目2番1号
印 刷 製 本	今野平版印刷株式会社 仙台市六丁の目西町6-5